

# 平安京左京内5遺跡

平安京跡研究調査報告

第22輯

財團法人 古代學協會  
京都

平成20年

## 平安京左京内 5 遺跡

### 平安京左京四条三坊十三町跡

りそな銀行新築工事に伴う調査

### 平安京左京五条三坊十六町跡

三菱東京 UFJ 銀行新築工事に伴う調査

### 平安京左京六条二坊二町跡

馬淵診療所新築工事に伴う調査

### 平安京左京六条四坊六町跡

京都府民共済生活協同組合用地

### 平安京左京九条三坊一町跡

三越ユニティー用地

## 序

古代學協会は平安京の総合的な研究を実施してきたが、一方では共同体の研究や古代国家の成立の問題にも取り組んできた。とりわけ平成6年には平安建都1200年を慶祝する記念行事の一環として企画・編輯した『平安京提要』を刊行し、『平安通志』以来100年間の平安京研究を集大成することとなった。また平成10年に当協会内に発足させた『初期王権研究委員会』によって平成15年には、『古代王権の誕生』全4巻が刊行し、他に類を見ないこのような研究によって、遅れていた王権の成立や初期王権の構造とその発展についておおいに貢献することができた。

平成4、5年に発掘調査を実施した、旧あさひ銀行（現りそな銀行）京都支店の地は平安京左京四条三坊十三町に当たり、藤原頼通の孫で平安時代後期の12世紀初期に民部卿となった藤原忠教の邸跡であり、当協会でもかつて昭和57年にこの南側の三井銀行（現三井住友銀行）で調査を行ない、報告書を刊行している。またこの西南にある池坊短期大学は平安京左京五条三坊八町に当たり、11世紀の初めに右近衛中将・源雅通の邸宅があったところであり、調査を実施した結果、大量の弥生式土器が出土し、四条烏丸一帯に綾小路遺跡といわれる大規模な環濠集落があることが判明した。現在の京都の市街地においてこうした遺跡が発見されたことは、日本の古代国家の成立を研究する上においてもさまざまな問題を提起することとなった。

調査に当たり、当時当協会会长で協和銀行名誉顧問であられた色部義明氏には多大なご尽力をたまわり、また調査期間中にも現地に足を運ばれたがこの報告書の刊行を待たれずに平成13年8月12日に逝去された。そのご好意にはたせなかつたのはまことに残念であります。

平成16年6月

（財）古代學協会

理事長 角田 文衛

前頁の序は本報告書を刊行することとなっていた平成16年に  
角田文衛理専長が執筆されていたものをそのまま掲載すること  
とした。

## 例　　言

1. 本書は旧協和銀行京都支店の改築工事に伴い、(財)古代學協会・古代學研究所が受託した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成4年10月1日から11月25日までと、平成5年2月4日から2月20日までの二回に分けて実施した。
3. 調査は江谷寛が担当し、前川佳代を調査員として実施した。
4. 出土遺物の整理・実側は江谷寛と前川佳代が行なった。
5. 遺構と出土遺物の写真撮影及びトレースは江谷寛が行なった。
6. 報告書の作成は江谷寛と前川佳代が執筆し、自然遺物については渡辺誠（名古屋大学名誉教授）に依頼した。編集は江谷寛が行なった。

# 平安京左京四条三坊十三町跡

りそな銀行新築工事に伴う調査

序 i

例言 ii

## 目 次

第 1 章 調査の経緯 .....	1
第 1 節 調査に至る経緯 .....	1
第 2 節 調査地について .....	2
第 3 節 周囲の状況 .....	3
第 2 章 調査の概要 .....	4
第3章 層序と遺構 .....	6
第 1 節 北トレンチ .....	6
第 2 節 中央トレンチ .....	10
第 3 節 南トレンチ .....	12
第 4 章 出土遺物 .....	15
第 1 節 弥生土器 .....	15
第 2 節 瓦 .....	15
第 3 節 須恵器 .....	15
第 4 節 灰釉陶器 .....	20
第 5 節 緑釉陶器 .....	20
第 6 節 輸入陶磁器 .....	20
第 7 節 土師器 .....	20
第 8 節 陶磁器 .....	20
第 9 節 瓦質土器 .....	23
第10節 土製品 .....	23
第11節 金属製品・貨銭 .....	29
第12節 石製品 .....	29
第13節 製塩土器・焼塩壺 .....	29
第 5 章 自然遺物（動物遺体） .....	30
第 6 章 第二次調査の概要 .....	32
第 7 章 まとめ .....	34

## 挿 図 目 次

第1図	平安京の条坊調査地点 .....	1
第2図	調査位置図 .....	2
第3図	トレンチ位置図 .....	3
第4図	周辺の調査地 .....	4
第5図	三坊十三町の計測値 .....	5
第6図	第1次・第2次調査位置 .....	5
第7図	第1次調査トレンチ平面図 .....	7
第8図	北トレンチ東・北・南断面図 .....	8
第9図	中央トレンチ北断面図 .....	10
第10図	中央トレンチ町境平面図・断面図 .....	11
第11図	南トレンチ東・南断面図 .....	13
第12図	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦 .....	16
第13図	北トレンチ出土遺物(1) .....	17
第14図	北トレンチ出土遺物(2) 土師器皿 .....	18
第15図	北トレンチ出土遺物(3) 水指・擂鉢 .....	19
第16図	北トレンチ出土遺物(4) 香炉・鍋 .....	21
第17図	北トレンチ出土遺物(5) 陶磁器 .....	22
第18図	北トレンチ出土遺物(6) 陶磁器・土製品 .....	24
第19図	南トレンチ出土遺物(1) .....	25
第20図	南トレンチ出土遺物(2) 陶磁器 .....	26
第21図	南トレンチ出土遺物(3) 陶磁器 .....	27
第22図	金属製品・石製品 .....	28
第23図	第2次調査トレンチ北断面図・平面図 .....	33
第24図	SX3、SX4平面図・断面図 .....	34

## 図 版 目 次

### 図版第1

- 1 調査前の状況 東南から
- 2 調査前の状況 東南上方から

### 図版第2

- 1 トレンチ全景 西上方から
- 2 北トレンチ 南上方から

### 図版第3

- 1 北トレンチ北端 西南から
- 2 北トレンチ北端 南から

### 図版第4

- 1 北トレンチ遺構 東南から
- 2 北トレンチ遺構 東から

### 図版第5

- 1 北トレンチ 遺物出土状況
- 2 北トレンチ東壁 魚骨出土状況

### 図版第6

- 1 北トレンチ南端 西北から
- 2 南トレンチと中央トレンチ東半 北から

### 図版第7

- 1 中央トレンチ町境 西側
- 2 中央トレンチ町境 西北から

### 図版第8

- 1 中央トレンチ町境ピット列 南から
- 2 中央トレンチ町境ピット列 東北から

### 図版第9

- 1 南トレンチ 北から
- 2 南トレンチ 四行八門遺構 西から

### 図版第10

- 1 南トレンチ 東北から
- 2 南トレンチ 西北から

### 図版第11

- 1 第2次調査状況 西南から
- 2 第2次調査遺構面 西南から

### 図版第12

- 1 第2次調査遺構面 西北から
- 2 第2次調査遺構面 西から

### 図版第13 出土遺物 (1)

### 図版第14 出土遺物 (2)

### 図版第15 出土遺物 (3)

図版第16 出土遺物（4）

図版第17 出土遺物（5）

図版第18 出土遺物（6）

図版第19 出土遺物 魚骨

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

現在の「りそな銀行」京都支店の前身は、昭和20年5月に当時の不動貯蓄銀行や安田貯蓄銀行など有力な貯蓄銀行九行が合同して設立された日本貯蓄銀行であったが、その後昭和23年7月に普通銀行の協和銀行となった。その場所は京都市中京区烏丸四条上ル筆町（たかななちょう）691で、今日の京都の経済の中心地ともいべき主要銀行や金融機関が集まっている所である。この位置において協和銀行は建物を全面的に改築する計画がおこり、古代学協会が事前の埋蔵文化財発掘調査を依頼されることとなった。当時協和銀行名譽顧問であった故色部義明古代学協会会长にはこの間において多大な御尽力をたまわり、発掘調査の現場にもご視察にお出で頂いた。なおこの調査後、平成3年に協和銀行は埼玉銀行と合併して協和埼玉銀行となり、更に平成4年には「あさひ銀行」京都支店と改称され、平成15年には大和銀行と合併して現在は「りそな銀行」京都支店となっている。

発掘調査は工事の工程との関係で二期に分けて実施することになり、第一次調査は平成4年10月1日から11月25日まで40日間と、第二次調査は平成5年2月4日から2月20日まで15日間実施し、その後遺物整理にかかった。調査体制は以下の通りである。

調査主体 (財)古代学協会

調査担当者 江谷 寛 (古代学研究所教授 現 古代学協会理事)

調査員 前川佳代 (古代学研究所嘱託 現 京都造形芸術大学非常勤講師)

作業員 橋本庄次、橋本俊夫、三谷正三、坪内助松、安田秀男、鎌田定一、中本俊樹

伊藤三郎、中山祥夫、田中照男、峰 繁義

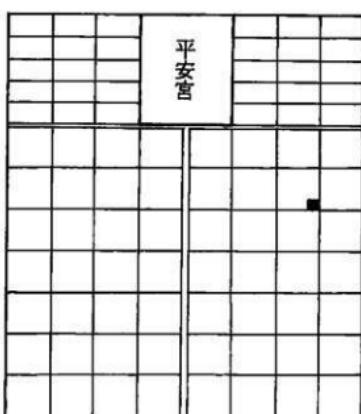
また調査期間中を通じて次の方々から終始ご指導、ご協力を受けた。

故・杉山信三 (京都市埋蔵文化財研究所 所長)

故・浪貝 駿 (京都市埋蔵文化財調査センター所長)

波辺 誠 (名古屋大学文学部教授、現 名古屋大学名誉教授)

宮崎幹也 (滋賀県近江町教育委員会、現 米原市ルッチプラザ館長)



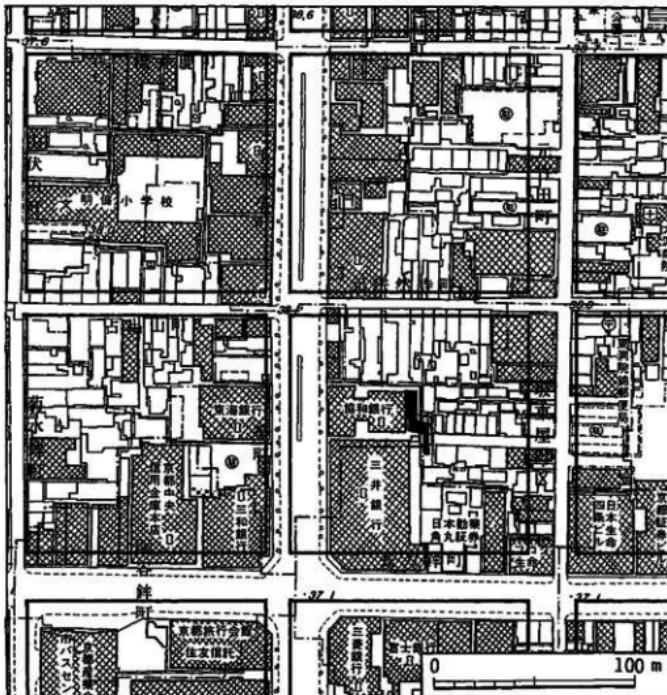
第1図 平安京条坊の調査地点

## 第2節 調査地について

発掘調査を実施した位置は、平安京の条坊でいえば、平安京左京四条三坊十三町にあたり（第1図）、その中のほぼ中央部分に相当する西三行、北三・四・五門である（第4図）。

この十三町の中のトレーニングの位置について、京都市埋蔵文化財研究所に基準点測量を依頼して基準杭を設置した（第5図）。

『仁和寺所蔵古図』によれば、この十三町の東南部分には、平安時代後期には藤原師実の五男である民部卿藤原忠教の邸宅があったことが記されている。藤原忠教は藤原頼通の孫で、康和二年（1100）に参議となり、中納言から保安三年（1122）には大納言にまで昇進している。この他にも四条以北には、平安時代を通じて貴族の邸宅が特に多く建てられた地域でもあった。現在の筈町は、北は現在の錦小路通り（平安京の錦小路）と、南は四条通り（平安京の四条大路）の間にあり、烏丸通り（平安京の烏丸小路）の東西両側に広がる町で、祇園祭の山鉾のひとつである『孟宗山』から付けられた町名である。この話は中国の呉の國の孟宗が、冬に母親が筍（笋）をほしいと言ったので竹林へ出かけていったが、筍がなくて悲しんでいたところ、雪の中から若い筍（笋）が生えてきたという親孝行の故事があって、これに因んだ町名である。この筈町の東側は坂東屋町、東南は長刀鉾町、西は函谷鉾町であり、中世以来の祇園会の鉾の町である。今回の調査地は、東の坂東屋町との町境で、一部は坂東屋町にまたがっている（第2、3図）。



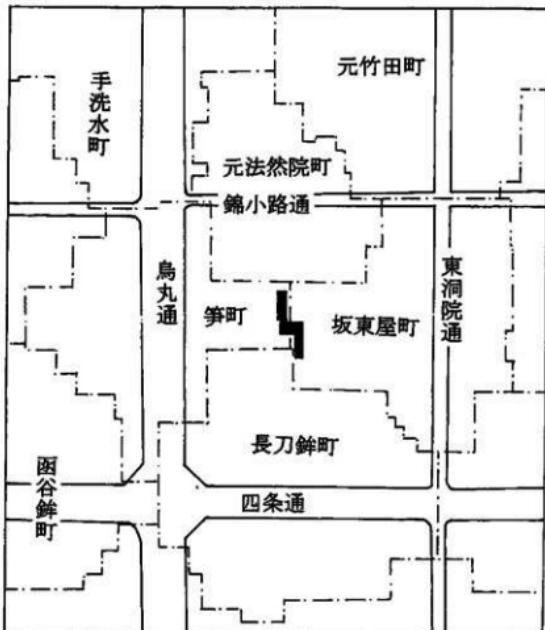
第2図 調査地の位置

### 第3節 周囲の状況

四条烏丸を中心とする東西300mほどの地域は、弥生時代の縦小路遺跡で、古代学協会が調査した三井銀行（現三井住友銀行）をはじめ、富士銀行（現みずほ銀行）、池坊学園短期大学校地内などでも弥生式土器が出土している。

今回調査した地点と関連のある遺構としては、平成元年に（財）京都市埋蔵文化財研究所が、北側の大丸百貨店駐車場で発掘調査をして、弥生式土器の混入した、南北方向の溝が検出されている。平安時代の遺構については、後世の遺構や築地によって削平されてしまっていて、全体に遺構の残存状態は良くなくて、そこでは調査地全面に平安時代の整地層と、その上面で多数の柱穴などのピット群を検出している。調査地の中央よりやや西で、幅1.5m、深さ50cmの南北方向の溝を検出しているが、四行八門には合致しないので、これを宅地割りに関するものとみている（第4図）。江戸時代では中期の遺構が中心で、錦小路に面して井戸があり、裏庭には堀を巡らした蔵が南北方向に一列に並び、それが一セットとなって10数m毎に東西に並んでいた。ここでは町屋境が不明瞭であったが、現在でも見られるような、短番型の細長い地割りであったことが明らかになった。

次に今回の調査地の南側の三井銀行（現三井住友銀行）で、昭和57年に古代学協会が実施した調査では（第4図）、弥生時代の溝の他に、調査地の西寄りで四行八門の境界にはほぼ合致する溝（SD515）が検出されており、反対の東側では西二行と西三行にはほぼ合致する溝（SD148）が検出されている。この溝は今回の調査で検出した溝（SD02・SD04）とつながるものとみられる。更にこの調査地の東北部分で池状の遺構が検出されているが、これも今回の調査において、南トレンチの南端で検出した池状の落ち込みと関連する遺構と考えられる。



第3図 トレンチの位置

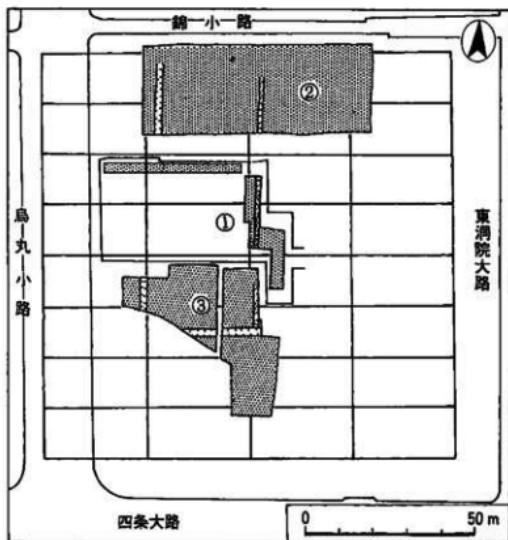
## 第2章 調査の概要

調査当時の協和銀行の敷地は、烏丸通りに面して間口が約30mと、奥行きが約50mの長方形であるが、烏丸通りから奥に40mまでは建築当初の地下室によって既に破壊されており、わずかに建物の北側において南北5m、東西40mの部分と、建物の裏になっている東側で南北30m、東西8mの部分が残っていた。更にこの東側の坂東屋町になる部分で、旧三井銀行の東側にも南北10m、東西5mの南北に細長い部分があった（第4図）。

発掘調査は初めに記したように、工事の工程との関係で二度に分けて実施し、第一次調査は建物の東側約200mにかかり、2ヶ月後に第二次調査で北側300m<sup>2</sup>を調査した（第6図）。

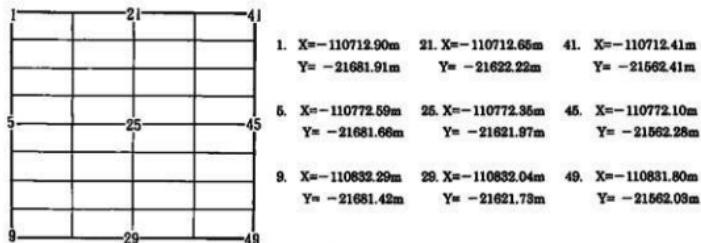
第一次調査では、弥生時代の長刀鉢町遺跡に関する遺構が検出されるのではないかという点と、平安京に関しては、条坊制の一町のほぼ中間に当たっていることから、四行八門に合致するような遺構と、或いは藤原忠教の邸宅が検出できるのではないかと言う点と、近世以降の町名から見て、町堀になっている所が平安京の遺構とどのように関係しているかという四点について留意して調査を実施するように計画した。

第一次調査の調査地は、旧協和銀行の東側部分と、旧三井銀行の東側の部分であって、そこに調査可能な最大限のトレンチを設定した。そのためトレンチは南北に長い二つのトレンチを中心で繋ぐ形となり全体としてクラシク状のトレンチとなつたので、それを北トレンチと南トレンチとした。この二つのトレンチは東西に10mほど離れているため、北トレンチの南端と、南トレンチの北端を繋ぐ形で東西方向の中央トレンチを設定した（第7図）。



第4図 周辺の調査地

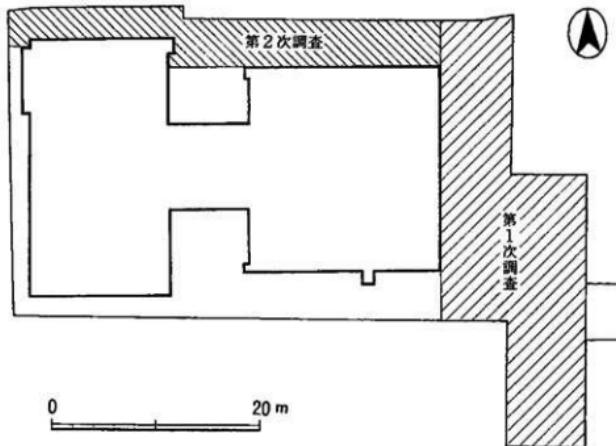
- ①今回の調査
- ②大丸駐車場（市埋文研 平成元）
- ③三井銀行（平安博物館 昭59）



第5図 左京区四条三坊十三町の位置

掘削は、周辺の調査の状況からみて、表土下1.5mまでは殆ど全面に削平を受けており、何度も埋め戻しと整地を繰り返して搅乱されていると推定されたので、遺構面が検出される少し上面まで一気に掘り下げていくことにした。

第二次調査は旧協和銀行の建物の北側で、大丸百貨店駐車場との間であるが、調査を開始した時には工事の工程で既に旧建物の大部分は掘削され、全面に日鋼が打ち込まれていた。そのため調査地も大部分が削平されており、かろうじて南北方向の溝とトイレ状遺構が検出でき、調査地の西端の烏丸通りに面した所で、銀行の建物より以前の、レンガを積んだ商家の建物の基礎が検出された。



第6図 調査範囲

## 第3章 層序と遺構

### 第1節 北トレンチ

北トレンチは長さ15m、幅5mであるが、トレンチの西半分は丁度銀行の地下室のコンクリート構造物が残っており、銀行を建築した当時の建物の基礎とその覆土があり、江戸時代の整地面や埋土を全て削平しており、最も深い部分では表土下2.5mまでも達しており、一部では平安時代の遺構面までも破壊されていた。従ってここから西へは進めることはできなかったため、トレンチの床面では3mの幅しか調査できなかった。また南北の長さは21mであるが、南北二つのトレンチを繋ぐための中央トレンチを設定しているため、このトレンチの南端部分は中央トレンチになっており、壁面は南北15mを観察することになった。深さは2mである（第8図）。

トレンチの北端では、現地表下1.5mに若干淡緑色を帯びた黄褐色の泥砂土層があって、この中に摩滅した弥生土器の小片が混入していたが、この周辺の遺跡から、この土層が平安時代の整地面と考えられる。東壁断面でみると、北トレンチでは全面に水平な、平安時代の整地面があって、それから上に平安時代以降の堆積層があったが、近世初期の17世紀頃から何處か削平を繰り返し、その掘削跡に瓦、陶磁器片、貝殻、魚骨などが混入した大量の焼土や炭で厚く埋めて整地をした状況がわかる。この整地面は現地表面から50cmほどで、周辺の遺跡でも広範囲に見られ、出土遺物から元和元年の火災の後と見られている。

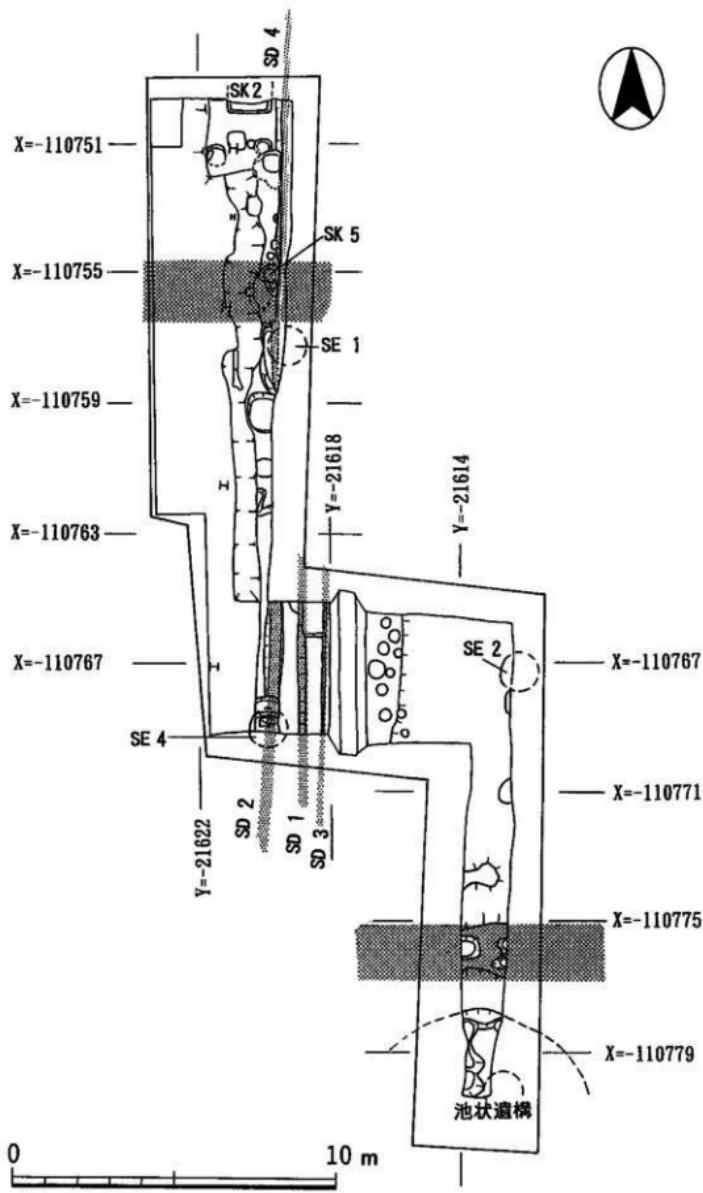
このトレンチ内では少なくとも三回の掘削があったことがわかる。一つ目の掘削はまずトレンチの中央から北半分で大きく掘削があり（第8図II）、この時に平安時代の遺構を若干削平している。この掘削は土取りによる掘削の後に炭や灰炭泥じりの黒褐色土などさまざまな土砂で埋め戻し、一旦整地している。この整地が前述のように元和元年の火災の後である。整地面の高さはほぼTP37mである。この埋土の中には平安時代後期の瓦（第12図）、綠釉陶器片（第13図17）の他に室町時代から江戸時代18世紀までの遺物が混在した状態で出土している。ただしこの最初の掘削も、北壁断面から見ると、その前に既に掘削と埋め戻しがあって、その埋め戻しの堆積土を掘削していることがわかる。

二つ目の掘削はトレンチの中ほどから若干南へ寄った位置であるが、埋め戻しの状況をみると元和元年の整地面を切っていることから、掘削はそれより以後である（第8図）。なおこの掘削IIによる埋め戻しも、同じく元和元年以後に掘った井戸（SE01）によって崩されている（第8図東断面図VI）。

三つ目の掘削はこのトレンチの南端で、地山を大きく削平した穴があり、前後六回にわたって掘削と埋め戻しを繰り返した跡が確認できる。六回のうち最初の掘削穴に投棄した埋土の中には、桃山時代とその後17世紀初めの遺物が集中して多く出土している状況から、第一回目の掘削と埋土はほぼこの時期であったと推定できる。五回目までの掘削はかなり深くまで達しているが、六回目の掘削は土取りのためとは考えられないほど浅いもので、元和元年の火災以後のものである。この掘削のうち、最初の深い掘削穴は断面では幅が1mたらずであることから、単なる土取りの穴とは見えず、当初の低い地表面から掘りこんだ井戸であったと思われる。

トレンチの北壁断面を見ると、西側三分の一は銀行の地下室を作った時の掘削で遺構は削平されてしまつており、地下室のコンクリートが残っていた。また北壁断面の東側三分の一は既に掘削されて埋め戻されており、埋め戻した最も底部の暗灰褐色土の中に13世紀を主とした鎌倉時代の遺物が出土した。この時の埋め戻しの土層は元和元年以前に埋め戻されて整地したものであって、もっと南側にも広がっていたが、先に東壁断面で見た、一つ目の掘削によって無くなってしまっている。このように北壁断面では本来の包含層があったが、東側と西側が削平されてしまつていて包含層は北壁断面の中央部だけに残っていた。

この包含層は土壤（SK02）に堆積した層で、上半部が暗褐色土で、それから下に、灰褐色粘質土、黒褐色土など、厚さ10~20cmの層が10層ほどあるが、この層からは遺物は出土していない。



第7図 第1次調査全体図

東断面図

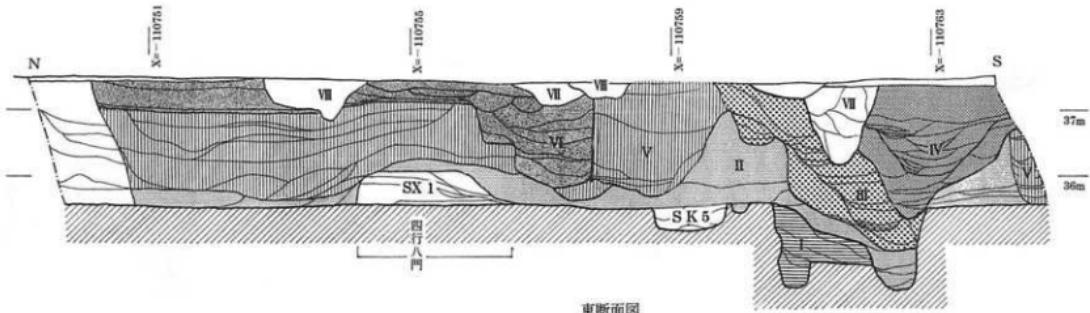
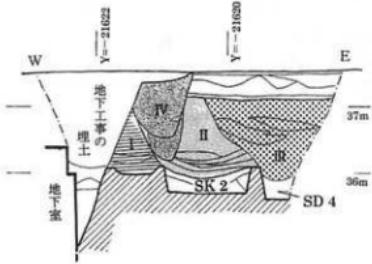


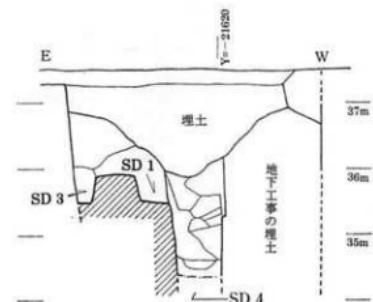
図8-27

北断面図



0 3m

南断面図



北トレントでは、調査前に既にトレントの中央部分に南北方向にH鋼が5本打ち込まれていたが、発掘調査によって地山まで掘り下げたところ、H鋼は地山から上に約1m突き出る形であった。この地山はいわゆる聚楽土と呼ばれる黄褐色の粘質土である。H鋼列の西側は銀行の地下室工事の時の埋土である。ところがH鋼の東側ではH鋼列に沿って幅約1mほどの部分が溝状に掘削されていた（SD05）。この溝状の掘削は偶然H鋼の列に沿っているが勿論工事によるものではない。このSD05の西肩から1m西側が四行八門の西二行と西三行との境界線が通る位置であるから、この境界線を中心にして、幅2mほどの通路の東側溝であったとも推定される。しかしあう一つの考えは、このトレントの東端が笄町と坂東屋町の境界であるから、丁度境界をなしている幅3mほどの南北の通路の西側の側溝であったともみられる。この溝状遺構の北端は土坑群によって破壊されており、南端は中央トレントの始まる位置で終わっている。溝の中には全体に暗褐色の砂が堆積していた。従ってこの北トレントでは遺構が掘り込まれている地山は、トレントの東壁と境界と見られる側溝との間のわずか1mほどの範囲しか残っていないかった。

北トレントで検出した遺構は土坑5（SK01～SK05）、井戸1（SE01）、溝1（SD04）の他に四行八門の位置に近い遺構としてSX01がある。

**SK01** トレントの北端に近い位置で、東壁の直下にあり、地山を掘り込んだ直径1mの土坑である。この土坑の東縁は溝（SD04）で削られているため東壁断面には現れていない。土坑内の堆積層は灰褐色土で11世紀から15世紀の土師皿7点と14世紀ごろの火鉢が2点出土している（第16図99・100）。SD04は出土物から見て15世紀には機能していたからこの土坑とは近い時期の遺構とみられる。

**SK02** 北壁直下で平安時代の整地面を掘り込んだ、方形の土坑であるが北側は北壁の奥に入っているため全体の大きさは不明であるが、北壁断面より南側で検出した部分は東西1.3m、南北45cmである。土坑としているが、北壁断面で見ると、北壁の東側の掘削より前の、土取りによる掘削の跡とみられる。土坑内の堆積は掘削の後の埋土で、遺物は出土していない。

**SK03・04** 北壁に近い地山に掘り込んだ1m前後の大きさの土坑であるがこれもSK02と同様の土取り跡で遺物は出土しない。

**SK05** 東壁の直下にあって、地山を掘り込んだ土坑である。南北1.2m、深さ40cmであるが東側がトレントの東壁の奥にあるため東西の大きさは不明である。この土坑もSK01と同様に、土取りの穴であるが、このトレントの近世以降の三回の大きな掘削より以前の掘削で、土坑内の堆積は埋め戻しの土で、上面は一旦水平に整地されている。遺物は出土していない。この土坑もSK01のように東側はSD04によって削られていると考えられる。

**SE01** 東壁のほぼ中央にあって、トレントで西半分は掘削されている。東壁断面に残っている部分が井戸のどちらか不明であるが、他の井戸から見て推定直径1.2m、深さは地表下1.5mで、元和元年の火災以後に掘られた井戸で、ほぼ水平な堆積で埋められている。この井戸を掘削した時に二つ目の土取りの埋め戻し跡を崩している。出土遺物はない。（第8図東断面図VI）。

**SX01** 東壁断面の中央よりやや北寄りに小窓を含む高まりがある。基底部で2.5m、上部で1.5m、高さ50cmの台形で、上端部は標高3.62mである。上層もこの部分を覆うように堆積しているため、平面で確認できなかつたがこの部分が畦状の高まりであったことがわかる。SD04のこの部分の埋土は砂利層や炭が混じった状態であったので、SD04が埋没した後に構築されたものと考えられる。平安京条坊の計測によれば、この畦状の高まりから南側1.5mが平安京四行八門の、北三門と北四門の境界線の通る位置であることから、この高まりが四行八門の境界となる通路であったと見られ、南半部分が削平されたものと判断できる。南トレントの南寄りで検出した畦状の高まりもこれと同様の遺構とみられる。

**SD04** 東壁の下端で検出した南北方向の溝である。東肩はトレントの奥にあって確認できなかつたが、幅50cm、深さ50cmまでは確認できた。溝内は暗褐色土が堆積しており、青磁（第13図33）や花生け（第15図92）が出土しているから15世紀代には溝として機能していたとみられる。この溝を南側へ延長した位置は、中央トレント

のH鋼列の西側で検出した3本の溝のうち、一番西側の溝（SD02）と方向が一致しているから同一の溝であり、ここでも青磁片が出土している。

## 第2節 中央トレンチ

北トレンチの南端と南トレンチの北端を接続する形で東西11m、南北幅6mの中央トレンチを設定した。このトレンチの中間部分には、既に建設工事のためのH鋼が南北方向に一列に打ち込まれ、その上部は薬剤を注入して固めていたため、この部分を土手状に残して東西の部分を掘りさげた（第9図）。

このトレンチの層序の状況は、北壁の断面で明らかのように、地山はH鋼の基部の位置が最も高く、東側と西側に向かって低くなっている凸状になり、堆積の様子が違っている。

H鋼の西側の堆積は、上下二つの堆積であるが、この断面の部分を北トレンチの南端の断面にあわせてみると、上半分の堆積は、北トレンチで見た三つの大規模な掘削のうち、四回目の掘削で削平された跡の堆積である。従ってこの下半分の堆積が最も古い土取りの掘削で、その跡に埋め戻したものであることがわかる。この下層堆積は焼土と炭泥じりの粘質土との互層が主となっており、縦部の扇面向付け（125）や焼塩壺、京焼碗などが出土している。特に上から5層目の黒色粘質の炭化層、6層目の暗褐色灰土、8層目の暗灰色粘質土からは完形に近い魚骨や鱗が多量に出土しており、魚類の同定と出土状況からみられる食文化史的な考察については渡辺謙教授に依頼し、第5章に報告して頂いた。

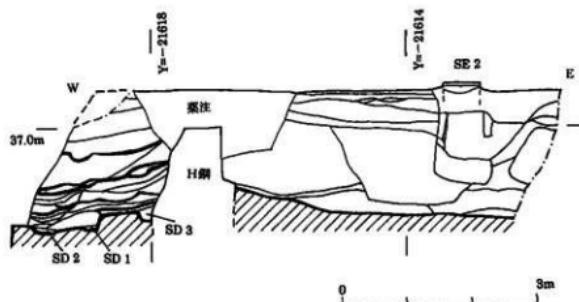
次にH鋼から東側の層序は、西側の堆積と違って、大きく2回掘削はされているが、埋め戻した堆積土は比較的単純な搅乱土で、やはり元和元年の火災後に整地している。この状況は南トレンチと同様である。

中央トレンチで検出した遺構はH鋼列の西側で溝が3本（SD1・SD2・SD4）、H鋼列の東側でピット群（P1～P10）、トレンチの北壁・東壁・南壁で井戸3（SE2・SE3・SE4）である。

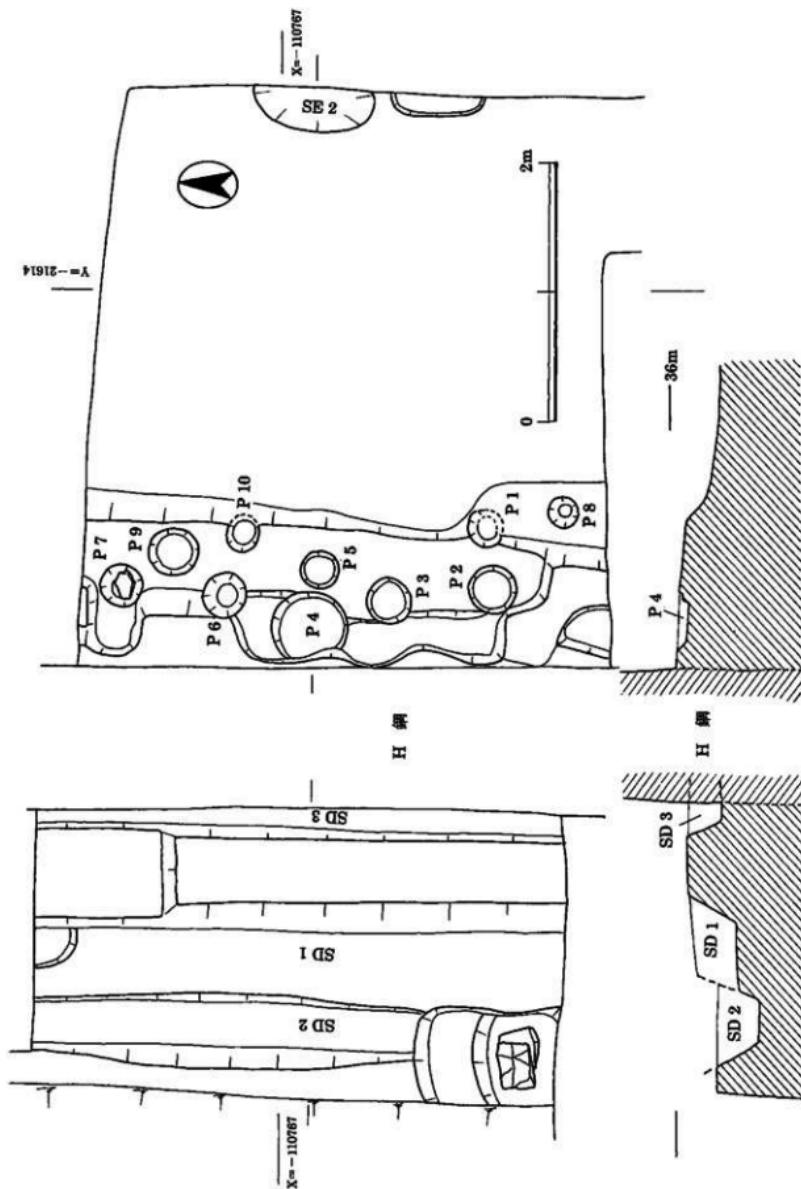
**SD01** 溝の西肩は確認できなかったが検出面では幅1.3m、深さ40cm、底部幅1mの逆台形で、溝中の埋土は灰黄色土である。このSD02は西肩が土取りの掘削で削除されているが本来は1.5mほどの幅で、この西肩のSD04の東肩を削っている。溝中から平安京IX～X期（15世紀後半～16世紀）の土師皿が出土している。

**SD02** 北トレンチの東壁で検出したSD04の延長にあって、検出面で幅60cm、深さは西肩寄りで30cm、底部幅は35cmの逆台形である。溝中から白磁が1点出土している（第13図22）。

**SD03** H鋼列の土手状の西直下で検出しがたが、東肩が土手状の中にあるため溝の全幅は確認できなかった。検出幅は25cm以上、深さ30cm、底部幅20cm以上で溝中の埋土は暗褐色土である。



第9図 中央トレンチ北断面図



第10図 中央トレンチ平面図

柱穴（P01～P10） H鋼列の東側で10個のピットを検出したが、殆どが同じくらいの大きさであること。同一方向に並ぶものがあること。ピットの中に石を据えたものがあることから柱穴群と見られる。この地山は黄褐色砂礫土である。

P01 直径26cm、16cmで埋土は暗褐色土。このピットの東南部分は暗灰色土の上に切り込んでいる。

P02 直径40cm、深さ20cmで埋土はP08まで同じくやや粘質の暗茶灰色土。

P03 直径34cm、深さ10cm。

P04 直径60cm、深さ7.5cm。このピットだけが特に大きい。

P05 直径30cm、深さ13.5cm。

P06 直径34cm、深さ18.6cm。

P07 直径38cm、深さ34.3cm。信楽B類の擂鉢が混入していた（第21図208）。

P08 直径34cm、ピットの中に礎板と見られる石が据えられていた。深さは不明。

P09 直径24cm、深さ11.2cm。暗灰色砂礫土の浅い落ち込みの下から検出した。

P10 直径26cm、深さ17.0cm。ピット群の高まった部分の若干東に寄った位置にある。

この10個のピット群を柱穴列と見ると、P02・05・07・09の三つと、P03・06・07の三つがそれぞれ一列に並んでおり、或いはP01とP10とが並ぶかもしれない。しかしいずれも若干東に振っている。ピットの中には土器の細片が多いが、P05では16世紀末から17世紀初めの土器が出土しており、柱穴列はそれ以後に構築されたものと見られる。

この柱穴列の位置は、四行八門の西二行と西三行との境界の推定中心線からは6m東に離れているが、現在の第町と坂東屋町との町境に一致しており、町境に関する築地のような施設と考えられる。またH鋼から西側の3本の溝のうち、特にSD01はこの町境に関係するものと見られる。

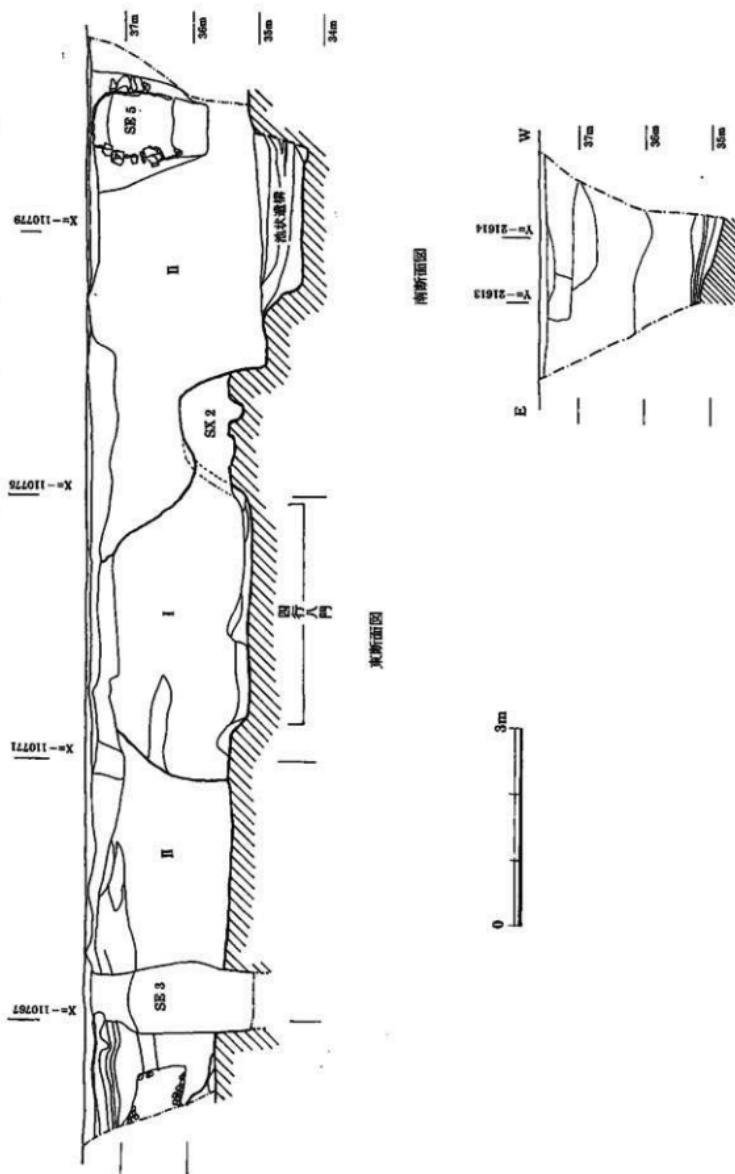
SE02 トレンチ北壁の東端で、現地表面から掘り込まれた井戸。検出した幅は1mで、深さは1.5mで上から50cmまで発掘したが、それより下方は井戸枠の瓦が崩落した状態で危険なため中止した。井戸枠として使用していた瓦は、縦29cm、横19cm以上、厚さ3.5cmで側面に○の中に「源」の刻印があり、凹面には滑車で付いた傷が多く見られた。元和元年の火災後の整地面を掘りぬいて作っていることから江戸時代末期の井戸と見られる。

SE03 トレンチ東壁で検出した井戸。掘削の後の埋め戻し堆積を掘って作っており、地山を掘り込んだ部分を50cmまで確認したが底までは検出できなかった。上面は元和元年の火災後の整地によって埋められている。直径は1m、確認した深さは2.5mである。

SE04 トレンチの南壁で、H鋼列の西側の断面の中央部分で検出した井戸。直径は80～90cmで深さは現地表から3.1mあって地山を掘り抜いている。この位置はSD04（SD02）の南端にあたり、完全にSD02を切断する形で掘られている。井戸の底には加工した石材が二段積まれていたが南壁が崩落する危険があるため石の検出のみにとどめた。井戸の上半部は掘削によって削平され、擾乱土で埋め戻されている（第8図南断面図）。

### 第3節 南トレンチ

旧三井銀行の東側で、坂東屋町になる位置である。中央トレンチの東から南へ、幅4m、長さ11mのトレンチであるが、造構面では幅1.5mしか作業ができなかった。調査を開始するに当たって当初から注意していたのは、このトレンチ内の北寄りの位置が平安京の北四門と北五門の境界線が通るということと、同時にその位置が長刀鉢町と坂東屋町との境界とも重なることから、こうした境界に関わる造構が検出されるのではないかということであった。ところがこの南トレンチは、北・中央トレンチと違って殆どが後世の削平を受けていた。従って出土遺物は、トレンチ南端の土器滴りから出土したもの以外の大部分は、埋め戻した擾乱土中から出土したものである。



第11図 南トレンチ断面図

このトレンチで検出した主な遺構は、上記した境界に関連する畦状の遺構（SX02）、井戸（SE05）、土器溜りと池状遺構である。

**SX02 南トレンチ** の中央から南寄りの位置で検出した、東西方向の畦状の遺構で、現地表下2mである。黄褐色砂泥土の地山を削り出した形で、幅2m、高さ50cmである。畦状の上面には浅いピット状の窪みがある。トレンチの東壁断面で明らかなように、この畦状の高まりから北側に3mの幅で30cmほど低くなっている。それから北側にまた高くなっている。北側で高くなった所には畦状の高まりは見られない。平安京条坊の計測では、丁度この3m幅の低い部分が四行八門の、北四門と北五門の境界線に一致しており（第4図）、同時に現在の長刀鉾町と筈町との町境とも完全に一致している（第3図）。

**SE05 東壁南端** で検出した井戸。この井戸もSE03と同様に、掘削の後の埋め戻しの堆積を掘って作っている。本体は石材を積んでおり、東半分はトレンチの壁面に残っている。井戸を作った時の掘り方から見ると、深さは現地表下1.8m、直径は1mで上部は削平されている。

**土器溜り** SX02から南の暗灰色粘質土中に土器溜りがあり17世紀中頃以降の土器が大量に堆積していた。

**池状遺構** トレンチの南端で深さ70～90cmの落込みを検出した。暗灰色粘質土が堆積しており、水分を含んでいるため木片が多くのこっていた。落込みの底部は黄褐色で漆喰のように固められていて、西側へ擂鉢状に傾斜している。この調査地の西側の旧三井銀行の調査では、調査地の北東で池状の遺構が検出されている。その位置は今回の調査地の池状遺構から10mほどしか離れていないから同一の遺構と考えられる。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 弥生土器

今回の調査で出土した遺物のうち、最も古いものは弥生土器である。北トレンチの地山直上から6点出土しているが遺構はなく、いずれも小片で、形式や器形を判別することはできなかつたが縫小路跡の遺物である。

### 第2節 瓦

瓦当文様のある平安時代後期の軒丸瓦が1点、軒平瓦が2点、その他丸瓦・平瓦片もあるがいずれも搅乱土（V層）からの出土である（第12図1～9、図版第13）。

1は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で弁の中央に縱線があり、明確な複弁となっているが弁間文は短い縱の線に省略されている。中房は花弁よりも若干低くなつており、1+6の蓮子がある。瓦当裏面には指圧痕がある。瓦当面に瓦筋の傷がある。この瓦筋と全く同じものが朝堂院跡と内裏内郭廻廊跡の調査で出土しており、その文様では蓮弁と周縁の間に二本の圓線にはさまれた珠文帯がある。北トレンチ搅乱層から出土。12世紀後半の平安時代後期の中央官衙系瓦。

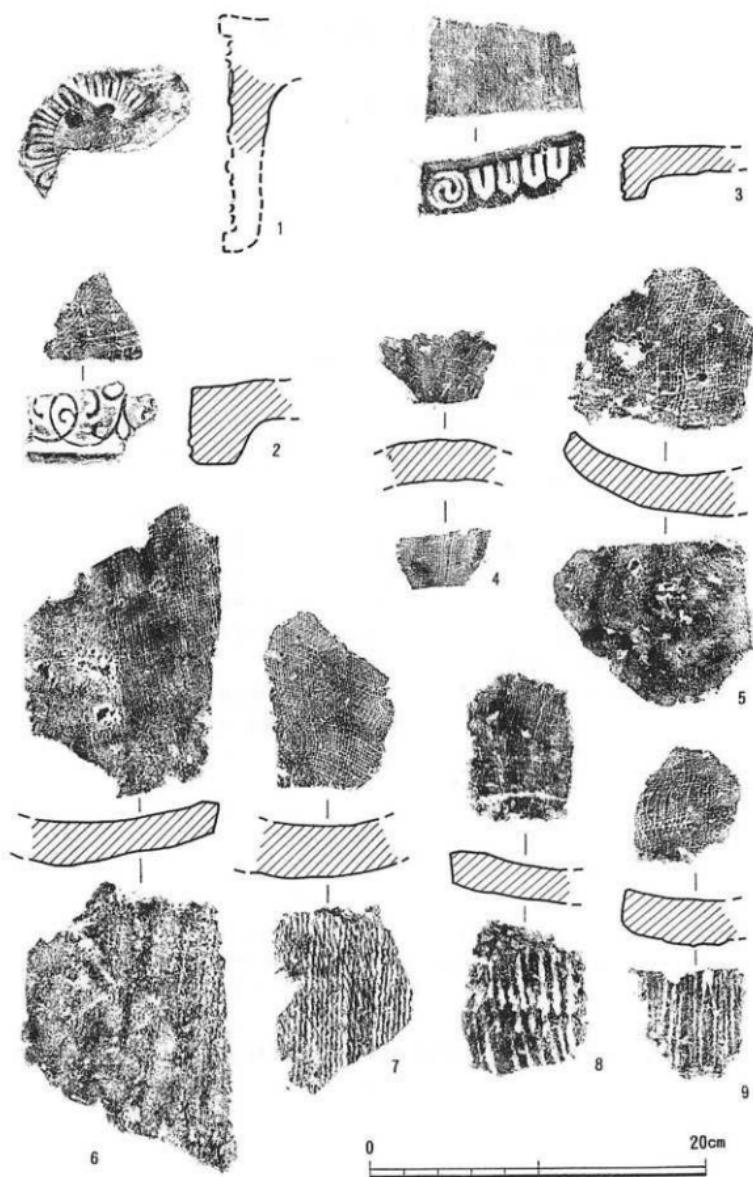
2は森ヶ東瓦窯産の均整唐草文軒平瓦。左右から反転して中央で交わる唐草文で、各単位には小さい枝葉が内側に巻いてある。茎の分かれ目には蕾のような表現がある。本来は瓦当上縁に周縁があったが瓦筋がずれて唐草文の上部が欠けてしまい、上面にすぐ布目がある。瓦当下端は幅広く、深く削った顎面には朱が塗られている。胎土に小礫が混入する。全体に赤褐色に火中して硬質になっている。類似した文様の瓦は豊樂院跡や法勝寺などで出土しているが、中央で交差した右側の唐草の内側に小さい枝葉がある類例はない。中央トレンチ西側の堆積から出土。12世紀後半の平安時代後期の中央官衙系瓦。

3は幡枝産の劍頭文軒平瓦。折り曲げ技法で成形しており、瓦当面にも布目が残る。中心に二つ巴を置き、左右に劍頭文を四つずつb類で並べる。折り曲げは直角で、凹面と瓦当面との角を斜めに削るが浅く布目が残っている。平瓦の凸面部と顎の接続部はヘラ削りで整形している。北トレンチ出土。全体に火中して赤褐色を呈す。4は丸瓦、5～9は平瓦でいずれも平安時代後期。

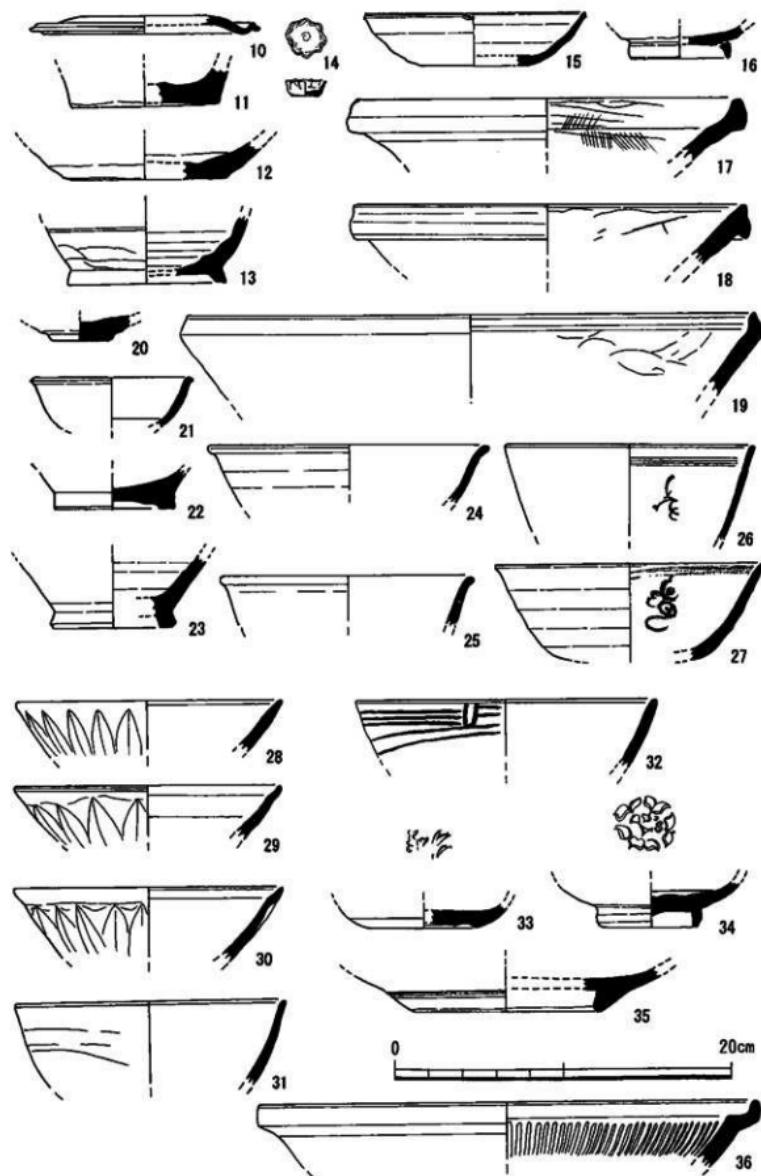
### 第3節 須恵器

今回の調査で出土した須恵器は7点だけ（第13図10～13.17～19）、いずれも北トレンチの出土である。10は福平な蓋で先端部が上に反転し、外面天井部にはヘラ削り痕がみられ、口縁部が斜めに外開きになる杯Bの蓋。口径13.8cm、残存高1.05cm。焼成良好、胎土密で淡灰青色。北トレンチの排土出土で、9～10世紀の平安時代前期。13は蓋の底部で、高台直径9.5cm。高台内面を斜めに削り、高台直上はヘラ削り痕がある。北トレンチV層出土。

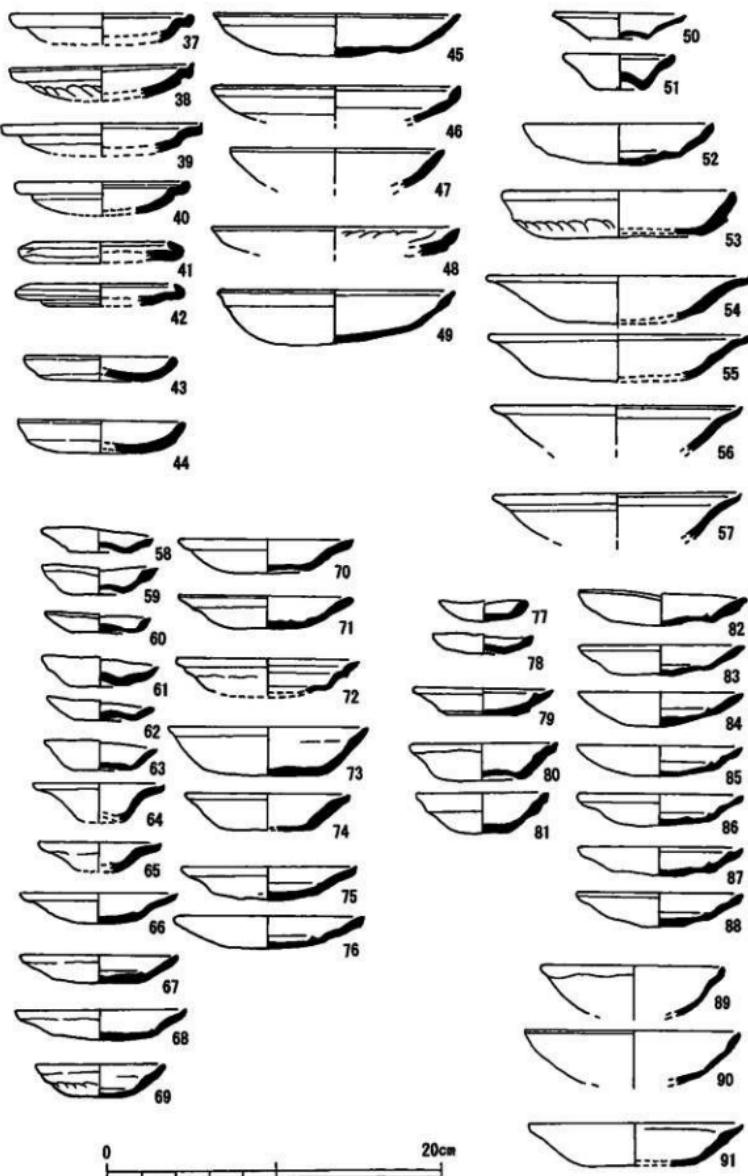
17～19は13～14世紀の東播系の製品で、17は口縁部外面が玉縁状に幅が広くなる。北トレンチV層出土。18は口縁下部が三角状になり、幅も広くなる。神出II-2の段階。19は口縁部を「く」の字に内曲する、唯奈古の東播系の鉢である。神出III-1段階の13世紀前半から後半とみられる。破片であるため片口は不明。いずれも北トレンチV層出土。



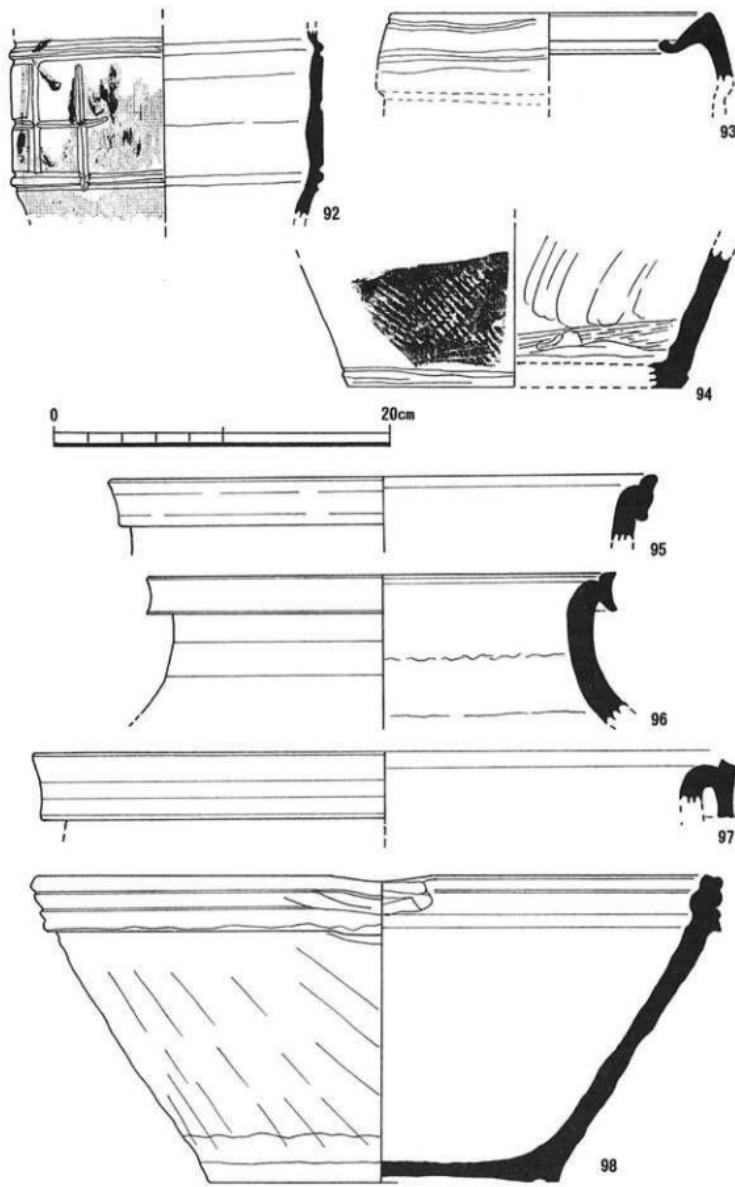
第12図 出土瓦類



第13図 北トレンチ出土遺物 (1)



第14図 北トレンチ出土遺物 (2)



第15図 北トレンチ出土遺物 (3)

## 第4節 灰釉陶器

北トレンチ堆積から3点出土している（第13図14～16）。14は輪花の入子で、口径2.3cm、高さ1cm、色調は白灰色、胎土密で焼成良好、13世紀頃とみられる。

15は口径11.8cmで口縁の一部に小さい片口がある。高さ3.5cm、内面に淡褐色の釉がかかる。いずれも北トレンチV層出土。16は北トレンチSX01出土。

## 第5節 緑釉陶器

北トレンチの褐灰色土（V層）から碗の底部が1点だけ出土している（第13図20）。

## 第6節 輸入陶磁器

北トレンチと中央トレンチのSD04で出土した青磁を含め、北トレンチから13点の青磁（第13図24～36）と、同じく北トレンチから白磁（21～23）が3点出土している。

21は黒褐色土（V層）出土。口縁部先端を斜めに外反する白磁碗。22はSD2から出土。23は搅乱土から出土した白磁碗。24・25はV層出土で口縁が外反する。26・27は内面の口縁下に細い沈線があり、体部に陰印刻草花文がある。27は北トレンチの二回目の掘削後の搅乱土の堆積から出土した、竜泉窯の青磁、内面に陰印刻がある。28～30は竜泉窯系の青磁碗で、13世紀後半とみられる。器厚がやや厚く、体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部は尖りぎみになり、外面に蓮弁文を施す。31は丸みをもつた体部で口縁端部はわずかに外反する。32は黒褐色土出土。口縁下に退化した雷文帯が付く竜泉窯の青磁で14世紀とみられる。33はSD4から出土。見込みに陰印刻花文がある基筒底の碗の底部。34にも見込みに陰印刻花文がある。35は基筒底の高台で見込みに草花とみられる陰印刻文がある。36は杯Ⅲ3aで口縁部は蓋受け状で内面に密に条線をつける。V層から出土。

## 第7節 土師器

土師器で最も出土の多いものは壺類で、その他に焙烙、土釜、つぼつぼ、土鉢などがある。

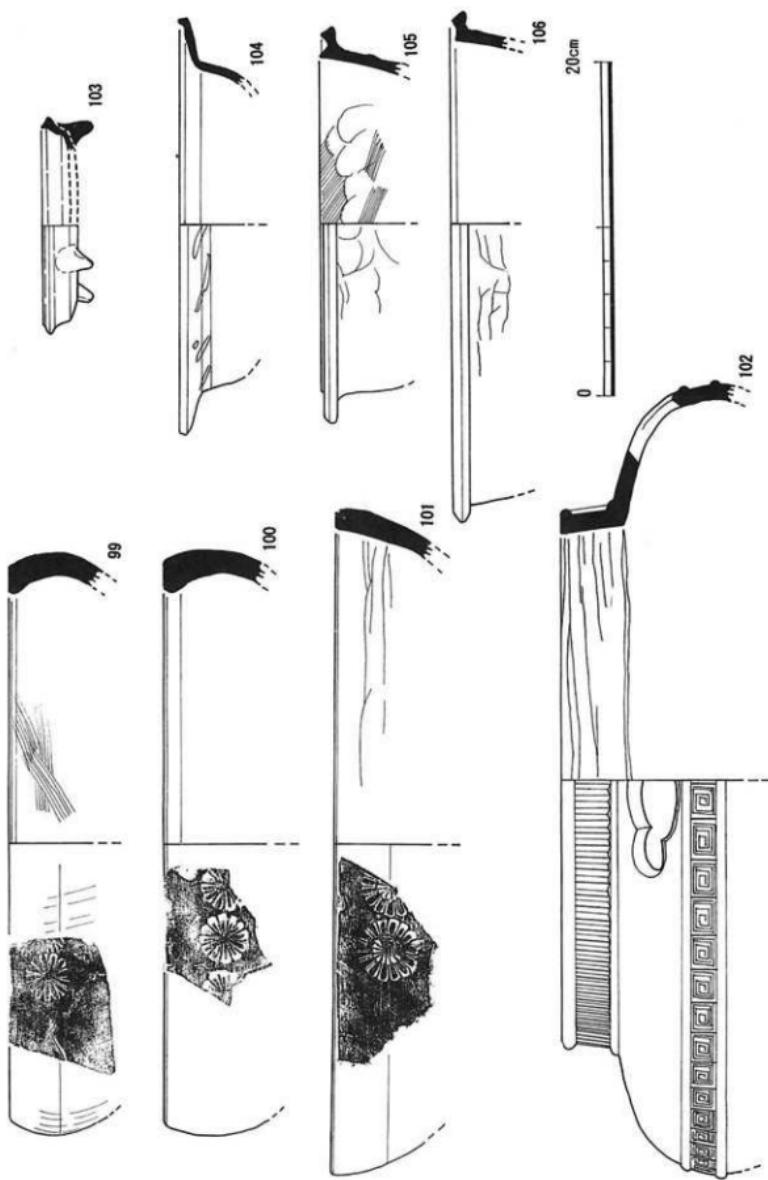
土師器の壺類は調査地全体から出土しており、最も古いものは10世紀末（平安京Ⅲ期）から、最も新しいものは18世紀（平安京ⅩⅢ）まであるが、北トレンチでは16世紀（平安京Ⅹ期）までのものが主となり、反対に南トレンチでは16世紀（平安京Ⅹ期）から18世紀（平安京ⅩⅢ期）のものに集中している傾向が明瞭である。50、51はSK01出土。

第14図37～49は京都Ⅳ、V期（11～12世紀）、45～49はV層出土で口径は12cm前後、京都Ⅴ期古段階の12世紀代。50～57は京都Ⅸ期（15世紀後半）では室町時代。58～76は京都Ⅹ期で16世紀代。78～91は京都ⅩⅢ期で18世紀以降。

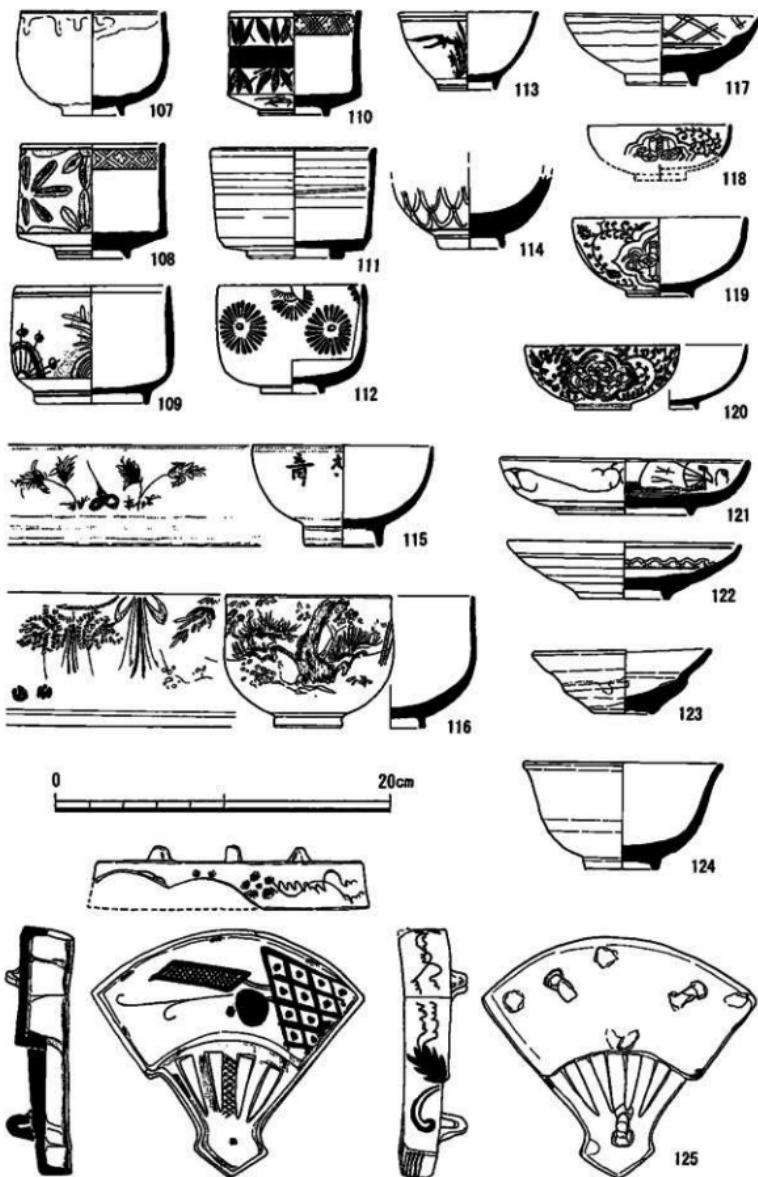
第19図は南トレンチ出土で、167～169は京都Ⅹ期の16世紀代であるが、他の140～166は京都ⅩⅢ期の18世紀以降である。

## 第8節 陶磁器

陶磁器類には志野、織部、唐津、丹波、常滑、伊賀、信楽、伊万里、京焼などで（第15、17、18、20、21図）、



第16図 北トレンチ出土遺物 (4) 瓦質土器



第17図 北トレンチ出土遺物（5）

他の土器類と同様に、近世の陶磁器類も比較的古式のものは北トレンチから出土し、伊万里など新しいものは南トレンチに集中して多く出土する。また中央トレンチの西側の一番古い掘削の後の埋土からも同じく、古式のものが出土する傾向が見られる。

196は今回の調査で出土した陶磁器類の中では最も古いもので、南トレンチ中央部出土の志野の浅鉢である。口径は12.6cm、高さ2.9cm。口縁部は平たい底部から垂直に立ち上がり、底部はわずかに窪ませて疊付きに細い高台をつくる。淡桃色の厚い釉をかけ、見込みに褐色の草文を描いている（第20図）。

93は北トレンチ出土の伊賀の水指。口径19cm、口縁部を斜め内側に折り曲げていわゆる矢筈口とし、黄褐色の釉がかかっている。SD04出土の花生け（92）と近い時期とみられる。125は中央トレンチ西側下部の炭混り層から出土した織部の扇面向付。扇の末広の部分が一部欠けているが、全体がよく残っている。製作窯は岐阜県可児市大萱の弥七田窯で、いわゆる弥七田織部として知られている。織部でも後期の代表的な扇面向付である。扇面を開いた両端で16.5cm、要から先端まで14.7cm。底から立ち上がった部分は3cmで脚からの高さは4cmである。扇面の右寄りに淡茶色で格子目に赤褐色の丸玉を入れ、風に吹かれた短簷や草花を描く。円形に立ち上がった内側には三ヶ所緑釉を垂らしている。扇の骨は5本でその間に四つ透かしを入れる。同一の図柄のものが五点セットになったものが陶磁器図録などに紹介されているが、骨の左から二本目に格子目を描いているものがあるが、この出土資料は中央の骨に格子を描いている。扇面の裏面にはトチンの跡が残り、扇面と要の裏面の三ヶ所に粘土板を折り曲げて貼り付けた脚がある。128,130,131は北トレンチ出土の唐津。129は北トレンチV層出土の志野茶碗。碗の下方から高台にかけて斜めの条痕をつけてその上から白灰色の釉をかけている。（第18図）。

第17図107～124は北トレンチ出土の17～18世紀の茶碗類。第20・21図181～205も同様の時期で南トレンチ出土。

擂鉢は3点出土している。207は南トレンチの暗灰色土出土の信楽。208は中央トレンチ柱穴列のP7から出土。信楽B類で14～15世紀。98は北トレンチV層出土。口縁部の突帯から胴部への接点が明瞭な18世紀末～19世紀前半の丹波系。

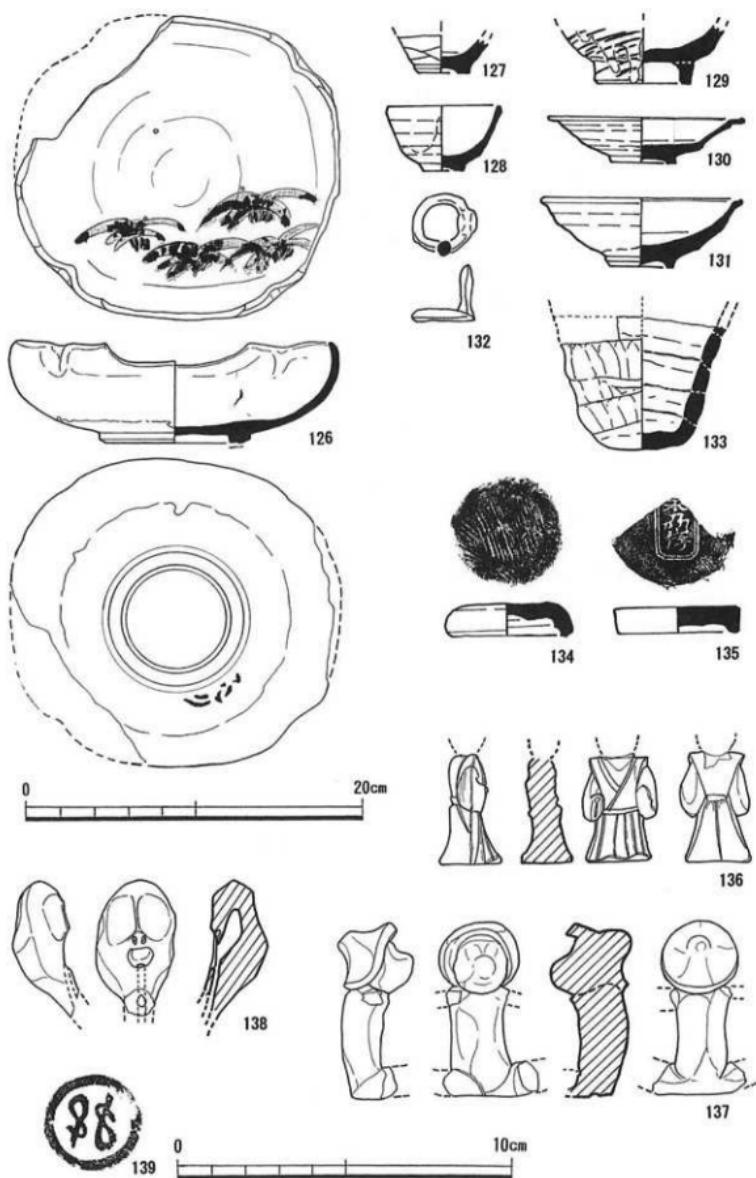
壺は北トレンチから常滑が3点出土している。95・96はV層出土で、粘土組輪積みの痕跡が残り、内面上部に緑色の自然釉がかかっている。97は北端の精査で出土。いずれもⅠ期中段階14世紀後半。

## 第9節 瓦質土器

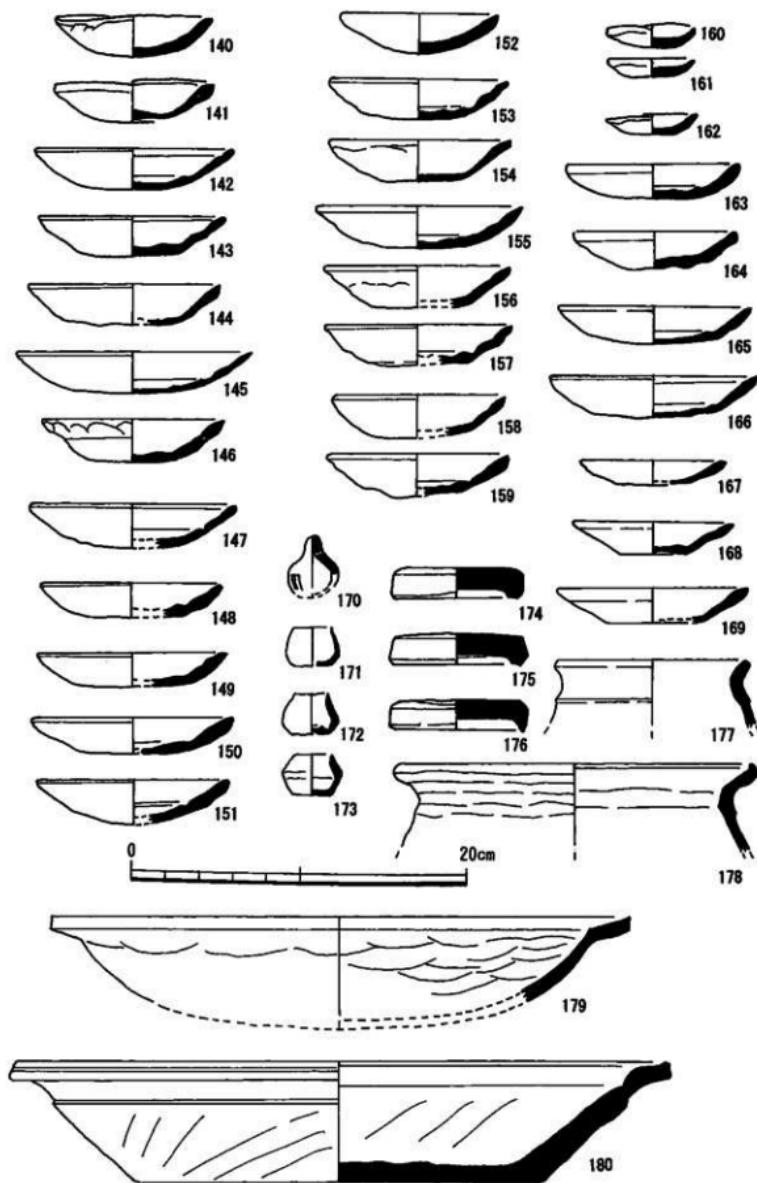
第16図99～102は火鉢で99～100は北トレンチSK01出土。口縁を内傾する浅鉢Ⅲタイプの14世紀中頃。101は北トレンチV層出土。口縁部は直径40cmでやや厚いが外反せず、菊花文のスタンプを押す浅鉢Ⅰタイプの火鉢で13世紀後半。102は北トレンチV層出土の風炉Ⅱタイプ。口縁部は直径32cm、直立した広口の肩の張った短頸壺で、火窓がついている。胴部の破片は北トレンチのSK01から出土したものと接合した。上下二条の突帯の間に方形の渦巻き文を入れる。15世紀の室町時代前半。103は北トレンチV層で出土した三足の盤。口径11.8cm、高さ3cm。黒灰色で胎土は密、焼成は良好。外面は灰黒色、内面は白灰色。室町時代前期後半、15世紀前半とみられる。104は口径24cmで内外面とも黄灰色。17世紀の鍋。105・106は15世紀後半の鍋。いずれも北トレンチV層出土。

## 第10節 土製品

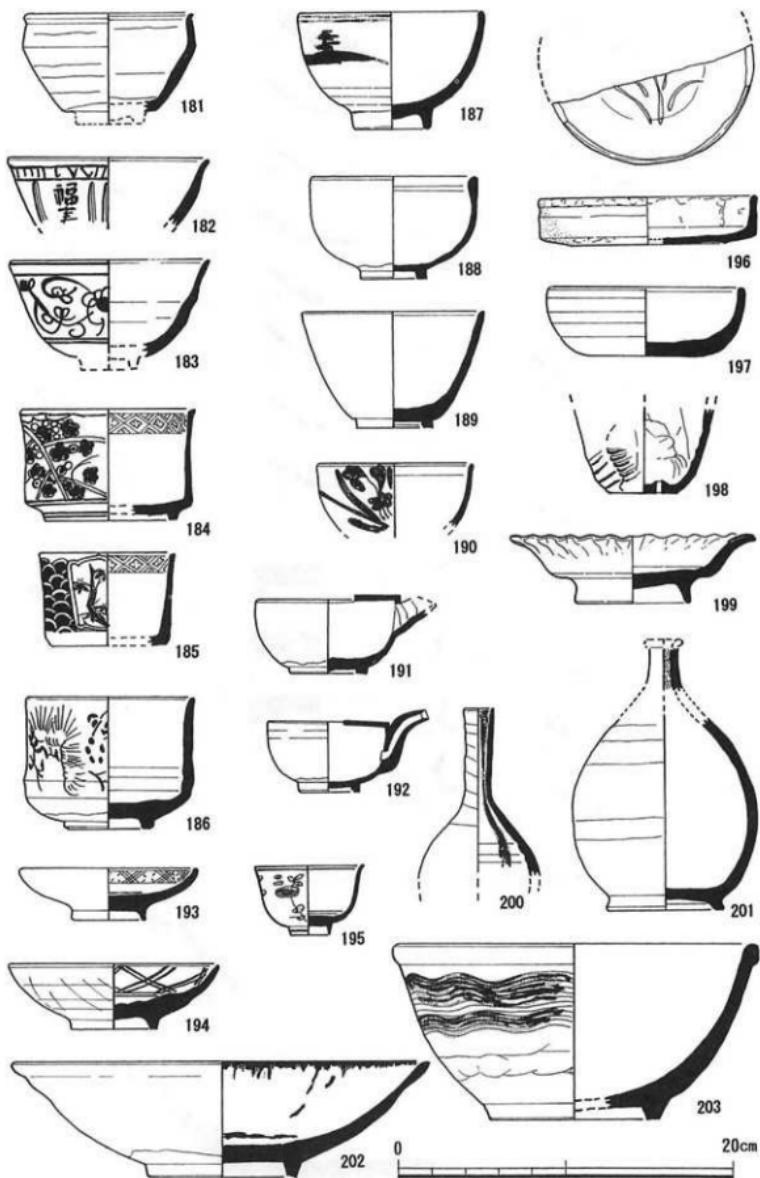
第18図137は北トレンチ擾乱層（V層）出土。編み笠を被った人形。高さ5.2cm。138は北トレンチ出土の人形。丸めた土を指先で捻って顔を作っているが首に棒を突き刺す穴がある。顔の長さ4cm、幅2.3cm。胎土密、焼成良好。136は南トレンチ東壁出土。羽織、袴姿の伏見人形。残存高3cm。139は泥面子。132は北トレンチ南端



第18図 北トレンチ出土遺物（6）土製品



第19図 南トレンチ出土遺物 (1)



第20図 南トレーン出土遺物(2)



204



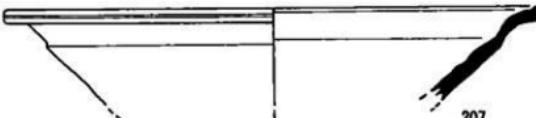
205



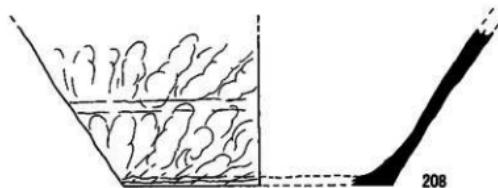
206



0 20cm



207

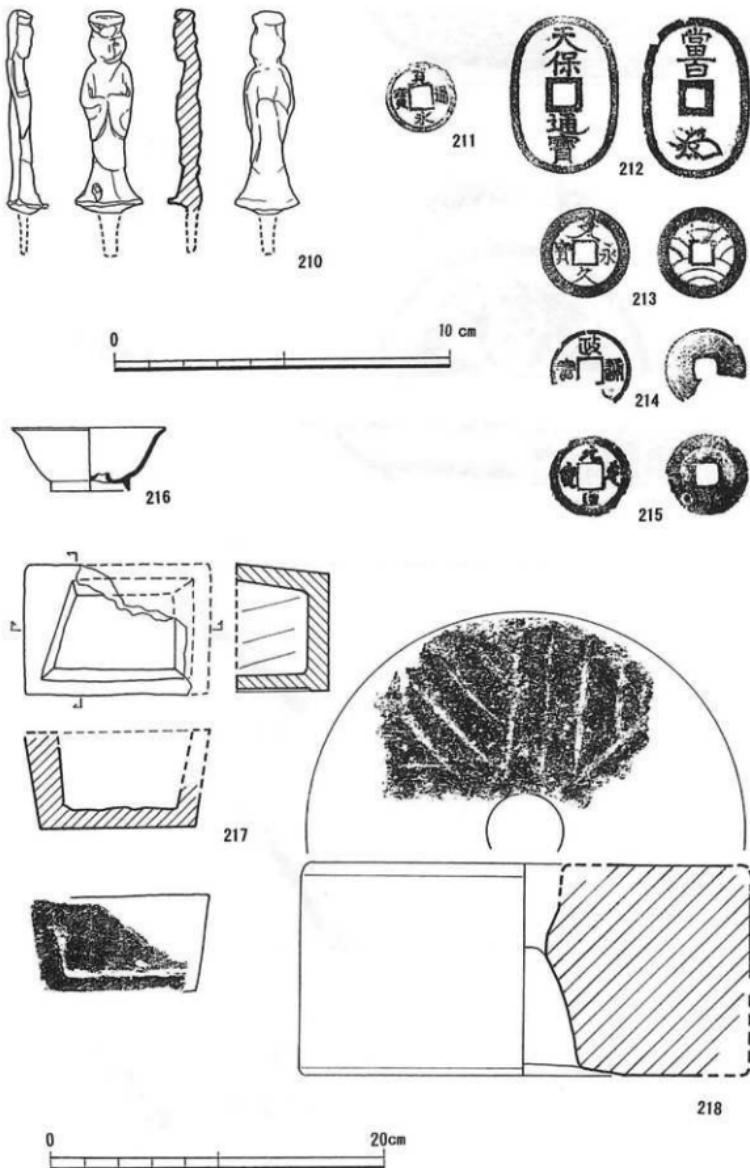


208



209

第21図 南トレンチ出土遺物 (3)



第22図 南トレンチ出土遺物(4)・第2次調査出土遺物

の炭化層出土の蠟燭立て。直径0.7cmの粘土紐から直径3.5cmの輪を作り、一端に3.5cmの突起を立て、濃茶色の釉をかける。

171～173は南トレンチ黒灰色土層出土のつぼつば。170は南トレンチ南壁から出土した土鉢。脇部下方に縱方向の窓を開ける。

## 第11節 金属製品・貨銭

第22図215は南トレンチ出土のブロンズの碗。口径9.4cm、高さ3.8cmで、仏具の六器とみられる。209はV層出土。長さ6.3cmのブロンズ像。頭に冠状のものを戴せ、胸元で両袖を合わせ、衣の裾を足の上に広げた神像のような姿に見える。足の下は折れているが、穴に突き立てるようなものが付いていたようである。

210～214は貨銭で、211・212は第2次調査のトイレ01から出土。

## 第12節 石製品

第22図216は南トレンチの池状の暗灰色から出土。復元で長さ11cm、幅7.7cm、高さ5.8cmの灰色の砂岩石材の、四角の一方を斜めに削り貫いた容器。217は八分割の石臼。

## 第13節 製塩土器・焼塩壺

第18図133は北トレンチV層出土。幅の広い粘土紐を巻き上げて外面は指押さえ成形、内面はナデ成形。淡褐色で胎土は密。13世紀後半頃を見られる。この他に江戸時代の焼塩壺の蓋が4点ある。第18図134は北トレンチ南端の炭混じり層出土。135は北トレンチの上げ土から出土したが、蓋の上面に「泉州山岸」の刻印がある。天井径7.4cm、器高16cm。第19図174～176は南トレンチ出土。175は南壁の焼土出土。

## 第5章 自然遺物（動物遺体）

### 1 はじめに

このたび調査の機会を与えられた動物遺体は、1992年11月に古代学協会によって発掘された、あさひ銀行敷地内・平安京左京四条三坊十三町遺跡の出土資料である。魚骨のみで17～18世紀代に属す。

筆者は先に平安京土御門烏丸内裏（水戸藩邸跡）・堺環濠都市遺跡SKT200地点・同SKT78

地点出土資料を報告したが、本資料もまた近世洛中の食生活の一端をよく示している興味深い資料である。

### 2 魚類の種名と出土状態

同定できた魚類は次の2種である。

- 1. タイ科マダイ *Pagrus Major* T
- 2. サバ科の一種 *Scombridae* sp.

これらの特徴の第一は、いずれも内陸の京都には産しない海産魚類であることである。

第二は両者とも中央トレンチの第5層（黒色粘質炭化層）、第6層（暗褐色土）、第8層（暗灰色粘質土）から近接して検出されているが、ともに脊椎骨などがバラバラではなく連続した状態で検出されたことである。

第三はマダイの頬骨に切歯痕がみられることがある。

次に以上の特徴を種別に検討する。

マダイは図版19-1にみられるように、途中に発掘中の欠失があるものの、脊椎骨が連続した状態で検出されている。その一方でその直下にみられる魚鱗はその方向が逆である。したがって調理に当たってまず鱗を落とし、次いで三枚におろされて一緒に捨てられたこと、または塩焼きなどで食べられた後に捨てられたことが推定される。

また、頬骨図版19-2はタテ方向の切歯痕が明確で、参考写真（同3）に示したように右側が残っていることになる。身とは別に三枚におろされて、荒炊きにされたことなどが推定される。

サバにはマサバとゴマサバの二種類がある。しかし脊椎骨ではその区別はできない。この脊椎骨も、マダイほど明確ではないが、やはりバラバラではなく連続した状態であったとみることができる（同4）。同一個体のものと推定される下顎歯骨も検出されている（同5）。

### 3 食文化史的な若干の検討

遺跡の所在地からみてそれらは錦市場で購入されたものであろう。

そして連続した状態で脊椎骨が検出されたことは、ある目的のもとに三枚におろされていることを示している。マダイ遺体の検討において二つの可能性を考えたが、鱗も一緒にみられるることは脊椎骨の廢棄との間に間断がないことを示しており、鱗に加工された可能性が高いと考えられる。小鯛の雀鮓はさほどでないが、鰆鮓は今でも京都の名物である。もっともマダイが塩焼きでも食べられたことは、そのことと密接な関係にある焼塩壺が多量に出土していることから、十分に確認することができる。

### 4 おわりに

以上に記したように、これらの資料は近世京都市内の食文化を考えるうえできわめて興味深い。また江戸の食文化などとの比較研究を進めていくうえで、今後さらに類例を増やしていきたいものである。

#### 参考文献

- 渡辺 誠・久保和士『堺環濠都市遺跡（SKT200地点）出土の魚骨について』（『堺市文化財調査概要報告』13所収、堺、平成2年）。
- 渡辺 誠・南 博史編『平安京土御門島丸内裏跡』（古代学協会『平安京跡研究調査報告』第10輯、京都、昭和58年）。
- 渡辺 誠『焼塙臺』（『江戸の食文化』掲載、東京、平成4年）。
- 渡辺 誠『堺環濠都市遺跡（堺市甲斐町西一丁・SKT78）出土の魚骨について』（『堺市文化財調査概要報告』61、所収、堺、平成7年）。

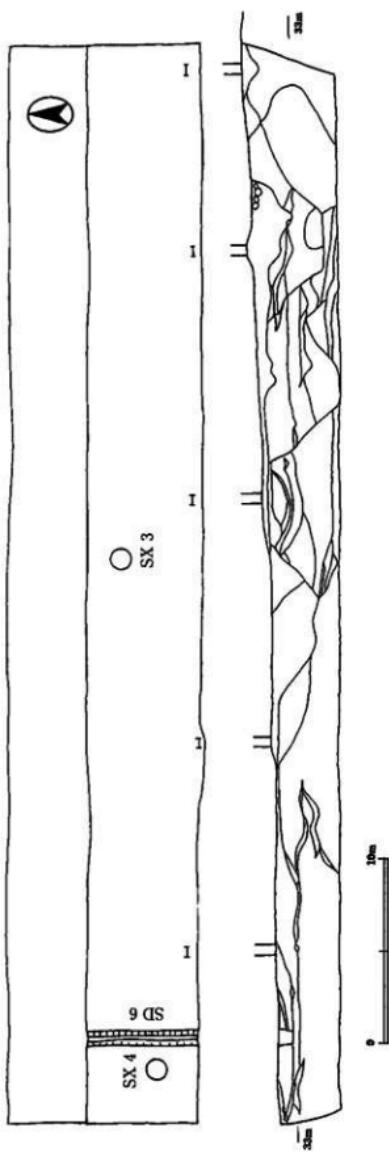
## 第6章 第二次調査の概要

第二次調査は旧協和銀行の建物と、敷地の北端との間の南北5m、東西40mの通路があった場所で、そのうち100m<sup>2</sup>を調査した（第6図）。この調査地の北側が大丸百貨店の駐車場で、平成元年の、京都市埋蔵文化財研究所が実施した調査については第1章で述べた通りである。その状況からここでも同様の遺構が検出できると思定していたが、調査を始めた時には建設工事が着工される以前から、既に一部で地山が露し出るまで削平されていて、近代の陶磁器片などが若干散布している状況で、遺構は殆ど検出することはできなかった。調査面積は300m<sup>2</sup>で、東西30m、南北10mの範囲であるが北側4m幅の範囲は削平されてしまって調査はできなかった。したがって東西30m、南北6mの範囲であった（図版11）。調査期間は平成5年2月4日から2月20日まで15日間実施した。調査はH鋼列の南側に深さ1mの断面が観察できたため、この断面を実測し、削平面に残った遺構を検出するため、東端から清掃する形ですめた結果、西端近くで南北方向の溝（SD06）（図版11-2）一つと近世以降のトイレ跡が二ヶ所検出できた（第23・24図）。

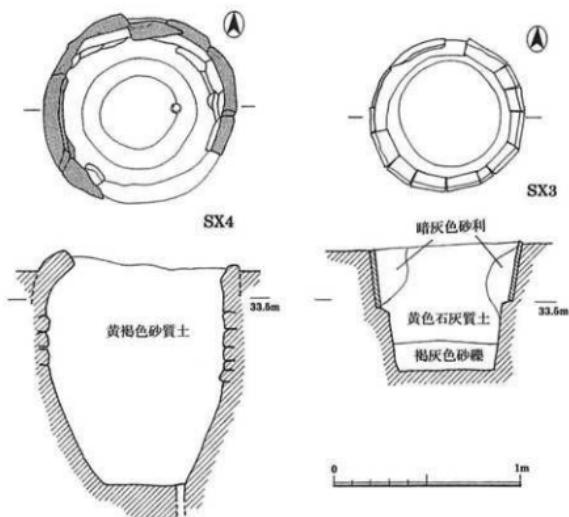
トイレ01（SX3）は調査地の中央から若干東寄りで検出したが上部は既に削平されていて、底部から70cmだけ残っていた（図版12）。検出した上部の直径は80cmで、木の桶の底を抜いた状態で正位置に据え、更に一回り小さく、直径70cm、深さ40cm掘り下げているがこの部分には桶の痕跡は無かった。桶状の板は厚さ3cm、幅10～20cmで12枚残っていたが、元来17枚あった痕跡がある。検出面では掘り方を探したが検出できなかった。従つて桶を据えたものか、或いは穴を掘った跡に板を並べたのか判断できなかった。堆積物は、底から15cmの厚さの褐色灰色砂礫があり、底に10cmぐらいの石が5～6点あった。その上部は漆喰のような黄色の堆積層が検出面まであって、天保通宝と文久永宝が各一枚（第22図212、213）のほかに伊万里の猪口が1点出土した。桶状の板材の内側には20cmぐらいの厚さで暗灰色の細かい砂利が混入した石灰質の層が取り巻いていた。この遺構について、検出した当初は井戸とを考えていたが、底を抜いた桶を積み重ねて井戸枠にする遺構は報告されているが、その場合は桶を逆にして積み重ねることと、京都周辺では桶を利用した近世の井戸は殆ど例がないことからこの遺構は井戸とは考えられない。更に黄色い漆喰様の堆積物からもトイレと推定した。

トイレ02（SX4）は調査地の西端に近い位置で検出した。検出面での直径は80cm、深さ120cm、底部の直径40cmで底部の一端に直径5cmの穴が垂直に下方あけられていた。全体に壺のような形になっているが漆喰で作られており、胴部になる部分は10cmぐらいの石を4～5段積んで、更にそれから上に漆喰で内溝するように塗り上げている。石を積んだ部分の直径は90cmである。漆喰の厚さは上端では10cmぐらいであった。内部には黄褐色の砂で埋められていて遺物はなかった。この遺構についても検出当初は井戸か水琴窟のようなものと考えたが、上部を内溝させているのが常滑焼の下瓶にみられるような、口縁部を内溝させて「姐返し」といわれている「内端（うちは）」の構造ではないかとみられ、トイレと判断した。

この調査地の西端で精査したところ、烏丸通りと接する所で煉瓦積みの壁があったが、烏丸通りの歩道の面から下の部分だけが数段残っていた。この位置には旧協和銀行の建物はなく通路になっていたから、銀行の建物以前にあった商家のものである。明治17年8月の下京区第四組明倫通学区の地籍図によれば、この学区の中央には幅5～6m前後の烏丸通りが通っており、第町691番地は烏丸通りから30mほど路地を入った奥に東西30m、南北25mほどの民有地で、名義は記載されていないが宅地となっている。さらに大正元年10月の地籍図をみると、この学区は烏丸通りが現在の広さに拡張されていて、烏丸通りに面した東西両側の宅地が大きく削られており、第町691番地は西振清兵衛の名義になっている。さらにこの南側の694番地と695番地の一部も西村清兵衛の名義となっていてこの広大な敷地が現在の「りそな銀行」京都支店の敷地となっている。



第23図 第2次調査トレンチ北断面図・平面図



第24図 トレイ状造構平面図・断面図

## 第7章　まとめ

第2章で述べたように、この調査を実施するに際して留意した点について、調査の結果を総合すると、まず弥生時代の烏丸綾小路遺跡との関連については、北トレーンチの地山面から数点の弥生土器が出土しているが、土器片が小さいことと、造構が確認されていないことから烏丸綾小路遺跡そのものではないが、遺跡のごく周辺であったことは考えられる。しかし弥生時代の造構や弥生土器が大量に出土した南側の三井住友銀行とは隣の敷地であるにもかかわらず殆ど様子が違っていることから見ると、この辺が烏丸綾小路遺跡の北限ではないかと考えられる。平成16年にも三井住友銀行の東側で発掘調査が行われたが、ここでも弥生土器は1点も出土せず、造構も近世の土取りで壊されてしまっていて全く検出されなかった。

次に藤原忠教の屋敷との関連については、「仁和寺所蔵古図」やその他いくつかの平安京図にはこの十三町の一つ四方の東南隅に「民部卿藤原忠教」と書かれており、位置的には三井住友銀行から東側であるが、一町内のどれだけの部分であったかは明確ではない。今回の調査地は一町内の中央部分であるから、極めて近くではあるし、12世紀後半の平安時代後期の瓦が出土していることから藤原忠教の屋敷地そのものではないが、その屋敷に葺かれていた瓦を投棄したものが埋土に混入したものとみられる。上述の烏丸綾小路遺跡の場合と同様に、平成16年の調査でも藤原忠教の邸宅に関しては造構も遺物も検出されなかった。

近世の造構については、北側の大丸百貨店駐車場で検出された南北方向の溝4と、南側の三井住友銀行の調査で検出した南北方向の溝(SD515)は、北トレーンチで検出した溝(SD2, SD4)と合致しているが四行八門の西二行と西三行との境界とは若干東側にずれていることから、宅地割りに関係するものとみられる。また中央トレーンチで検出した南北方向の土手状の造構は現在の筈町と坂東屋町の境界と一致しており、町境を明示する築地のような施設であったと思われる。

明治時代以降には西村清兵衛の名義となった広大な土地で店舗があり、第2次調査で検出した造構はこの時期のものであり、ここが現在の「りそな銀行」の敷地となっている。

# 図 版



1 調査前の状況 東南から



2 調査前の状況 東南上方から



1 トレンチ全景 西上方から



2 北トレンチ 南上方から



1 北トレンチ北端 西南から



2 北トレンチ北端



1 北トレンチ遺構 東南から



2 北トレンチ遺構 東から



1 北トレンチ遺物出土状況



2 北トレンチ東壁 魚骨出土状況



1 北トレンチ南端 西北から



2 南トレンチと中央トレンチ東半 北から



1 中央トレンチ町境西側



2 中央トレンチ町境 西北から



1 中央トレンチ町境 ピット列 南から



2 中央トレンチ町境 ピット列 東北から



1 南トレンチ 北から



2 南トレンチ四行八門遺構 西から



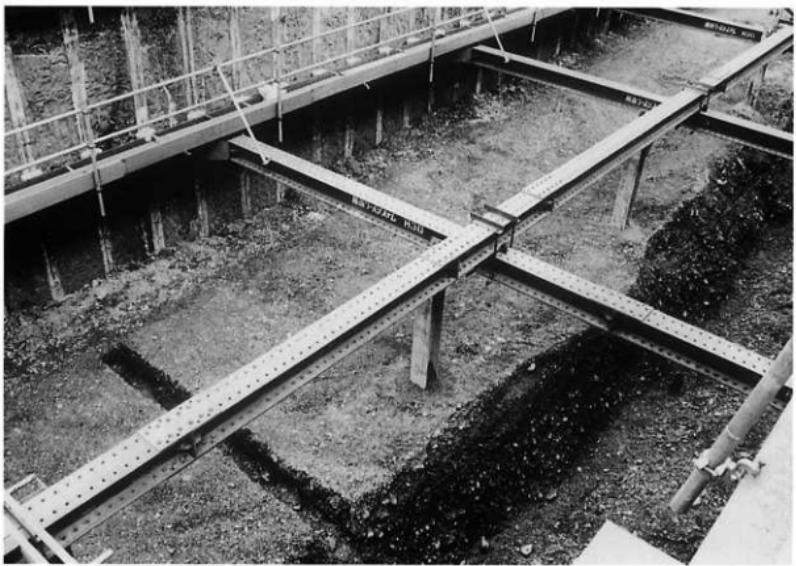
1 南トレンチ 東北から



2 南トレンチ 西北から



1 第2次調査状況 西南から



2 第2次調査遺構面 西南から



1 第2次調査造構面 西北から



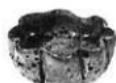
2 第2次調査造構面 (SX3) 西から



1



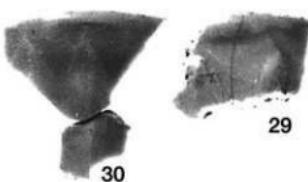
2



14



3



29

30



196



125

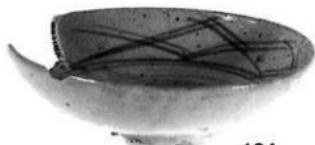




124



120



194



123



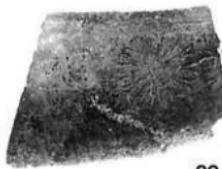
92



114



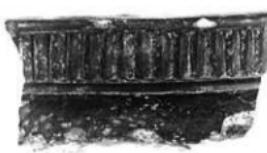
100



99



101



102



108



113



110



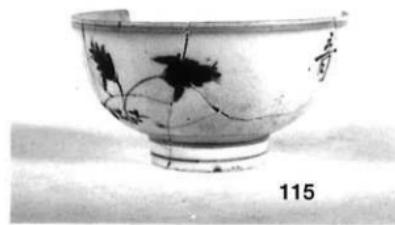
111



109



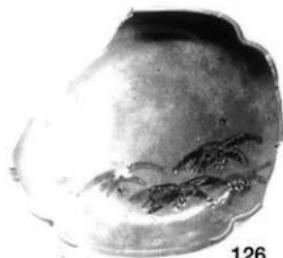
116



115



112



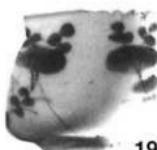
126



183



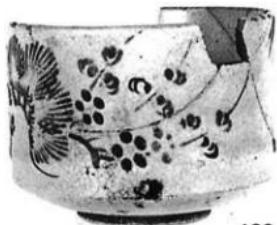
182



195



189



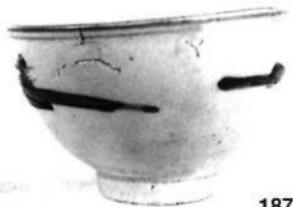
186



181



129



187



130



170



171



173



138



136



137



133



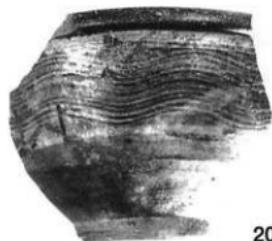
132



134



135



203



199



202



204



194



205



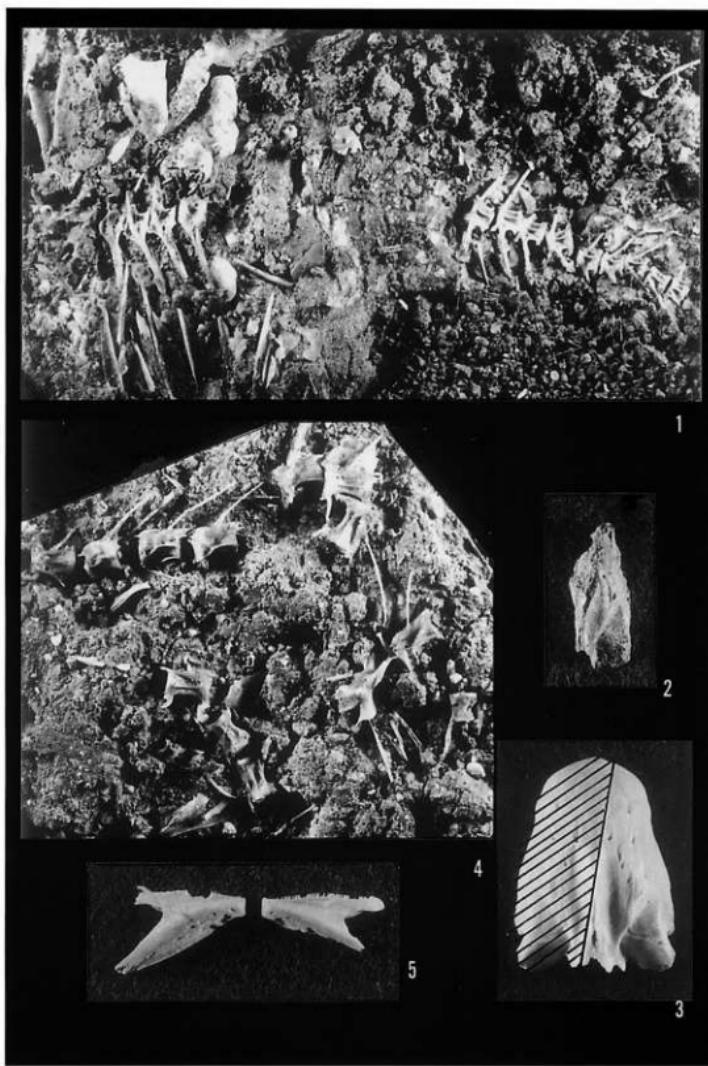
206



191



192



魚骨（実大）

1：マダイ脊椎骨出土状態、2：同顎骨、3：同参考資料、4：サバ脊椎骨出土状態、  
5：同下顎歯骨。

## 報告書抄録

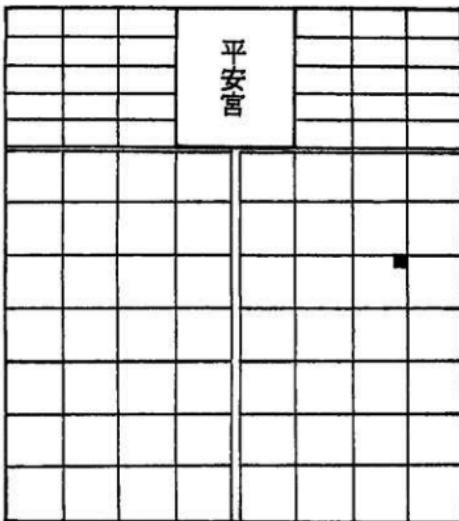
ふりがな	へいあんきょうさきょうないごいせき							
書名	平安京左京内5遺跡							
圖書名	平安京左京四条三坊十三町跡							
巻次								
シリーズ名	平安京跡研究調査報告							
シリーズ書号	第22輯							
編著者名	江谷 寛							
編集機関	(財)古代学協会							
所在地	〒604-8131 京都府京都市中京区三条高倉				TEL 075-252-3000			
発行年月日	平成20年11月30日							
ふりがな 所収遺蹟	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺蹟番号	*	*			
へいあんきょう うさきょう じょうさんば うじゅうさん 平安京左京 四条十三町	きょうとしなか ぎょくからす まじょうあが るたかんなちよ う 京都市中京区島 九四条上がる篠 町	26100		35° 0' 16.3"	135° 45' 36.1"	平成4年 10月1日 ～11月 25日 平成5年 2月4日 ～20日	200m <sup>2</sup> 300m <sup>2</sup>	新築工事 に伴う
所収遺蹟名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
		平安～江戸	溝3 町境の墓地	瓦・土器				

# 平安京左京五条三坊十六町跡

三菱東京UFJ銀行新築工事に伴う調査

## 例　　言

- 1 遺跡名 平安京（平安京左京五条三坊十六町）  
2 調査所在地 京都市下京区四条烏丸東入長刀鉢町10  
3 委託者 株式会社 竹中工務店  
4 調査期間 平成17年（2005）7月4日～12月7日  
5 調査面積 約540m<sup>2</sup>  
6 契約番号 略記号：05HK-SA4  
7 調査担当者 堀内明博  
8 実動日数 115日  
9 延べ人数 補助員 410人 作業員 1100人



第1図 平安京条坊の調査地点

## 目 次

1	調査概要 .....	1
(1)	調査概要 .....	1
(2)	特記事項 .....	3
2	遺構 .....	5
(1)	近世（安土桃山時代を含む）・近代 .....	5
(2)	中世 .....	7
(3)	平安時代 .....	8
(4)	古墳・弥生時代 .....	9
3	遺物 .....	10
4	まとめ .....	12

## 図版目次

図版1	1 調査前の状況 南から
	2 調査前の状況 南西上方から
図版2	1 中世～平安時代遺構の全景 真上から
	2 同上 西から
図版3	1 近世遺構面全景 南西から
	2 SX460・SX356出土状況 北西から
図版4	1 SD167遺物出土状況 南西から
	2 SD167遺物出土状況 東南から
図版5	1 SX530遺物出土状況 東から
	2 SX530遺物出土状況近景 東から

## 挿図目次

第1図	平安京条坊の調査地点 .....	i
第2図	調査位置図 .....	2
第3図	調査範囲図 .....	3
第4図	土層断面図 .....	5
第5図	近世・近代遺構概略図 .....	6

第 6 図 中世遺構概略図 .....	7
第 7 図 平安時代遺構概略図 .....	8
第 8 図 古墳・弥生時代遺構概略図 .....	9
第 9 図 平安京左京五条三坊十六町遺構図 .....	10
第10図 出土瓦 .....	11

# 平安京左京五条三坊十六町

## 東京三菱UFJ銀行新築工事に伴う調査

### 1. 調査概要

#### (1) 調査に至る経緯

この調査は、京都市下京区四条烏丸東入長刀鉢町10番地に所在する東京三菱銀行京都支店跡地の再開発にともなう発掘調査である。

調査地は、平安京の条坊復原によると、北を四条大路、南を綾小路、東を東洞院大路、西を烏丸小路に囲まれた、左京五条三坊十六町の中央西寄りに位置する。そして当地は現在四条烏丸交差点東南の烏丸通りに面して立地する。

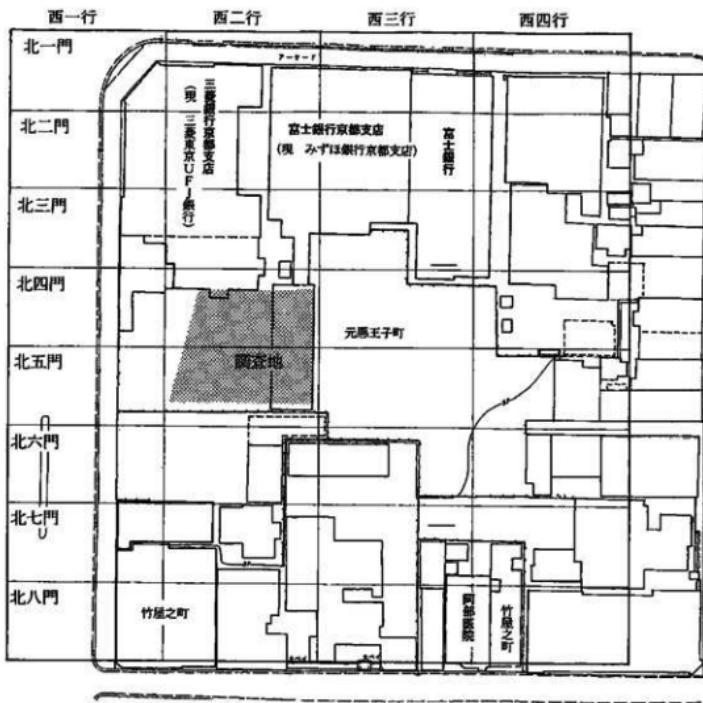
当地の内南半部にあたる水銀屋町は、応仁の乱後、明応九年（1500）に再興された「祇園会山鉢次第以闡定之」（祇園社記）によると「六番 花見中将山四条烏丸とアヤノ小路間也」とあり、前祭に花見中将山が出された。応仁の乱以前における「祇園会山ほこの次第」（祇園社記）にも前祭分として「花見の中将山 綾小路と四条間」とあり、南北通りの記載は欠けるが、乱後の状況とも勘案すると、当町付近から花見中将山が出されたと推定される。

町中の由来は不詳であるが、寛永一四年（1678）「洛中絵図」に「水かねや丁」とあり、寛永一八年以前の「平安城町並圖」にも「水金や町」、寛文一二年（1672）「洛中洛外大図」には「水銀町」と現町名と共通した記載がある。また「京雀」（寛文五年刊）には、「この町ひがし行に大仏師の家あり」と記し、「京独案内手引集」（元禄七年刊）によると「大ぶつし、からす丸四条下ル丁、左京、しぶきやうと云」とあって、大仏師左京が居住していたことがわかっている。このような文献記録から当該区においては、細工師並びに仏師が江戸時代居住していたことがうかがえる。当地の内北半部にあたる長刀鉢町は、烏丸通りより東の四条通りの両側の町である。永和二年（1376）の大山崎住新加神人被放札注文によれば、当町には大山崎船橋保に所属する竹夜叉丸という油屋が営業し、応永三二年（1425）の「社家記録」には、南北朝時代当町に祇園御靈会の神事所があった。嘉慶二年（1388）頃には、祇園社の御灯料所や散在敷地があり、古くから祇園社の関わりがあった。「言雜卿記」天文三年（1534）三月一三日条には、近江の少年による勧進猿樂が、「親俊日記」天文七年（1538）四月一九日条には、梅若太夫が勧進を行ったりしており、入手の多い繁華な場所であったようである。町名は寛永一四年（1637）「洛中絵図」に「長刀鉢町」とあるのが早く、以後町名の変更や異称はみられない。周辺部での調査例として、同町中央部では弥生時代から江戸時代の遺構・遺物が発見されている。弥生時代から古墳時代の遺物が砂礫層から出土し、当該地が同時代の烏丸綾小路遺跡に含まれることから、これを傍証するものといえる。平安時代にはいると敷地内で数箇所の井戸や土器窓があることから、人々が居住し



第2図 調査位置図

たことがうかがえる。鎌倉時代から室町時代にかけては、遺物量が急激に増加しており、京都の町の一端が知られる。東洞院大路には町の構えを表す巨大な溝も存在する。しかし遺跡は連続するのではなく、室町時代中頃には一旦遺物量が減少することから、町の活動が低下したことがうかがえる。その後室町時代末には再び遺物量が増加し、その傾向は現代まで至っている。ただ確



第3図 調査範囲図

認した遺構の大半は、江戸時代に属する土取り穴やゴミ捨て穴で、このためそれ以前のものの保存状態が悪く、その性格が不明瞭である。このことから当該地においてもこのような状況が予想されるとともに、平安時代の烏丸縦小路遺跡に関する遺構・遺物の確認も想定できる。

調査範囲内の、敷地内の北半は既存建物の搅乱をうけており、その南側の540m<sup>2</sup>を調査対象とした。調査期間は2005年7月4日から同年12月7日までの約5ヶ月を要した。

## (2) 特記事項

調査区全域において江戸時代以降の土取り穴によりそれ以前の遺構の残存状況は悪く、遺構の性格を明確にできるものは少なかった。ただそれらは宅地奥に顕著に分布し、烏丸小路縁には、江戸時代の鋳造関連遺構と町家跡のいってい度状況をうかがうことができた。

範囲と重複して、安土桃山時代の布堀り溝に伴う堀っ立柱の塀と礎石建ての塀、南北朝から室町時代の落ち込みと土器窓、室町時代の地下室などを確認することができた。

また調査区西半中央で平安時代後期の東西方向の平行する2条の土器溝が認められた。両者とも規模はほぼ類似していたが、一方は土器がほぼ完形に近い状況を呈していたが、他方はかなり破碎されており、廃棄状況が異なっていることがうかがえる。一方平安時代以前のものとして、古墳時代の北東から南西方向の溝、調査区西南隅で確認した竪穴住宅跡の一部と思われる床面一括土器群、弥生時代の方形周溝墓の一部と考えられる規矩形の溝などがあり、当地にも確実に鳥丸縁小路遺跡の範囲に含まれることが判明した。

## 2. 遺構

遺構数 668 基

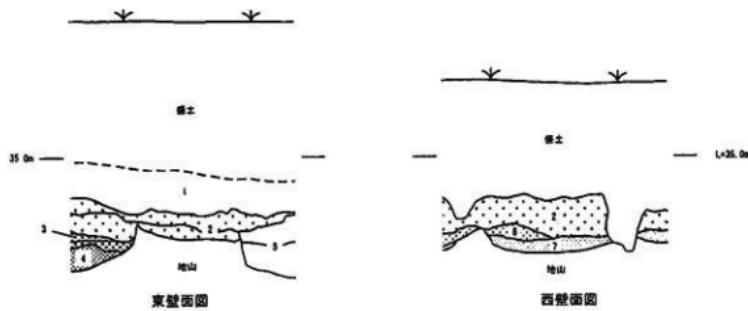
時代	遺構	備考
近世	井戸、土壙	
中世	柱穴、溝、土壙、窓、井戸	
平安時代	柱穴、溝、土壙	
古墳・弥生時代	方形周溝墓、土壙、溝	

本調査により確認された遺構総数は668基を数え、弥生時代から近代に至る。これらは平安時代から近代まで継続している。弥生・古墳時代、平安時代、中世、近世・近代の4時期に大別され、それぞれ性格の異なる遺構であることが判明した。基本層序は、現地表面下約150~190cmが近現代の盛土で、その下に中近世の包含層(5Y3/1オリーブ黒色)、その下に地山(5Y6/5オリーブ色)が存在する。調査区東半は中近世土取り穴により削平されており、これ以前の遺構は確認できなかった。以下に主要な遺構について概観する。

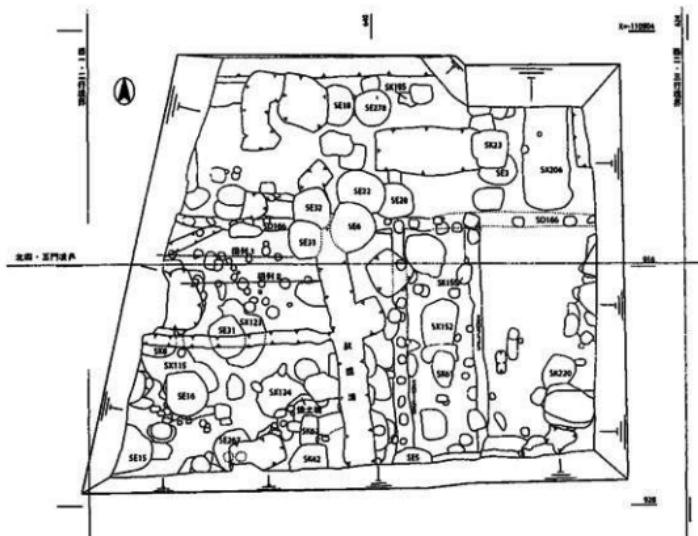
### (1) 近世(安土桃時代を含む)・近代

調査区全域にわたって、町屋に関連する柱穴、横列、井戸、溝、土壙、土取り穴、焼土などの遺構群を確認した(第5図)。

横列は2条ある。それらはX-110916にはほぼ相当する位置に四行八門の北四・五門境界が想定され、それに沿うように南北に各々東西方向の横列が1条ずつあり、両横間は1.4m前後である。そして西二行の中軸線にはほぼ相当するY-21640より東側では確認できなかったことから、この付近



第4図 土層断面図 (1/40)



第5図 近世・近代遺構概略図

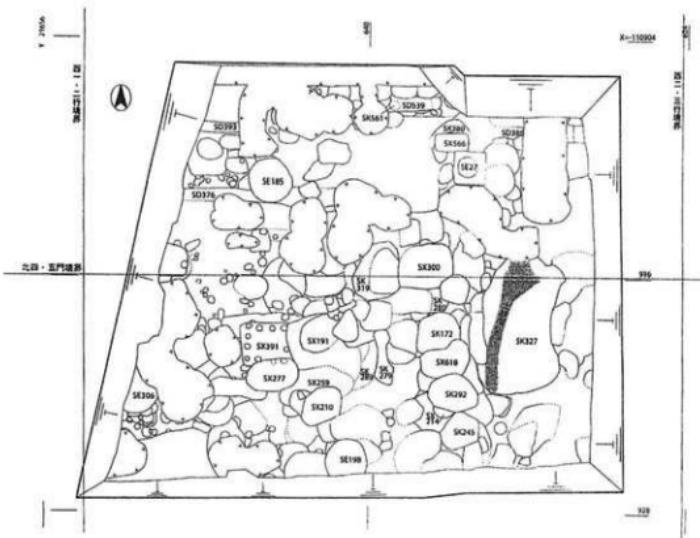
までしか及んでいなかったと考えられる。両方の横の柱間間隔はほぼ1.2m等間を計る。柱跡は、直径20~50cmと比較的小さく、浅い掘立柱形式である。

井戸は13基ある。それらは調査区の南端、中央北寄り、北端で東西方向に分布し、その中でも中央北寄りでは数基重複して認められた。これらは掘形がほぼ円形で直径1.5~2m前後のものが大部分で、井筒は抜き取られて素掘りとなっているものやわずかに漆喰で石組みを補強したものである。そのなかには井戸底に桶を据えてあるものもあった。

溝状を呈するものが2条あり、まずトレンチ中央北寄りで東西方向のSD166がある。それは長さ21m以上で、調査区の東西両端からさらに外側に伸びている、その規模は幅約60cm、深さ約25cmで、断面逆台形を呈する。底部には直径30~65cmの円形の柱穴が約80~110cmとほぼ等間隔でならび、穴の底には河原石の礎石がいずれも認められる。

西二行の中軸線を踏襲する位置にSD166と接続する南北方向のSD158があり、それより北には延びていない。規模は幅約60cm、深さ約25cmの逆台形を呈しSD166と類似する、底部にはここにも直径約25~60cmの柱穴が約80~180cm間隔でならび、穴の底には河原石の礎石を据えている。このような特徴を備えていることから、両溝は一体の遺構である可能性が高い。なおこれに関連する遺構は、上京・下京に点在していた大名屋敷跡によくみられることから、通常の町屋に関連するものとは考えにくい。

SD158の東側に平行するように南北溝SD235がある。規模は幅約60cm、深さ約20~50cmの断



第6図 中世遺構概略図

面逆台形の素掘り溝である。SD166の北側では搅乱などにより確認できなかった。

土取り穴 主に調査区東半、即ち西二程の中軸より東側で数多く確認した。規模は長軸1~2mほどのものが多く、形状は方形ないし長方形を呈し、比較的浅い。その中には側壁ないし底面に鋏先の刃跡をとどめるものがみられることから、土取りの跡であると判断した。

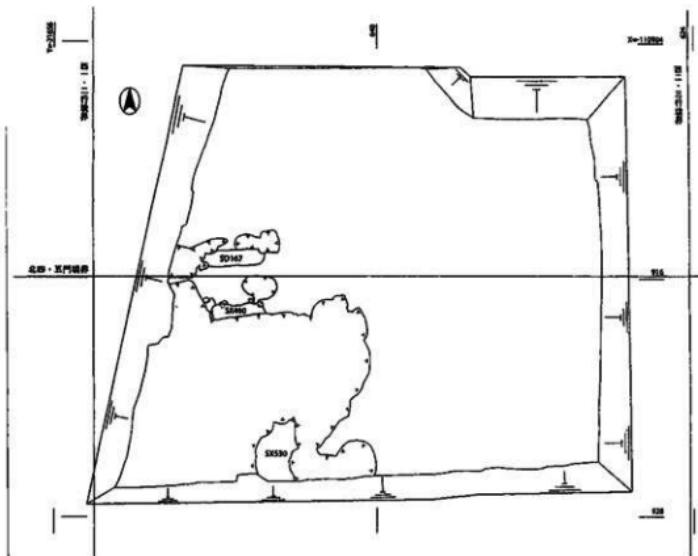
調査区西南のSX124とその周辺に焼土が多くみられた。いずれも細かく破碎されており、形状を留めているものはほとんど認められなかつたが、わずかに轍の羽口や鉱滓が周辺に分布していたことから、何らかの鍛冶に関連するものと考えられる。この遺構の存在は、調査区の一郭を占める水銀屋町の町名の由来を想像させるものといえよう。

## (2) 中世

町屋に関する井戸、室、土器溜り、集石、土取り穴を確認した(第6図)。

井戸は主なもので4基(SE27・185・198・306)ある。これらの分布は近世以降のものとは少し異なり、中央付近ではなく、調査区南北両側にみられるだけである。その掘形はSE27が一辺1.7m方形である以外、その他は径2.1m前後の円形を呈する。これらのうちSE27・185・198は井筒が石組みで、底面には径1mほどの円形を呈する曲げ物を据えるものもある。

SX391は、東西2.4m以上、南北2.2mの方形で、深さは50cmほどを測る。底面の側壁沿いには南北と西辺には3間の柱穴列からなるが、東辺は2間である。柱穴は直径約20~30cm、深さ約7



第7図 平安時代遺構概略図

～30cmで、約30～60cm間隔と不揃いである。形状から地下室に想定できる。

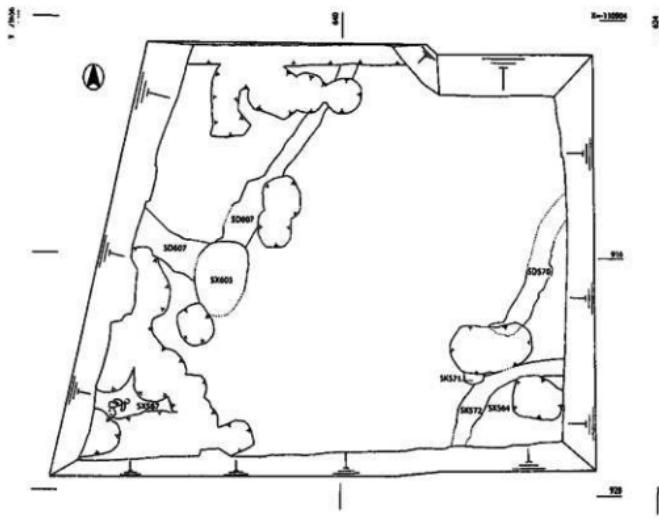
土器溜りは調査区中央東にあり、長さ約6.8m、幅約0.7～2.0mで南北に細長く不定形に分布する。遺物の出土状況からこれは、重複する大規模な不定形土壙SK327がある程度埋まって浅い凹みを呈した段階で、西肩より廃棄されたと考えられる。いずれも完形に近い状態であることから、使用後に一齊に投棄されたと推測される。

集石（SX191）は調査区中央やや南にあり、幅約2.0m、深さ約50cmの楕円形を呈する。そのなかには径約30cmまでの河原石がきっしり詰まったような状態が認められ、遺物の出土は少なかった。

土取り穴は調査区中央東寄りで南北方向に並ぶように確認した。径2m前後のやや不定形を呈する規模の小さいものである。

### (3) 平安時代

調査区のほとんどが中近世の土取り穴によって削平される。西側で土器溜り3ヶ所（SD167、SX460・530）を確認した（第7図）。このうちSD167とSX460は調査区中央西寄りの北西・五門境界を挟んで南北にほぼ平行する。SD167は長さ3m以上、幅0.8mで、SX460は長さ2.6m以上、幅0.6m以上を測り、おのおの東西方向に細長く溝状を呈し、規模は類似する。しかし遺物の出土状況は、両者とも土師器皿が大部分を占めるが、前者は土師器の完形品が多数を占めるのに対し、



第8図 古墳・弥生時代遺構概略図

後者は破碎された破片が目立つなど異なる。両者とも平安時代後期に属す。

一方SX530は調査区南端中央西寄りで確認した。遺構の溝は中世以降の遺構により破壊されているが、東西2.2m以上、南北2.8m以上の不定形を呈すると考えられる。遺物は土師器と供伴して、軒丸瓦や軒平瓦などの瓦類の出土が目立つ。

#### (4) 古墳・弥生時代

方形周溝墓と思われる古墳時代の溝（SD607）を調査区北西部で確認した（第8図）。幅約80～150cm、深さ約30～65cmと、場所により規模が異なる。出土遺物は少ない。この遺構の南東隅の規矩形に折れ曲がる箇所にて東西2.6m、南北4.7mほどの卵形を呈した土壙SX603を確認した。また東南隅では円形周溝墓の一部と考えられるねSK572を確認したが、これも後世の遺構に切られているため、主体部などは不明であり、その形状から円形周溝墓の一部と現在認識している。

一方調査区西南隅では底面が平坦であり、その直上に土器類が分布しているSX567がある。是も後世の遺構に切られているため全容は不明であるが、底面の状況遺物の出土状況から、竪穴住居跡の一部とも考えられる。

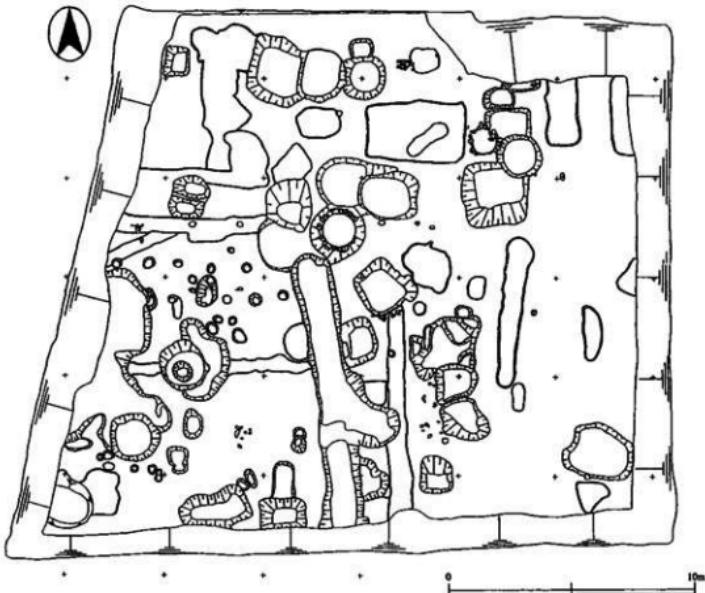
弥生時代の遺構としては、調査区東端で北東から南北方向の溝SD570がある。規模は幅1.2m前後、深さ30cm前後を測る。素掘りで遺物の出土は少ない。

### 3. 遺 物

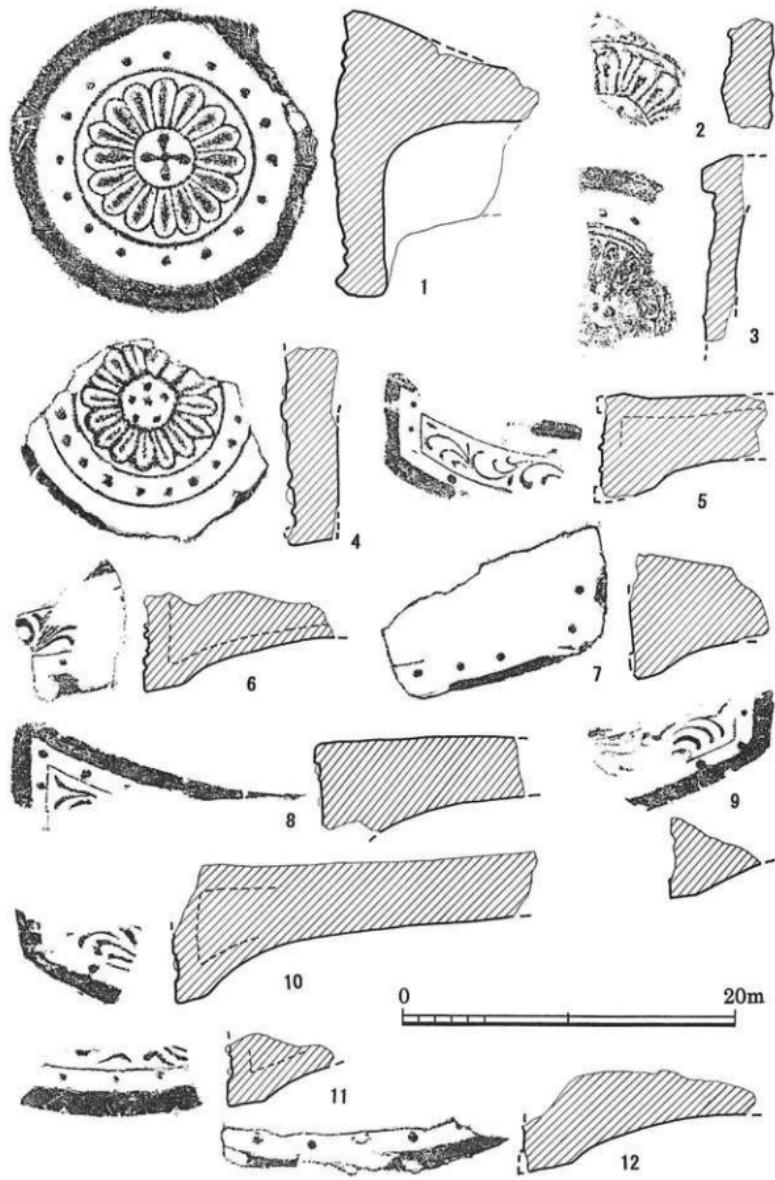
コンテナ数：251 箱  
土器、金属、木製品

時代	出土地	遺物	備考
近世	井戸、土塙	土師器皿、陶磁器碗・杯・皿・鉢・壺・甕・水注・瓶・猪口・火鉢、土鍋、黒色土器碗・硯、瓦、瓦器、鑄造関連遺物、錢貨	
中世	柱穴、溝、土塙、室、井戸	土師器皿、須恵器杯・壺・瓶・甕、陶磁器碗・杯・皿・鉢・壺・甕・甕・水注・瓶・猪口・土鍋・瓦、瓦器、鑄造関連遺物、錢貨	
平安時代	柱穴、溝、土塙	土師器皿・杯・須恵器杯・壺・甕・黑色土器碗・灰釉陶器碗・綠釉陶器碗・軒丸瓦・軒平瓦	
古墳時代・弥生時代	方形周溝墓、土塙、溝	土器	

出土した遺物は整理コンテナに251箱で、その内訳は土器、金属、木製品である。このうち土器類が圧倒的多数を占める。これらの帰属時期は、平安時代以前、平安時代、中世、安土桃山時



第9図 平安京左京五条三坊十六町跡遺構図



第10图 出土瓦

代から江戸時代があり、中世から江戸時代以降のものが過半数を占める。

近世・近代の遺物のなかで、SX124から焼土や被熱痕石、SE267から羽釜、SK42・43から天目茶碗・陶器皿・磁器皿・塙壺・硯がまとまって出土した。この他に唐津窑茶碗、火鉢、瓦、錢貨、釘や鉢などの銅製品片、とりべ等の鋳造関連遺物、釘などの鉄製品片がある。

中世のものは、土器溜まりから土師器皿が多量に出土した。小皿の多くにヘソ皿がみられる。SK172などからは水晶片が十数点出土した。

平安時代の遺物は土器溜まり（SD167、SX460・530）から土師皿の小皿や中皿が多量に出土し、少數ながら白磁片が出土した。またSX530では判読不能の墨書き器小片、軒丸瓦・軒平瓦などが出土した。

平安時代以前の遺物は古墳時代では土師器や須恵器がSX603、SD607などから少量認められる。弥生時代のものは、壺口縁片など土器片数点ある。

#### 4. まとめ

今回の調査で確認した遺構は、その性格から平安時代以前、平安時代、鎌倉時代以降の3時期に大別することができる。平安時代以前は、島丸綾小路遺跡に関連するもので、竪穴住居や周溝墓に関するものを確認できたことは、この遺跡の住居群と墓域のあり方を考える上で、貴重なものといえる。

平安時代のものについては、遺構の存在が非常に断片的なため、その性格を具体的に決定づけられることはできなかった。しかしながら多量の土師類や瓦群を確認できたことは、当地一帯に貴族の邸宅に関連する遺跡の存在が伺えるものといえる。

鎌倉時代以降のものについては、井戸や土壙などの分布状況から、町家に関連するものと考えられ、この時期以降急速に町家化した可能性が高い。しかもその宅地割りは桃山時代まで踏襲され、江戸時代にはいって宅地割りが一部細分化されるが、ほぼ前代までのあり方をとどめ、現在まで至っていることが判明した。さらに江戸時代前期の鋳造に関連する焼土や土壙の存在から、当地の町名である水銀屋の由来を示す一つの手がかりとなったことは、重要なことといえよう。そして当地一帯は下京小町の東南部にあたり、宅地の変遷をたどることができたことは、下京の歴史を解明する資料となったと考えられる。

# 図 版



1 調査前の状況 南から



2 調査前の状況 南西上方から

図版  
2



1 中世～平安時代遺構の全景 真上から



2 同上 西から



1 中世遺構面全景 南西から



2 SX460・SX356遺物出土状況 北西から



1 SD167遺物出土状況 南西から



2 SD167遺物出土状況 東南から



1 SX530遺物出土状況 東から



2 SX530遺物出土状況 近景東から

報告書抄録

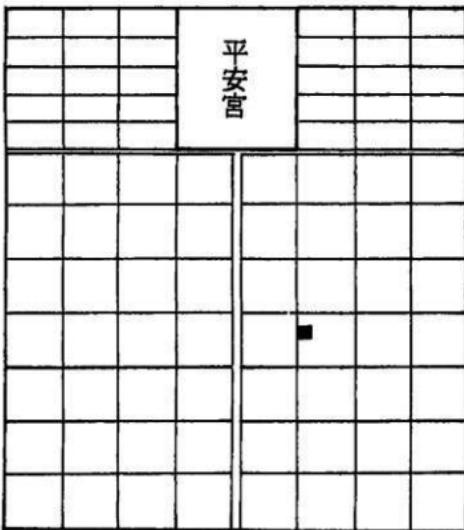
ふりがな	へいあんきょうさきょうないごいせき						
書名	平安京左京内5遺跡						
副書名	平安京左京五条三坊十六町跡						
巻次							
シリーズ名	平安京跡研究調査報告						
シリーズ番号	第22輯						
編著者名	堀内明博・江谷 兼						
編集機関	(財)古代學協会						
所在地	〒604-8131 京都市中京区三条高倉 TEL 075 (252) 3000						
発行年月日	平成20年11月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間 ***	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
へいあんきょ うさきょうご じょうさんば うじゅうろく ちょうあと	きょうとししも ぎょうくしじょ うからすまひが しいるなぎなた ほこちょう	26100		34度 59分 59秒	135度 45分 46秒	2005年 7月4日 ～ 12月7日	建物建築 工事
平安京左京五 条三坊十六町 跡	京都市下京区四 条烏丸東入長刀 鉾町10						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
平安京左京五 条三坊十六町 跡	都城跡	古墳・弥生時代	方形周溝墓		土器		
		平安時代	柱穴、溝、土壤		黒色土器椀・灰釉陶 器椀・綠釉陶器椀・ 軒丸瓦・軒平瓦		
		中世	柱穴、溝、土壤、室、井戸		土器器類・須恵器・ 水注・土鍋・瓦・鎧 造園遺物・錢貨		
		近世	井戸、土壤		土器器類・陶磁器類・ 火鉢・土鍋・硯・黑 色土器・鎧造園遺物・ 錢貨		

平安京左京六条二坊二町跡

馬淵診療所新築工事に伴う調査

## 例　　言

- 1 遺跡名 平安京（平安京左京六条二坊二町）  
2 調査所在地 京都市下京区猪熊通五条上ル柿本町590-4  
3 委託者 有限会社ネフロス 代表取締役 馬淵純子  
4 調査期間 平成10年（1998）4月11日～7月4日  
5 調査面積 約232m<sup>2</sup>  
6 契約番号 略記号：98HK-SA1  
7 調査担当者 堀内明博  
8 実動日数 42日  
9 延べ人数 補助員 104人 作業員 235人



第1図 平安京条坊の調査地点

## 目 次

1	調査概要 .....	1
(1)	調査に至る経緯 .....	1
(2)	特記事項 .....	1
2	遺構 .....	3
(1)	平安京遷都前 .....	3
(2)	平安・鎌倉時代 .....	3
(3)	室町時代～戦国時代 .....	7
(4)	安土桃山時代以降 .....	8
3	遺物 .....	10
4	まとめ .....	13

## 図版目次

図版1	1 調査前の全景 南から
	2 最終遺構全景 北から
図版2	1 墓壙SK88・SK113人骨等出土状況 西から
	2 土壙SK173遺物出土状況 西から

## 挿図目次

第1図	平安京条坊の調査地点 .....	i
第2図	調査位置図 .....	2
第3図	遺構配置図（鎌倉時代まで） .....	4
第4図	遺構配置図（室町時代から戦国時代） .....	5
第5図	遺構配置図（安土桃山時代以降） .....	6
第6図	出土遺物 .....	11
第7図	出土遺物（骨壺：32～40、瓦灯蓋：42） .....	12

# 平安京左京六条二坊二町

## 馬淵診療所新築工事に伴う調査

### 1. 調査概要

#### (1) 調査に至る経緯

本調査は平安京左京六条二坊二町の西四行北六・七門に相当し、五条通り（六条坊門小路）の北、猪隈通り（猪隈小路）の西側に立地する。平安時代に関しては調査区に比定される史料は見当らない。しかし調査区は弥生から古墳時代に存在した集落跡である烏丸綾小路遺跡の南西端に属し、また中世には本園寺（旧本国寺）寺域となり、以後昭和46年（1971）に至るまで本園寺子院内であったことから、平安京遷都前から近現代に至るまで多様な遺構群の存在が予想された。

本調査に先駆け試掘調査を行ったところ、主として室町時代前後の土壙が複数検出され、本国寺域となってからの遺構が比較的良好に保存されていることが明らかとなった。

調査区の面積は東西13m、南北16m強で、後に南西端の東西6m、南北4mを拡張し、延べ232m<sup>2</sup>である。平成10年（1998）4月11日より同年7月4日にかけて発掘調査を行い、遺構339基を検出、遺物113箱分が出土した。

#### (2) 特記事項

本調査により、平安京遷都前の遺構が検出されたことは特筆されるが、調査区の属する烏丸綾小路遺跡との関連は不明である。それ以後、時期的に継続して遺構が認められ、調査区が平安時代から連続的に利用されてきた土地であることが確認された。殊に室町時代と江戸中期から後期の2時期において、遺構の数量増加・内容の多様化が生じている。室町時代の変化からは、それ以後調査区が本国寺域に属したことが、江戸時代の変化からは、調査区における地割細分化の状況と子院墓域の様相がそれぞれ明らかになった。



第2図 調査位置図

## 2. 遺構

遺構総数 339 基

時代	遺構	備考
平安京遷都前	溝、土壙	
平安時代	溝、土壙	
鎌倉時代	土壙	
室町～戦国時代	大規模土壙、石組井戸、小土壙、柱穴	
安土桃山～江戸時代中期	溝、土壙	
江戸時代中期～後期	溝、幕壙、切石組築、集石、土壙	
幕末～近代	基礎状遺構、堤、塗吸井戸、礎石掘付痕、溝	

遺構の概要：本調査により検出された遺構総数は339基を数え、平安京遷都前から幕末近代まで継続する7時期に区分される。しかし遺構の数的分布などから、(1) 平安京遷都前、(2) 平安～鎌倉時代、(3) 室町～戦国時代、(4) 安土桃山時代以降、の4時期に大別して捉えることができる。以下に各時期の主要な遺構について概観する。

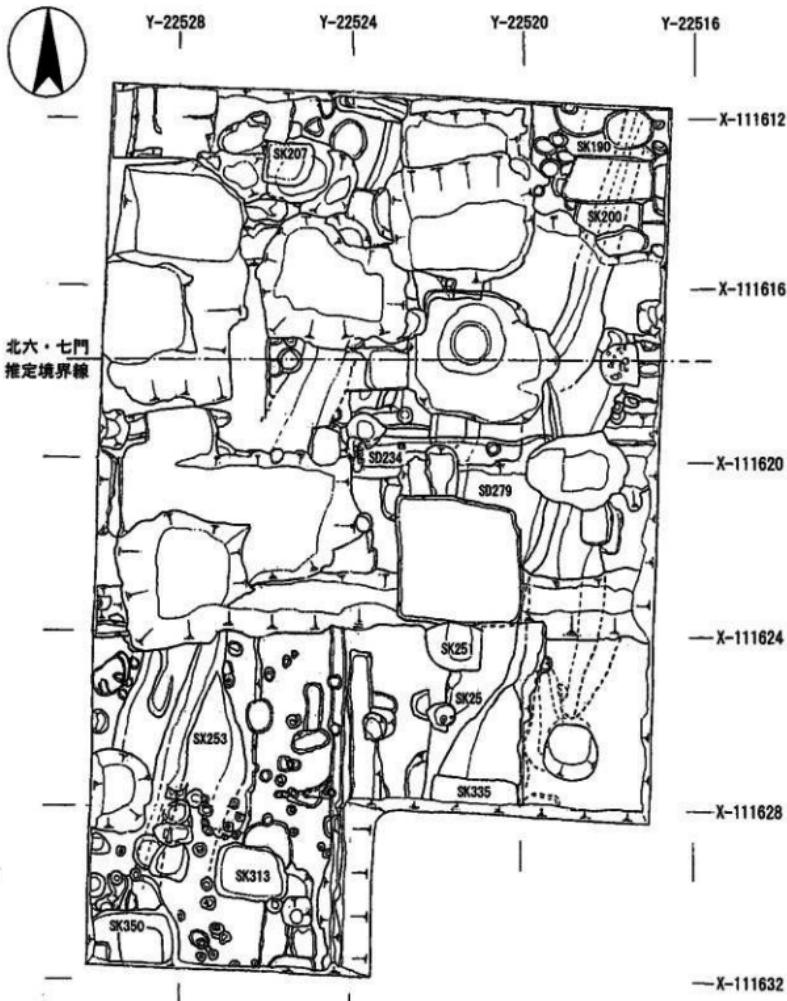
(1) 平安京遷都前 平安京遷都前の遺構として、溝2条がほぼ平行して検出されている。そのうち東側の溝SD279はその西肩部と底部が検出され、東肩部は調査区外に続くため不明であるが、幅5m以上を有する。断面は浅い逆台形で中心部は一段深いレンズ状を呈し、砂、粗砂が堆積する。肩部は不明瞭で、底部に凹凸が認められることから、自然の流路であると見られる。流路方位は真北よりやや東に振れ、底部標高から見て、流れの方向は北から南と考えられる。この北端から6世紀代の高杯などが出土しており、古墳時代に遡るものである。一方西側の溝SX253は後世の遺構に切られ断片的であるが、幅2m前後を測り、調査区西半の北東端から南西にわたって認められる。上層では砂の堆積が認められ、厚さ10cm程、底部中央は一段低くレンズ状を呈し、小礫層の堆積が認められる。SX253も肩部が不明瞭なことから、自然の流路と見られ、古墳時代末期に属すると思われる。

調査区中央付近南寄りからは土壙SK251が検出されている。北半を後世の遺構に切られているが、残存する範囲では平面隅丸形を呈し一辺約1.3mを測る。深さは80cm強を有し、SD279を切り込むことから--時期新しいと考えられる（第3図）。

(2) 平安～鎌倉時代 平安時代の遺構は他の時代と比較して少数である。但しその中でも平安時代末期から鎌倉時代にかけて遺構数が増加し、調査区全域に分布する。

平安時代の遺構と見られるのは、中央区中央付近の東西溝SD234のみである。幅は約1m、深さ10～20cm程で、埋土に炭をかなり多く含んでいる。溝の方向は第六座標の真東西にはば合致し、その位置は北六・七門間の推定境界線より約1.5m南にずれている。

平安時代中期も土壙SK350のみである。調査区の拡張区南端に位置し、南及び西は調査区外に広がる。検出範囲においては平面隅丸方形で幅1.2m以下、深さ30cm強を有する土壙である。完



第3図 遺構配置図（鎌倉時代まで）



Y-22528

Y-22524

Y-22520

Y-22516

— X-111612

北六・七門  
推定境界線

SK230

SK172

SK164

P15

SE36

— X-111616

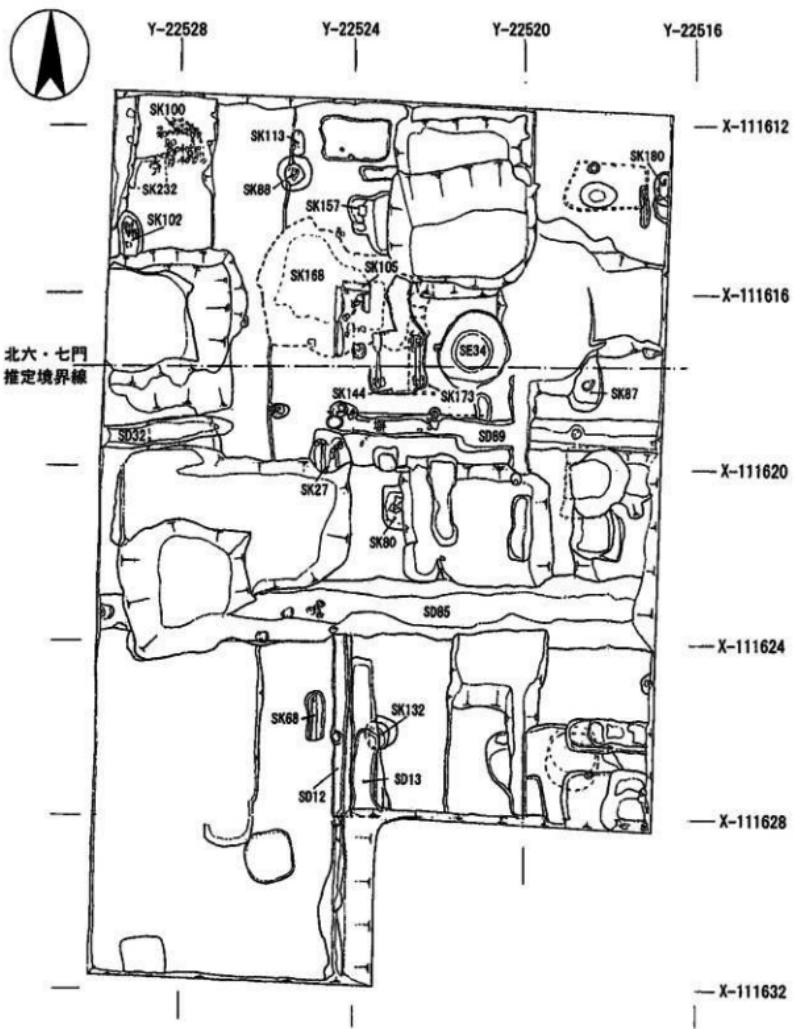
— X-111620

— X-111624

— X-111628

— X-111632

第4図 遺構配置図（室町時代から戦国時代）



第5図 造構配置図（安土桃山時代以降）

形に近い土師器皿などを多数包含する（第3図）。

平安時代後期になると東西溝SD233、土壤SK284・SK335が認められる。SD233はSD234の4m程北に存在するが、後世の遺構により削平され残存状態は悪く、幅は20~50cmを測り、断面逆台形を呈する。また土壤2基の内、調査区南端で検出したSK335は一辺約2m以上の方形を呈すると思われる土壤である。深さ1m以上を削り、壁の立ち上がり、埋土の状態から見て井戸の可能性もある（第3図）。

平安時代末期から鎌倉時代には調査区全域で遺構数が増加し、土師器細片を多量に含む浅く規模の大きな土壤SK190・SK200・SK313などが認められる。これらはいずれも一辺が1m以上とやや大きく平面長方形を呈するが、深さは10cm程度しかなく、埋土中に破碎された土師器片（一部完成品もある）を大量に包含することを特徴とする。

この他に、調査区中央南寄りに位置する土壤SK25がある。これは直径67cm前後、深さ50cm程の平面円形を呈する土壤で、底部から完形瓦器碗、土師器皿が伏せた状態で出土した。

鎌倉時代に至ってからの遺構と明確に考えられるのは、調査区北部に位置する土壤SK207のみである。平面は一辺が1m程の隅丸方形を呈し、埋土中には2~5cmの小礫を均一に含んでいる（第3図）。

(3) 室町時代～戦国時代 この時代に入ると遺構数が増大しその内容もやや変化する（第4図）。その中で南北朝期の遺構と見られるのは、深さ30cm程度の土壤SK230など少数である。SK230は炭を含む埋土中から、多量の土師器皿や常滑壺などが出土した。

調査区の中央部南寄りに位置する土壤SK164は、一辺が3m程のほぼ正方形を呈し、深さは1m以上を有する。埋土上部には灰の堆積が認められ、灰中より常滑壺、土師器皿などの遺物が多量に出土し、その中には高さ14cm口径12cm程の鉢形土器の完形品も含まれる。

SK164の北、2m程隔てた所に位置するのが土壤SK172である。規模はSK164と同程度であるが平面円形を呈し、深さは1m前後である。遺物は土師器片が中心で、南東部からはある程度密集した状態で出土している。

SK172より更に北西の調査区西端に位置する土壤SK171は、調査区外にひろがるため規模は明確でないが、一辺3m以上を測る。埋土中に礫を多く含み、土師器を中心とする多種多様の遺物を出土した点はSK164、SK172と共通するが、底部付近から石組状の施設SK178が検出された点が注目される。集石の密度はやや疎らであるが、南に傾斜し円形状に石を配した状態が認められる。

石組井戸SE36は調査区西端南寄りに位置し、調査区の南への拡張により石組の状況が判明した。掘形は直径1.5m強の円形で、直径10~30cm前後の河原石の長軸を放射状に配して井筒を組み、内径1mを測る。その深さは1.2m位までを確認している。上層に30cm以上厚く堆積する灰の中から14~15世紀前半の土師器皿、東播系捏鉢、陶器などが出土し、その下は焼土となり常滑焼ないし須恵器の壺片を多量に包含していた。

その他柱穴、小土壤などが検出されていた。調査区南東のP15は直径40cm、深さ17cm程の柱

穴で、内部に柱根が残存している（第4図）。

（4）安土桃山時代以降 遺構数は更に増加し遺構の内容も多様化する。小規模な土壙や柱穴、井戸、基礎状遺構、大規模な穴巣状遺構などが重複し切り合って検出されている。

安土桃山から江戸時代前期の遺構では、まず調査区中央やや南寄りを東西方向を呈する溝SD85が挙げられる。その位置は、平安京の北六・七門間の推定境界線からは南に5m程ずれた所にある。断面逆台形で幅約1.5m、深さ1.2m前後の大規模なもので、東は調査区外に延び、西は現在の猪熊通りから29m余り、およそ16間強の所で途切れている。埋土は上層では小礫混じりの粗砂、下層はシルト状で、遺物として上層から寛永通宝や頭蓋骨などが出土している。

土壙SK168は調査区北半の中央付近に位置する。平面は方形に近いが北西に多角形の張り出しが持ち、東西、南北それぞれ約3mを測る。断面は概ね箱形であるが、一部西壁は外に張り出した袋状を呈し、深さ1.7m前後を有している。その西半上層は版築状に固く細かい整地層が幾層も認められるのに対し、東半は上層からの疊混じりの砂泥層という差異が認められる。下層は砂礫層となり、底部東端では薄く灰の堆積も認められる。下層からは古寛永6枚がまとまって出土しており、他の出土遺物から考えても17世紀前半の廃絶と見られる。

この他、小～中規模の土壙が多数検出されている。その中で土壙SK173は、2層にわたってほぼ完形の土師器皿が重なった状態で大量に出土した（図版2）。また調査区西端の土壙SK102からは径10cmに満たない小礫が、南寄りの土壙SK132からは拳大の礫がそれぞれ密集した状況で検出されている。

江戸時代中期から後期では、溝SD85との併存関係は明らかでないが、東西溝SD32・SD89や南北溝SD12が認められる。東西溝SD32・SD89は共にSD85の約3m北に位置し、その方向を東西には合致させ、両者とも幅50～60cm、深さ10～20cmを測る。SD89はSD85に比べて東、猪熊通りからおよそ15間の所で途切れ、約2.6m（1間半か？）を隔ててSD32へ接続すると考えられる。このことからSD89とSD32の間が通路となっていた可能性も推察される。SD89から明治13年銘の一錢銅貨が出土しており、少なくとも明治期まで存在したと考えられる。一方の南北溝SD12は幅30cm前後、深さも10cm程度と、東西溝SD32・SD89よりも小規模である。

SK168のすぐ北に位置する土壙SK157は、底部に磚が置かれ、その上には火葬骨を入れたと考えられる蓋付鉄釉壺、白磁壺の藏骨器が1個体ずつ認められた。出土状態は倒れていたが、正置されていたと考えられる。磚を取り上げると更にその下層からも藏骨器が出土した。その藏骨器の下からも人骨が出土し、平面方形を呈する掘形の隙から釘が出土したことから、当初は方形の木棺に埋葬されていた可能性がある。このことからSK157は少なくとも3回重複して順次埋納された墓壙といえる。

SK157の1m程北西から検出された土壙SK88は、残存最大径55cm程の甕を用いた甕棺墓と見られ、火葬人骨を埋葬する。そのすぐ北からは一辺60cm程の、平面方形を呈すると見られる土壙SK113が検出されている。人骨が出土しそれと共に見出されたことから、方形木棺であった可能性もある（図版2）。

切石組墓SK105は15cm×25cm×70cm程の直方体の花崗岩切石4個を「コ」字形に配している。石組内部からは径10cm前後の砾と蔵骨器と見られる伊万里染付壺などが出土した。また調査区北西隅からは集石SK100が検出されている。集石の密度はやや密であるが中心部には石は存在せず、直径約1mのドーナツ状平面を呈する。石の大きさは径数cm～20cm程度で、平坦な石敷き状を呈している。この下層から人骨を含む土壙SK232が検出されたことから、この集石は墓の上部を覆うように葺かれた施設と考えられる。

この他に瓦、陶磁器などの遺物が集中する土壙が認められる。調査区中央付近の土壙SK80は東側を搅乱に切られているが、一辺1m程の隅丸方形と見られ、深さ約20cmを測る。この土壙からは土師器、京焼系陶器などがやまとまって出土した。調査区東端北寄りに位置する土壙SK180・SK345は、長径1.2m、短径30cm以上の梢円形を呈すると見られ、土師器皿、陶磁器や鉄釘などが密集して出土している。

幕末以降に造営された遺構として、基礎状遺構が複数基検出されている。SK144は調査区中央部北寄りに位置し極めて浅い位置から検出された、礎石と木材による基礎（土台）状の遺構である。掘形は平面方形で一辺約1.3m、深さ10cm足らずを測る。1m程の間隔を空けて南北に並ぶ2本の木材は幅、厚さ共に10cm前後で、1本は長さ1m程が残存する。それぞれの材端は径30cm前後の花崗岩に乗せられ、木材の石に乘る部分にはホゾ穴があけられていることから、土台上に4本の柱が建ち上がって1m四方の構築物を構築していたと見られる。

SK144の1.5m程南西からはSK27が検出されている。これは2本の縱杭P29・P30と横材とをボルトで固定した基礎状遺構である。堀形は南を搅乱によって切られているが、平面方形で一辺約60cm、深さ約50cmを測る。横材は南北方向に、間隔を30cm程空けて置かれ、西側の材は70cm程が残存している。

土壙SK68は平面溝状を呈し幅20cm、長さ1.1mを測るが、深さは10cm未満しかなく、その底部から幅12cm程の角材が検出された。

SK144のすぐ南に延びる堀P106・P107・SK109は、江戸後期の東西溝SD89北端に沿って東西に2間分を確認した。これらの柱穴はSD89を切ってはいるが、この溝が少なくとも明治期まで存在したと見られることから、堀と東西溝とは併存したと考えられる。柱穴の間隔はおよそ90cm～1mで、最も東側のP106より更に1m東には同時期の南北小溝SK147が検出されており、この溝も関係する可能性もある。なおP106からは柱根の他、径10～20cmの砾が密集して検出されている。

SK144の30cm程東からは漆喰井戸SE34が検出されている。掘形は径15m程の円形を呈し、その内部に厚さ10cm程の漆喰で内径約80cmの井筒が認められる。

これらの他、調査区中央東寄りからは、径20～30cmの石を中心にはじめた長径1m短径80cm程の梢円形を呈する土壙SK87、調査区南東からは幅60cm程度の南北溝SD13がそれぞれ検出されている。

### 3. 遺 物

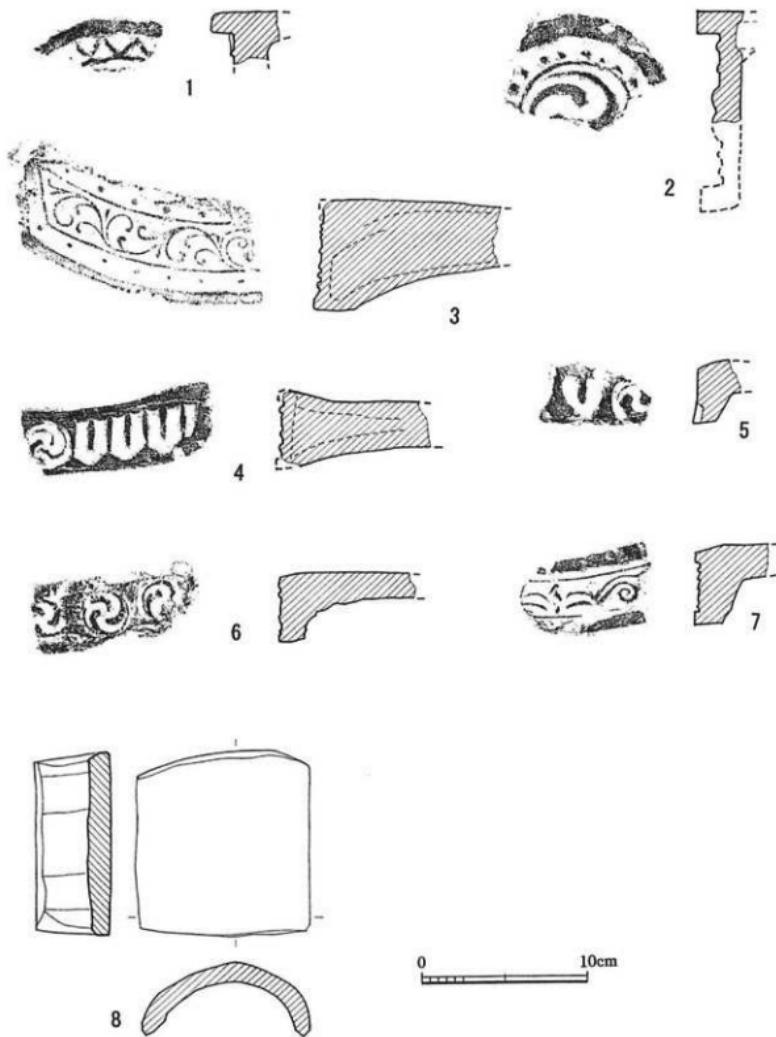
コンテナ数：113箱

時代	出土地	遺物	備考
平安京遷都前	溝、土壙	高杯、土師器壺、須恵器壺	
平安時代	溝、土壙	土師器皿・壺、須恵器壺、灰釉陶器碗、瓦、陶器、瓦器碗・鍋、白磁玉縁碗、中国白磁	
鎌倉時代	土壙	土師器皿、青磁、瀬戸、備前壺、瓦器鍋	
室町時代	土壙（焼土、灰層あり）、石組井戸、集石	土師器、須恵器、陶器、瓦器釜・鍋、瀬戸、美濃鉄輪天目碗、常滑窯、備前壺・擂鉢、唐津、白磁玉縁碗、明白磁皿、青磁、龍泉窯系青磁、中国青磁、中國製磁器、中国褐釉壺、山茶碗、東播系須恵器捏鉢、瓦・軒丸瓦、基石、鉄釘、巻貝	
安土桃山～江戸時代前期	溝、穴藏状土壙、集石、方形墓壙	土師器、陶器、京焼風陶器・朝鮮陶器、瓦器釜、伊万里丸碗織目紋・染付・青磁、美濃天目碗・鐵輪丸碗・灰釉・白磁、黒釉壺、唐津徳利・鐵釉丸碗・皿、志野向付・鐵繪皿、機部天目・向付・鉄船、信楽擂鉢・備前壺・青磁、中国染付・瓦・軒丸瓦・軒平瓦、磚、宝塔、焼塗壺、ミニチュア梵鐘、砾石、鐵製品・鉄釘・青銅製品、寛永通寶	
江戸時代中期～後期	溝、墓壙、切石組墓、土壙、天明の火災層	白磁蓋付壺、黒釉蓋付壺、土師器・土師器小鉢・信楽擂鉢・備前壺・伊万里染付・美濃天目・唐津刷毛目茶碗・志野向付・肥前染付碗・染付蓋付壺・丹波擂鉢・青磁・瓦・軒丸瓦・陶器、京焼系陶器・瓦器火消し蓋壺・風呂・鉄釘・銅製品・貝殻・魚の骨	
幕末～近代	溝、漆喰井戸、基礎状造構・土壙、基礎石据付痕	ガラス、陶器・京焼系陶器・白磁・赤絵・伊万里染付・瀬戸磁器・桟瓦・土師器・瓦器・伏見人形・貝殻	

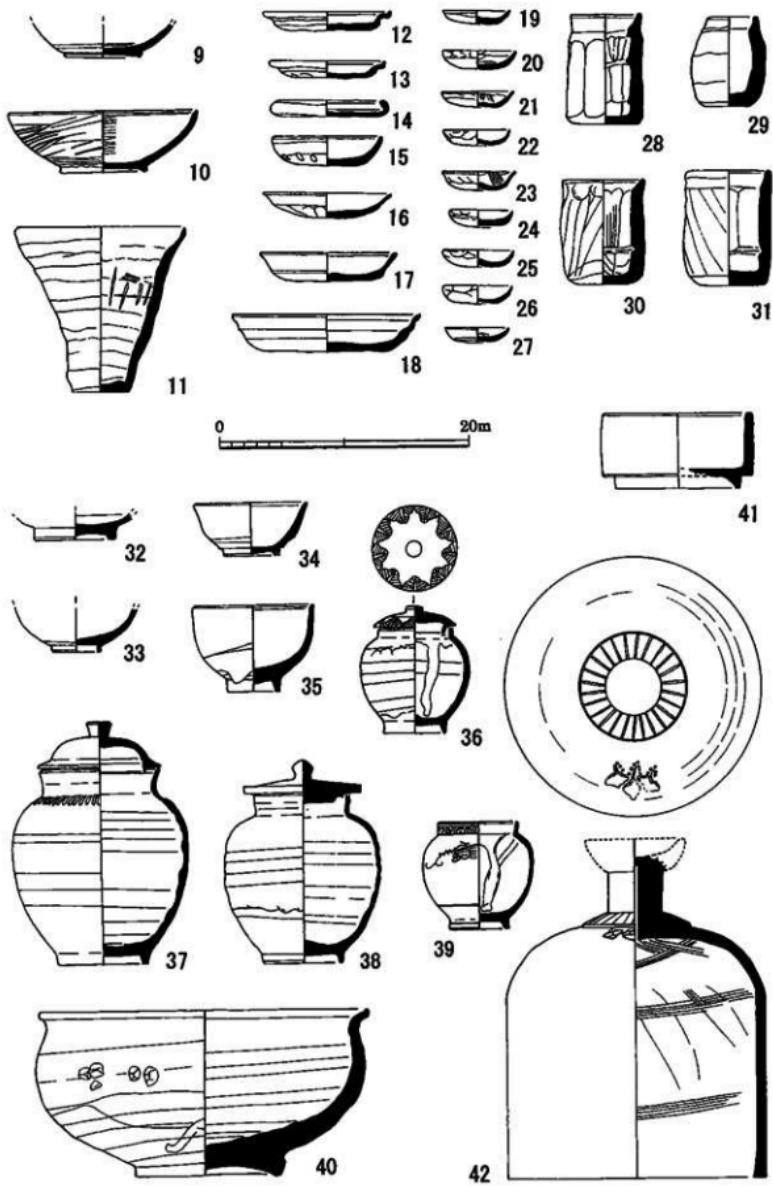
出土遺物の概要：今回の調査で出土した遺物は整理箱で113箱である。時期は古墳時代から近代までの長期にわたる。遺物出土量を時期別に見ると中世、近世の遺物が圧倒的多数を占めている。その中でも安土桃山時代から江戸時代前期までと室町時代から戦国時代までのものが多く、次いで江戸時代中期から後期まで、平安時代末期から鎌倉時代までとなり、平安時代のものは全体数からみるとかなり少ない。平安京遷都前は整理箱で2箱程度で最も少ない。器種別では土器、陶磁器が圧倒的多数を占め、瓦類は少ない。その他、金属製品では中国銭や寛永通寶などの錢貨、釘が出土している。自然遺物では人骨、獸骨、魚骨などが出土している。

平安京遷都前の遺物は溝と土壙より土師器皿・高杯・壺、須恵器壺などが出土している。SD279からは6世紀代の土師器高杯・壺、須恵器壺・壺が出土している。出土量が少なく破片ばかりであるが、高杯など復元可能な数点もある。SK251からは少量ではあるが土師器が出土しており、SD279を切っていることからSK251は古墳時代後期と考えられる。

平安時代の遺物は前期、中期、後期の各時期の溝と土壙から出土している。前期はSD234から土師器皿・壺、須恵器壺・壺、瓦を出土している。中期はSK350から土師器皿の完形品を多量に



第6図 出土遺物（軒丸瓦（1・2）・軒平瓦（3～7）・面戸瓦（8））



第7図 出土遺物（骨壺：32～40、瓦灯蓋：42）

出土している。後期はSD233とSK335から土師器皿、陶器、瓦器碗が出土しているが量は少ない。平安時代末期から鎌倉時代になると遺構数は増え、遺物の出土量も増加する。器種も土師器皿、須恵器甕、瓦に加え、白磁壺、東播系須恵器捏鉢、陶器片など量は少ないと出土するようになる。また、土師器皿の出土量が増加し、SK200、SK313などでは出土遺物のうち大半を土師器皿が占めている。

南北朝時代になり遺構が一時少なくなる時期があるが、室町時代から戦国期になると遺構は増え、それに対応して遺物も多量に出土するようになる。土師器皿の出土量はさらに増加する。この時期になると、華南白磁、龍泉窯系青磁などの輸入陶磁器が目立つようになる。南北朝時代は土壙が数基あるのみである。これらの土壙内からは土師器皿、陶器、常滑甕、備前捏鉢、瓦器三脚鍋、白磁、瓦などが出土している。室町時代から戦国期になると遺構は増加し、大規模土壙、石組井戸などから多量に出土するようになる。器種も土師器皿・鉢・陶器、常滑甕、瀬戸水注、美濃天目、瓦質土器・香炉、瓦器釜・鍋、東播系須恵器捏鉢、中国褐釉壺、龍泉窯系青磁など非常に豊富になる。SK164、SK171、SK172などの大規模土壙や石組井戸SE36から器種、量ともまとまって出土している。

安土桃山時代以降になると京焼風陶器、瀬戸・美濃、信楽、備前、丹波、肥前など国内生産の陶磁器がそれまでの土師器に加えて主体となってくる。

安土桃山から江戸時代前期は本調査の中でも最も遺物が出土した時期である。土壙、柱穴、井戸、基礎状遺構、溝などから出土している。SD85からは土師器、伊万里染付、美濃鉄釉丸椀・天目椀、唐津、備前徳利、織部、京焼風陶器、焼塗壺、瓦・軒丸瓦、ミニチュア梵鏡、寛永通寶などが出土している。またSD85の肩部からは頭蓋骨が出土している。江戸時代中期から後期になると土壙、溝の他に墓壙では信楽甕や伊万里染付壺、白磁蓋付壺、黒釉蓋付壺が葬骨器として使用されている。

幕末から明治時代には、井戸、基礎状遺構、堀、土壙などから陶器、京焼系陶器、伊万里染付、瀬戸磁器、棟瓦、伏見人形、ガラスなどが出土している。

#### 4.まとめ

本調査においては鎌倉時代以前の遺構は少なく、主に把握されたのは当地に立地した本國寺の境内ないし「寺内」の概況であると考えられる。ここではそれを含めた本調査地の土地利用状況を復元考察して総括とする。

はじめに平安京遷都前であるが、調査区の北端から南端にかけて溝2条が認められる。その肩部形状や平面から自然の流路と思われるが、恒常的な水路であったかどうか判然としない。なお調査区は、弥生から古墳時代に存続した集落跡である烏丸綾小路遺跡に含まれているが、古墳時代に遡ると見られるこれらの流路は同遺跡と関連する可能性もある。この流路廃絶後に土壙が掘られているが、その用途性格は不明である。

平安京遷都後、調査区は左京六条二坊二町の東南隅に相当するが、検出された遺構は僅かである。平安前期の東西溝SD234は、北六・七門間の推定境界線より1.5m程南にずれた所に位置しているが、土地の区画に供された可能性もある。平安後期に至るとSD234の北に別の東西溝SD233が設けられる。両者の併存関係はにわかには判断し難いが、区画の変更がなされたとも考えられる。

平安末期から鎌倉時代では遺構数もやや増加し、それらの中に破碎された土師器片を多量に出土する土壤も認められる。これらより調査区は「ハレ」の場というよりも往時の日常的な生活の場であったと見られる。

遺構数が一段と増加するのは室町時代に入ってからである。史料では調査区を含む12町に本国寺が構えられるのが14～15世紀末とあり、この時期の遺構数増加・遺構内容の変化は調査区の寺域化を示していると考えられる。基壇など仏堂の存在を示す遺構は認められないが、大規模な土壤などが検出され、本調査区は本国寺域にあって子院、塔頭など、ある程度大きな面積を有する地割に相当したと考えられる。その一隅には石組井戸が設けられ、柱穴の存在から掘立柱の建造物が建っていたことなど、中世子院の様相をある程度垣間見ることができる。

大規模土壤や石組井戸の上層には灰、焼土の堆積が認められたが、文献からは永享10年（1438）「夜六条坊門猪脰瓦堂炎上」（『看聞御記』）、享徳3年（1454）樋口南、六条坊門北、猪熊西、大宮東に立地する樋口大宮道場の焼失（『康富記』）が見出される。特に後者は本国寺との関連という点で不明瞭な存在であったが、本調査がその存在と焼失との裏付けとなった可能性もある。また16～17世紀に属する土壤SK168などの埋土には炭化物が多く、天文5年（1536）法華の乱や永禄12年（1569）三好三人衆来襲における火災などによるものと見られる。

安土桃山から江戸前期の遺構では、幅、深さ共1mを超す大規模な東西溝SD85が調査区中央寄りに位置する。溝の性格は不明であるが、その北側には大規模土壤SK168が掘られている。SK168周辺には室町時代以来の大きな地割を分割したのがこの時期であると考えられる。なおSD85は猪熊通りから16間強の所、四行八門の一丁にはほぼ相当する所で途切れしており、寺域ではあるが古来の町割を踏襲していると考えられる。

江戸中期から後期以降、遺構数は更に増大しその内容も多様化する。先のSD85は17世紀前半には廃絶したと見られ、より狭く浅い新たな東西溝SD89・SD32や南北溝SD12が設けられる。これは、例えば天明8年（1788）の大火後、土地区画ないし境界線の意義が軽微化し、同時に地割の細分化が進んだことを示しているとも考えられる。SD89は猪熊通りから15間の所で一旦途切れ、間をおいて再びSD32に接続すると見られることから、両溝の間に往来の通路などが設けられていたと推定されるが、これは地割の細分化に伴い、敷地の裏側をも利用するようになったためと考えられる。

東西溝の北側には複数基の墓が営まれているが、この溝が子院間の境界線であったと見ると、溝北側の子院は猪熊通りに東面していて、その背面に当たる西側に墓地を造営したと想定される。江戸時代後期の『本圀寺惣境内図』によると、調査区北に現存する了光院、南に現存する林昌院

のすぐ東に猪熊通りと見られる南北道路が通っており、両院の間即ち調査区付近の子院はいずれも南北道路に東面している。

幕末から近代にかけて、東西溝の北側には漆喰井戸と小規模な堂、溝に沿った塀などが設けられ、墓地として整備された様相を呈していたと想像される。一方溝で区画された南東には土壇群が重複して見られるが、南西は遺構自体あまり見られない。これにより単独の子院内ないし隣り合う複数の子院において、土地を利用し分けていた状況を推察することができる。同時に、江戸時代以降の調査区においては、近現代に至るまで土地の分割とその利用が活発で連續的であったといえよう。

# 図 版

報告書抄録

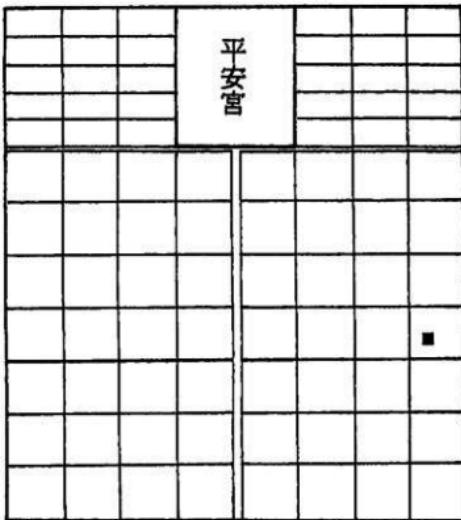
ふりがな	へいあんきょうさきょうないごいせき							
書名	平安京左京内 5 遺跡							
圖書名	平安京左京六条二坊二町跡							
卷次								
シリーズ名	平安京跡研究調査報告							
シリーズ番号	第 22 編							
編著者名	堀内明博・江谷 寛							
編集機関	(財) 古代学協会							
所在地	〒 604-8131 京都市中京区三条高倉 TEL 075 (252) 3000							
発行年月日	平成 20 年 11 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
へいあんきょ うさきょうろ くじょうにほ うにちゅうあ と	きょうとししも ぎょうくいのく まどおりごじょ うあがるかきも とちょう	26100		34 度 59 分 48.03 秒	135 度 45 分 01.48 秒	1998 年 4 月 11 日 ～ 7 月 4 日	232	建物建築 工事
平安京左京六 条二坊二町跡	京都市下京区猪 熊通五条上ル柿 木町 590-4							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京六 条二坊二町跡	都城跡	平安京	流路、土壤	高杯・土師器壺・須 恵器壺				
		平安時代	溝、土壤	灰釉陶器碗・瓦・白 磁玉縁碗				
		鎌倉時代	土壤	青磁・瀬戸・備前				
		室町時代	土壤 (焼土)、集石、石組井戸	美濃・常滑・備前・ 唐津・竈泉・軒丸瓦				
		安土桃山～江戸前 期	穴藏状土壤、方形幕塙	京焼・伊万里・織部・ 燒塙壺・瓦				
		江戸中期～後期	幕塙、切石組幕、天明の火災層	瓦・信楽・伊万里・ 備前・志野・風呂・ 火消し壺				
		幕末～近代	漆喰井戸、礎石塗、基礎状遺構	ガラス・赤絵・伊万 里・瀬戸・伏見人形				

# 平安京左京六条四坊六町跡

京都府民共済生活協同組合用地

## 例　　言

- 1 遺 踪 名 平安京（平安京左京六条四坊六町）  
2 調査所在地 京都市下京区堺町通五条上ル俵屋町 203・368・370・371  
3 委託者 京都府民共済生活協同組合  
4 調査期間 平成15年（2003）5月6日～7月9日  
5 調査面積 約234m<sup>2</sup>  
6 契約番号 略記号：03HK—SA3  
7 調査担当者 堀内明博  
8 実動日数 45日  
9 延べ人数 補助員 90人 作業員 283人



第1図 平安京条坊の調査地点

## 目 次

1	調査概要 .....	1
(1)	調査概要 .....	1
(2)	特記事項 .....	2
2	遺構 .....	2
(1)	平安京の宅地 .....	2
(2)	道路 .....	5
3	遺物 .....	6
4	まとめ .....	9

## 図版目次

図版1	1 調査前風景 北東から	
2	SD135完掘 西から	
図版2	1 SX032 北から	
2	SE047 東から	
図版3	1 P117	
2	SX001 遺物出土状況	

## 挿図目次

第1図	平安京条坊の調査地点 .....	i
第2図	左京六条四坊と調査地 .....	1
第3図	基本層序 .....	2
第4図	近世遺構略図 .....	3
第5図	中世遺構略図 .....	3
第6図	平安時代遺構略図 .....	4
第7図	平安京左京六条四坊六町跡遺構図 .....	4
第8図	出土遺物 .....	6
第9図	出土遺物 .....	7
第10図	出土遺物 .....	8
第11図	『塩坂』銘 緑釉陶器 .....	8



# 平安京左京六条四坊六町跡

京都府民共済生活協同組合用地

## 1. 調査概要

### (1) 調査概要

調査地は、京都の市街地の東南、標高33m位の場所に位置する。当地は平安京の東南、東を東京極大路、西を東洞院大路、北を五条大路、南を六条大路に囲まれた「左京六条四坊」にあり、その中央付近に相当する。この周辺では、1994年において十一町において調査がなされ、平安時代前期から中期にいたる左大臣源融（嵯峨天皇第八皇子）の邸宅河原院に伴う園池や六条坊門小路の路面や溝などが確認されている。調査範囲は、東西約21m、南北15m規矩形を呈し、東西路である六条坊門小路と六町の一部が含まれることから、これらにかかる遺跡群の存在が予想された。六町は文献史料によると、白河上皇の六条院、さらには攝政藤原師実の六条殿などに比定されておりことから、これらにかかる遺構や遺物の発見も予想された。



第2図 左京六条四坊と調査地

## (2) 特記事項

平安時代から鎌倉時代にわたる六条坊門小路の変遷の状況を明らかにすることことができた。

## 2. 遺構

遺構数 138 基

時代	遺構	備考
近世・近代	井戸、土壙、集石遺構、柱穴	
中世	井戸、土壙、溝、路面	
平安時代後期	土壙、溝、路面	
平安時代前期	溝、路面	

### 遺構の概要

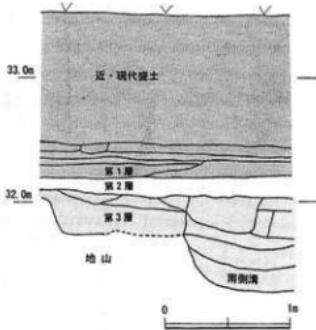
基本層序は、現地表下1m前後が現・近代盛土である。その下第1層は、厚さ20~40cmの10YR3/2黒褐色砂泥層で、近世の整地層である。その上面の標高は32.38~32.58mを測り、北高南底の地形である。第2層は、厚さ10~20cmの2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥層で、中世の整地層であり、ほぼ平坦な地形となる。第3層は、厚さ20~34cmの2.5Y3/2黒褐色砂泥層で、平安時代の遺構面であり少し北が高くなっている。

本調査により確認された遺構総数は138基を数え、平安時代前期から近代まで至り、平

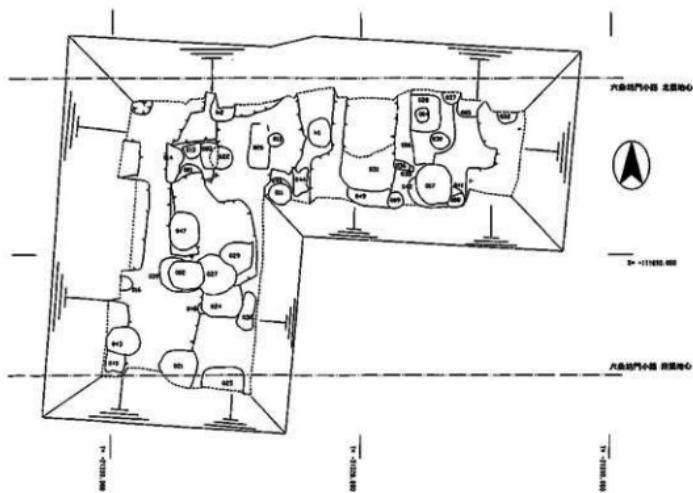
安時代、中世、近世・近代の3時期に大別される。以下に主要な遺構について概観する。

### (1) 平安京の宅地

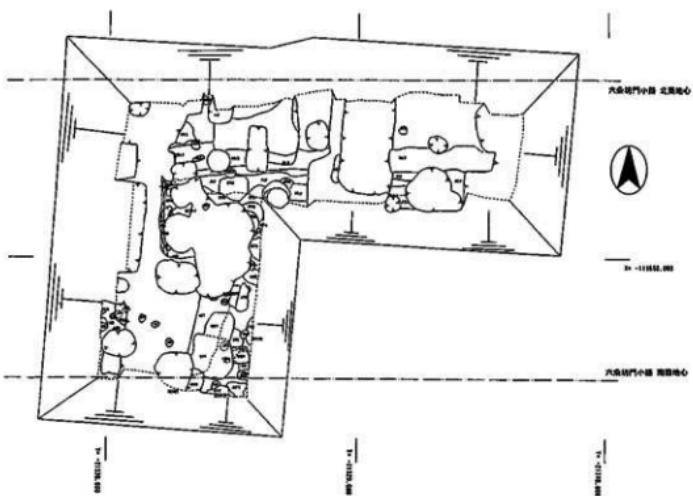
六町では、江戸時代の井戸が6基密集して確認された。これらは石組み、瓦組など様々な井筒がみられ、その底には大抵桶を据えた痕が見られた。桶のなかには、直径が80cmを測る大きなものもある。それ以前の遺構に関しては、僅かに柱穴が見られた以外、認められなかった。この柱穴と同様なものは路面部にもみられ、それらは調査区の東端に南北に並ぶように認められる。



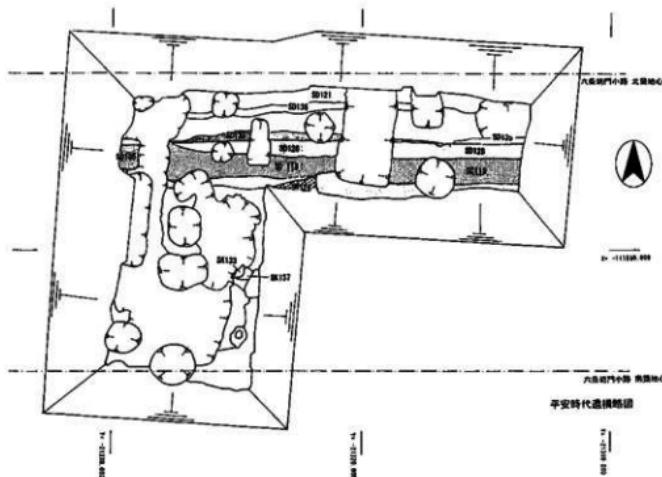
第3図 基本層序



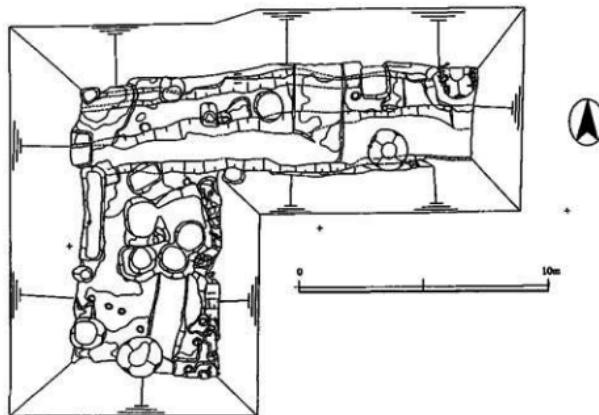
第4図 近世造構略図 S = 1/200



第5図 中世造構略図 S = 1/200



第6図 平安時代遺構跡図  $S = 1/200$



第7図 平安京左京六条四坊六町跡遺構圖

## (2) 路

六条坊門小路想定位置にも、江戸時代の井戸、集石遺構、土壙などが確認できる。それらの中には、17世紀初頭のものが含まれることから、この時期にはすでに路でなく宅地に変わったことが判明した。土壙の中にはオクドサンと思われるものがあり、直径80cm以上、深さは約10cmを測り、なかから完形の骨製品が4点出土している。

小路の路面は7層ほど確認でき、そのうち最も時期の下がるものは室町時代のものが認められたが、それには側溝は伴っていなかった。のことから、この時期では単なる路でしなかったと考えられる。溝が認められるのは鎌倉時代前期までで、平安時代末から重複をしてみられる。なお、北側溝は確認できたが、南側溝は江戸時代以降の遺構群のため、その一部を南端部で確認したにすぎない。

平安時代後期の北側溝の東半には拳大より大きな川原石群とともに多量の11世紀末頃と考えられる土師器皿が出土した。溝幅は1m弱、深さは約30cmを測り、比較的浅い。この溝はもう一時期古いものと重複している。同じ位置の更に下に、平安時代前期にさかのぼる溝が認められた。なお、これらの溝の北には更に同時期の溝があり、その間は少し高まりとなっておりここには築地の存在が予想される。

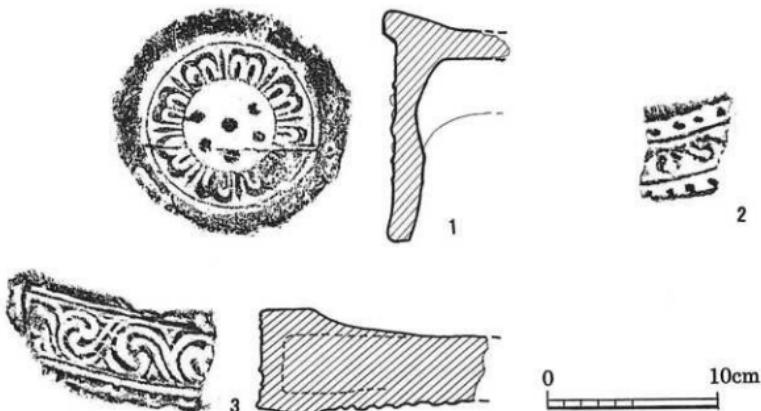
なお、この築地を含めた範囲に路面の整地層が確認できることから、平安時代後期以降路の位置が変更された可能性がある。このことについては、「延喜式」の記載内容にもかかり、更に検討する必要があると考えられる。

### 3. 遺 物

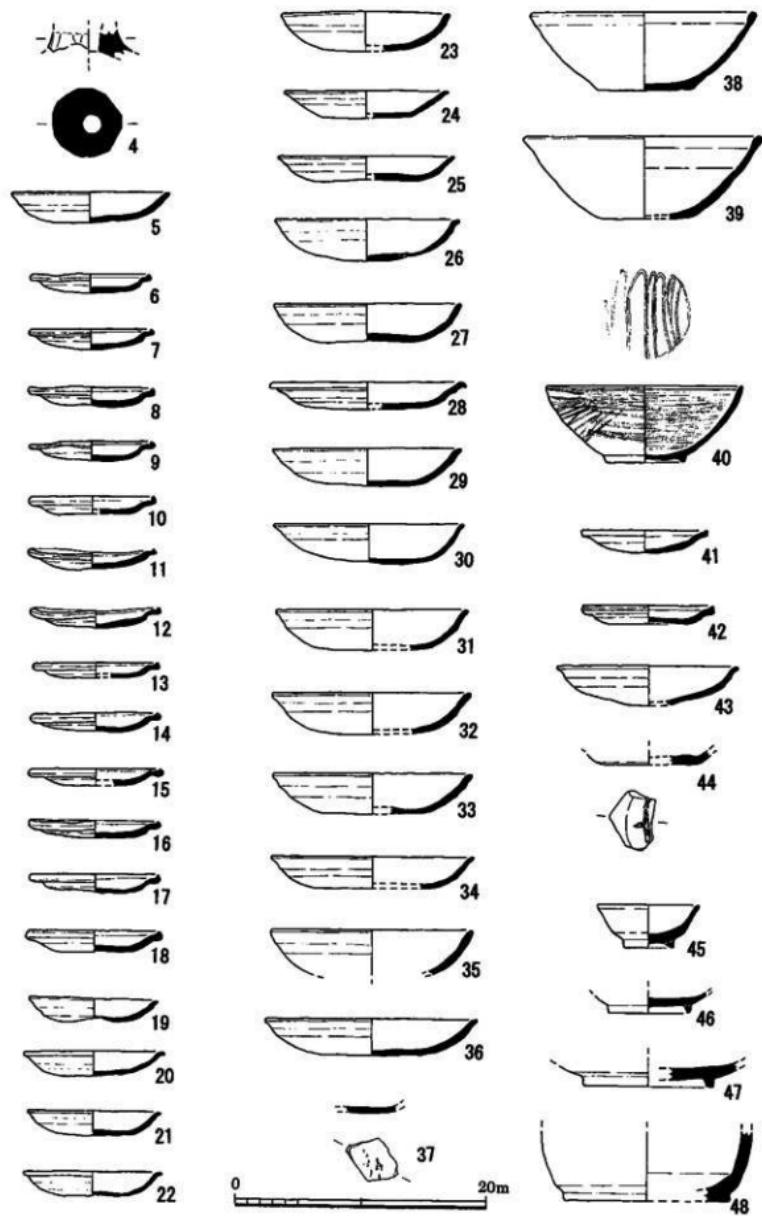
コンテナ数：69箱  
土器、金属、木製品、獸骨

時代	出土地	遺物	備考
近世	井戸、土壙	土師器皿、陶磁器椀・杯・皿・鉢・壺・甕・水注・瓶・猪口・火鉢、土鍋、黒色土器椀、硯、瓦、瓦器、鑄造関連遺物（堀堀、サヤ）、寛永通寶	
中世	柱穴、溝、土壙	土師器皿、須恵器杯・壺・瓶・甕、陶磁器椀・杯・皿・鉢・壺・甕・水注・瓶・猪口・土鍋、瓦、瓦器、鑄造関連遺物、元豊通寶	
平安時代	柱穴、溝、土壙	土師器皿・杯・甕、須恵器杯・壺・甕、黒色土器椀・甕、灰釉陶器椀、綠釉陶器椀、軒丸瓦、軒平瓦、獸骨、鑄造関連遺物	

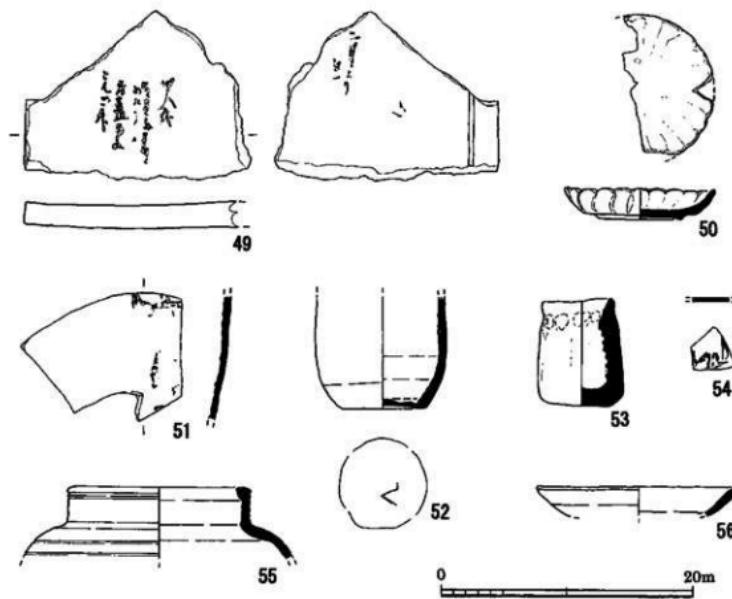
出土した遺物は、コンテナーに70箱程度と多くないが貴重なものがいくつかみられる。その一つは、平安時代の六条坊門小路の北側溝からのものである。特に11世紀末の土師器の皿を中心にしてまとまって出土した。また、南側溝の想定位置付近より9世紀後半の綠釉陶器が出土したが、その底部外面に「□□□塙坂」と線彫りで文字が刻まれていた（第11図）。解説の途中であるが、平安時代の当地の性格を知る手がかりとなる貴重なものといえる。また北側溝内から平安時代後期の軒丸瓦が完形で出土した。このほか側溝からは土師器の皿・杯・甕、須恵器の杯・壺・甕、黒色土器の椀・甕、綠釉陶器の椀、灰釉陶器の椀、瓦、獸骨など様々なものを見られる。



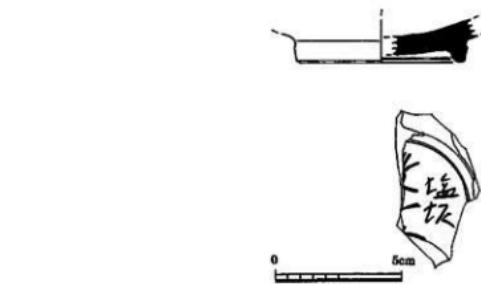
第8図 出土瓦



第9図 出土遺物

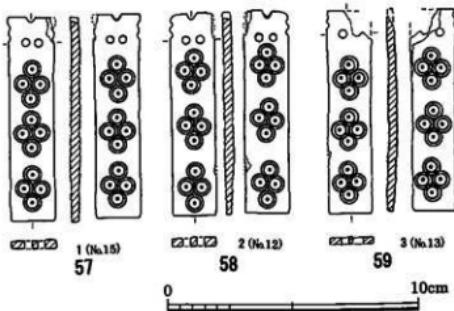


第10図 出土遺物



第11図 「塩板」銘 緑釉陶器

一方、路面から宅地に変わって以降の遺物に美濃、信楽、備前、唐津、伊万里など全国各地の陶磁器があり、なかでも17世紀前半のものがまとまって出土している。なお、19世紀の鉄軸の壺の底部外面に、墨で「山上」とかかれたものがある。これは屋号と考えられ、居住者が特定できる興味深い史料である。そして、調査区北端の擾乱より多量の焼け瓦が出土したが、その一つに



第12図 出土遺物

墨で「四人代、金壺両毫分□、[ ]、御堂□□、こんご代」とかかれたものがある。解説の途中であるが、江戸時代の生活を知る手がかりといえる。またこの擾乱は深さが約2mあり、火事に遭った際にここに瓦などを廃棄したと思われ、天明の大火（天明8、1788年）か、蛤御門の変などの動乱との関係も考えられる。

#### 4. まとめ

今回の調査の成果として、六条坊門小路部における平安時代から近世の変遷を追うことができた。特に路面の整地層を7層確認し、平安時代後期に路面の位置が変更されたことが窺え、さらに鎌倉前期以降は、溝を伴わない路となったことも明らかになった。なお当初期待された六町について、調査区の制約からほとんど明らかにすることができなかった。

# 図 版



1 調査前風景 北東から



2 SD135完掘状況 西から

図版  
2



1 SX032 北から



2 SE047 東から



5 PI117



6 SX001遺物出土狀況

報告書抄録

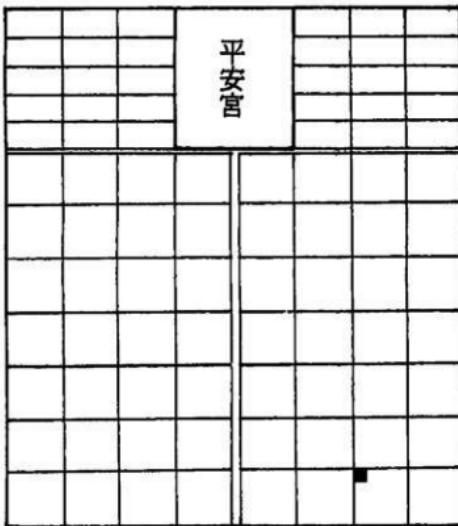
ふりがな	へいあんきょうさきょうないごいせき						
書名	平安京左京内5遺跡						
圖書名	平安京左京六条四坊六町跡						
番次							
シリーズ名	平安京跡研究調査報告						
シリーズ番号	第22輯						
編著者名	堀内明博・江谷 寛						
編集機関	(財)古代學協會						
所在地	〒604-8131 京都市中京区三条萬倉				TEL 075(252)3000		
発行年月日	平成20年11月30日						
ふりがな 所収遺蹟	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺蹟番号	東經 ° ° °	調査期間 mm	調査面積 m²	調査原因
へいあんきょ うさきょうろ くじょうよん ぼうろくちよ うあと	きょうとししも ぎょうくさかい まちどおりご じょうあがるた わらやちょう	26100		34度 59分 36秒	135度 45分 59秒	2003年 5月6日 ~ 7月9日	234 建物建築 工事
平安京左京六 条四坊六町跡	京都市下京区界 町五条上ル後屋 町203・368・371						
所収遺蹟名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
平安京左京六 条四坊六町跡	都城跡	平安時代	柱穴、溝、土壙		軒丸瓦、 軒平瓦、 灰釉陶器、 綠釉陶器 鋳造圓筒遺物		
		中世	柱穴、溝、土壙		陶磁器(水注、猪口) 土鍋、 鋳造圓筒遺物		
		近世	井戸、土壤		火鉢・土鍋・硯・ 黒色土器、 鋳造圓筒遺物 (培塿、サヤ)		

平安京左京九条三坊一町跡

三越ユニティー用地

## 例　　言

- 1 遺跡名 平安京跡（平安京左京九条三坊一町）（烏丸町遺跡）  
2 調査所在地 京都市南区西九条院町21  
3 委託者 株式会社三越ユニティー 代表取締役 王本寛一  
4 帖佐期間 平成12年（2000）9月28日～11月8日  
5 調査面積 約250m<sup>2</sup>  
6 契約番号 略記号：00HK-SA1  
7 調査担当者 堀内明博  
8 実動日数 28日  
9 延べ人数 補助員 149人 作業員 133人



第1図 平安京条坊の調査地点

## 目 次

1	調査概要 .....	1
(1)	調査概要 .....	1
(2)	特記事項 .....	2
2	遺構 .....	3
(1)	平安時代後期 .....	3
(2)	平安時代末～鎌倉時代後半 .....	5
(3)	鎌倉時代初頭～南北朝時代 .....	6
3	遺物 .....	7
4	まとめ .....	14

## 図版目次

図版1	1 調査前全景（西から）	
	2 調査区全景（西から）	
図版2	1 地図SX132（東から）	
	2 堂倉SK54（奥）堀倉SX100（手前）（西から）	

## 挿図目次

第1図	平安京条坊の調査地点 .....	i
第2図	調査位置図 .....	1
第3図	平安京左京九条三坊一町跡遺構平面図 .....	4
第4図	堀倉SK100, SK54遺構図 .....	5
第5図	出土遺物（軒丸瓦、軒平瓦） .....	8
第6図	出土瓦（軒平瓦） .....	9
第7図	出土瓦（平瓦） .....	10
第8図	出土瓦（平瓦） .....	11
第9図	出土遺物 .....	12
第10図	出土遺物 .....	13

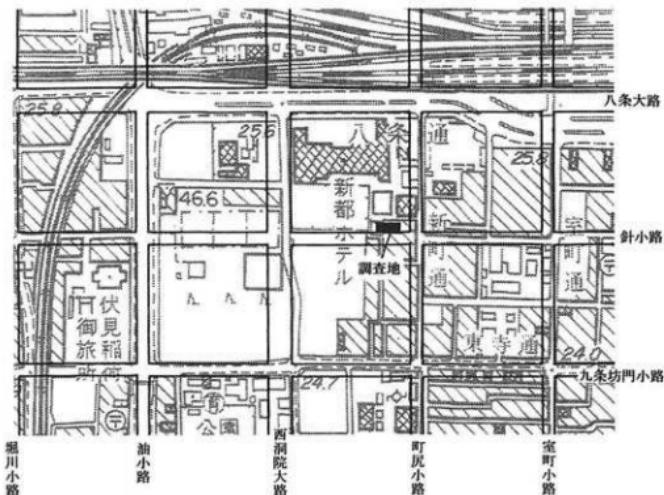
# 平安京左京九条三坊一町跡

## 三越ユニティー用地

### 1. 調査概要

#### (1) 調査概要

本調査地は、平安京左京九条三坊一町に相当し、平安京の東南隅、南端九条大路付近に位置する。現在当該地は、JR西日本の京都駅南から西南すぐの所に立地する。既存の調査例をみると、東側の九条三坊十六町（アバンティー）では、平安時代後期から中世にかけての多くの井戸とともに7世紀代の井戸、古墳時代の流路などが確認されている。一方に西側の九条二坊二・三町では、農臣秀吉による御土居に伴う堀や土堤が確認され、その中でも堀内から安土桃山時代から江戸時代にかけての木札を含む多量の木製品の出土が知られる。また東南の九条三坊十三・十四町の烏丸小路想定地からは平安時代から中世にかけての寺院と考えられる境内を画する堀跡がいくつか確認されている。そして京都駅の北側の八条三坊三・六・十一町では南北朝から室町時代にかけての鋳造関連遺構が確認され、文献に知られる鳥羽天皇の娘八条院璋子内親王の「八条院御所」を中心とした八条院町に想定されている。このようなことから当該地においてもこれらに関



第2図 調査位置図

連する遺跡の存在が予想された。また当該地周辺一帯は、縄文・弥生時代から古墳時代の集落遺跡である烏丸町遺跡にも相当することから、これらに関連する遺跡群の存在が予想された。

まず本調査に先駆け、工事範囲内に京都市埋蔵文化財調査センターによって、試掘調査が実施され、その結果平安時代後期から中世にかけての建物の地業、井戸、土器溜まり、溝、土壙等が確認された。このことから、当該区にはこれらに関連する遺構・遺物が良好に存在していることが予想された。

工事範囲は、東西39.2m、南北11.5mの範囲であったが、試掘調査の結果西端から14mほどが既存施設により搅乱を受けていることが判明したので、それらを除いた250m<sup>2</sup>の範囲を対象とした。調査は13年（2000）9月8日から同年11月8日まで行い、予想通り平安時代後期から中世にかけての遺構・遺物を良好な状態で確認した。

## （2）特記事項

調査の結果、東西11m、南北7～8mの長方形の掘り方と東西5.8m、南北1.5m以上の四角い掘り形が2基千鳥形に配置されたような状態で確認された。その中には多量の拳大の河原石が積まれた状態で確認された。同様な遺構は、白河の六勝寺や鳥羽離宮跡の寺院の堂舎で地業がみられることから、これらも何らかの堂舎に関連した地業と考えられる。

当地一帯は、有職故実の藤原師輔の九条殿があったことが知られ、それに関連したものと考えられる。またこれらの遺構は13世紀以降廃絶し、甕を据え付けた痕跡を有する地下蔵の遺構群が出現し、しかもその周囲には多量の掘立柱痕跡が確認されたことから、町屋が成立したことが判明した。そして町屋は何回かの建て替えを経るが、15世紀代には衰退し、耕作地化へ変異していくことも、明らかとなった。

## 2. 遺構

時代	遺構	備考
平安時代以前	流路	
平安時代後期	地業 SX3・132	
平安時代末 ～鎌倉時代初頭	土器窯 SX119、井戸 SE106、土壙 SK122、柱穴	
鎌倉時代初頭 ～鎌倉時代前半	堀倉 SK54、井戸 SE119、土壙 SK7、井戸 SE105、柱穴、 堀据え付け跡	
鎌倉時代前半 ～鎌倉時代後半	井戸 SE124、柱穴	
鎌倉時代後半 ～南北朝	堀倉 SK100、柱穴	

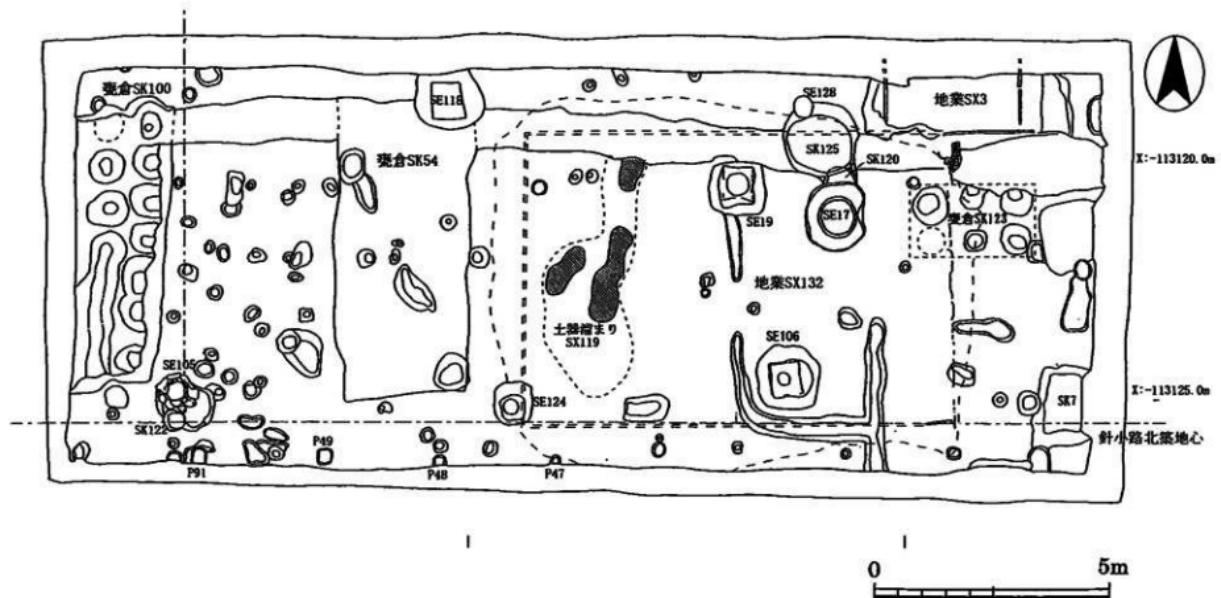
### 遺構概要

今回の調査で確認した遺構群は、総数115基を数える。これらは、平安京以前、平安時代後期、平安時代末～鎌倉時代初頭、鎌倉時代初頭～鎌倉時代前半、鎌倉時代前半～鎌倉時代後半、鎌倉時代後半～南北朝の7期に分けることができる。これらの遺構群を形成している層は2.5Y4/3才リープ褐色砂礫層で、古墳時代の遺物を含む流路の堆積層である。また平安時代末から南北朝までの遺構群は重複関係があり、4時期に細分され、しかも連続と途切れることなく作り替えられていた。ただそれ以後の明瞭な遺構は、調査区の範囲内では確認できなかった。以下各時期の主要な遺構について概観する。

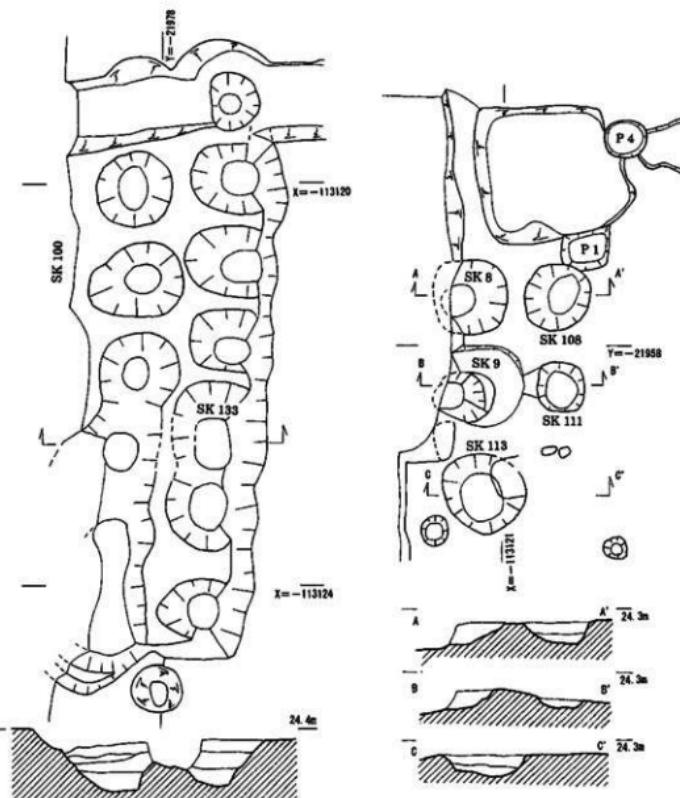
#### (1) 平安時代後期

確認した遺構群は、九条三坊一町の宅地内建物に関わる地業である。それらは調査区の中央より東側に分布する。地業SX3は、調査区北東隅で一部分だけ確認した。掘形は、東西4.7m、南北1.5m以上で深さ0.6mを測る。掘り形の壁際には幅60cm、厚さ4cmほどの横板を据え、南壁だけ板材が残存した以外は痕跡をとどめていた。板は壁際沿いに幅40～50cm、10～20cmの溝状の掘り込みを行った後に板を横に据えて建て並べ、板と掘形の間を土で突き固めて固定されている。板で囲まれた内側には径8～20cmの河原石が底から25cmほど充填され、その上を厚さ20cmほどの2.5Y4/2暗灰黄色砂泥があり、更に板の上面まで2.5Y4/2暗灰黄色砂泥（土師器を多量に包含、炭化物を混入）で覆われている。なおこの地業の東南隅で河原石を除去した下から、東西90cm、南北35cm、深さ12.3cmの長方形を呈する土壙状のもの1基を検出した。その南壁と東壁は平瓦を立て並べ、底にも平瓦凸面を上にして敷いてあるのを確認した。これは地業に関連するものと考えられるが、性格は不明である。

この地業SX3の西南で地業SX132を確認した。掘形は東西11m、南北8m、深さ60cmを測る。これも掘形の壁際には板材の痕跡が確認できた。特に東壁では、縦板と横板を組み合わせ、しかも一定の間隔で杭の痕跡も確認できた。板材の内法は、東西9.9m、南北6.4mの規模を測り、板



第3図 平安京左京九条三坊一町遺構平面図



第4図 堺倉SK100、SK54遺構図

幅6.5cm、厚さ4cmほどである。底の壁際には幅60cm、深さ20cmほどの素掘りの溝が四周を巡り、板材を止める掘形となっている。板で囲まれた中は、拳大の河原石で充填されていることは、SX3と同様であるが、地業の上面まで認められることとなる。また川原石群には、積まれた列状に配列したような痕跡が見られなかったことから、一度に乱雑に積まれたものと考えられる。なお河原石群内から、平安時代中期と後期に属する軒平瓦が3点出土した。南壁沿いの板列は、針小路北築地心の想定線とほぼ一致する。このことからこれらの遺構の範囲は針小路を取り込んで南に広がっている可能性が極めて高い。

## (2) 平安時代末～鎌倉時代後半

井戸を5基確認した。SE105以外の井戸は、井筒が方形横棟縦板組みを採用する。それは一辺

65～80cmで深さ55～80cmを測る。底には径36～52cm、深さ20～50cmの曲げ物を据えている。SE105は内法約50cm、深さ1mを測る石組み井戸である。底には径45cm、深さ24cmの曲げ物を据える。SE118から軒丸瓦が1点出土する。七条大路以南での石組み井戸の検出例は、極めて少なく当該地域において貴重な例といえよう。なお井戸に類するものとして、地業SX132の中央より北端すぐ北に径45～48cm、深さ35cmを測る曲げ物1基を確認している。

### (3) 鎌倉時代初頭～南北朝時代

壺倉2基を確認した。壺倉SK54は、調査区中央西寄りで認めたものである。東西2.75m、南北6.5mの長方形を呈し、その底部には東西3列、東から7基、中央9基？、西7基と計33基の壺の据えつけた痕跡が認められた。底までの深さは東側1列が10cmであるのに対し、他は25cmと西が一段深くなっている。壺の据えつけた痕跡は東西2列が径90cm、深さ30～35cmの半球形であり、中央が径55cm、深さ40cmの半球形と、径が一回り小さいのに対し、深いことが特徴といえる。痕跡内には、壺は既に抜き取られ、ほとんどとどめていなかったが、一部壺の破片が出土した。

壺倉100は調査区西端で全体の2/3を確認した。東西は2.25m以上、南北6.5mの長方形を呈し、その底には東西2列以上、各々7基、計14基以上の壺据付痕跡が認められた。底までの深さは28cmほどでSK54のような底の深さをえた段は認められなかった。壺据付痕跡は、抜き取る際に肩部が崩れて遺存状況はよくないが、大部分東西幅90cm、南北幅70cmの円形ないし、やや梢円形を呈し、深さ33cmほどを測る。なお東西南隅のものだけが東西80cm、南北60cm、深さ28cmと一回り小さい。これも壺が据わったような状態ではなく、僅かに破片が出土するに過ぎない。これ以外に上述した2基の壺倉のように全体を掘り廻めたものではないが、壺を3基（南側は2基だけ）、南北に2列並べたものを調査区東端付近で確認した。北側のものは径が80cmほどで深さが25～35cmの半球形であるのに対し、南のものは径が50～75cm、深さが13～30cmと半球形を呈し一回り小さい。これらも壺が据わった状態では確認できなかったが、痕跡内からその破片が出土した。この他地業132の西端の上面で、鎌倉時代初頭の土器溜119を確認した。東西2m、南北5mの規模で不定形を呈し、10cmほどと浅いが土師器皿を多量に密集した状態で確認した。また調査区東南隅で長方形の土壙SK7を確認した。東西1.4m以上、南北1.7mで深さ30～35cmを測り、底はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がって、特に施設は認められなかった。遺物の出土は目立たないが、鎌倉時代初頭～前半のものと考えられる。

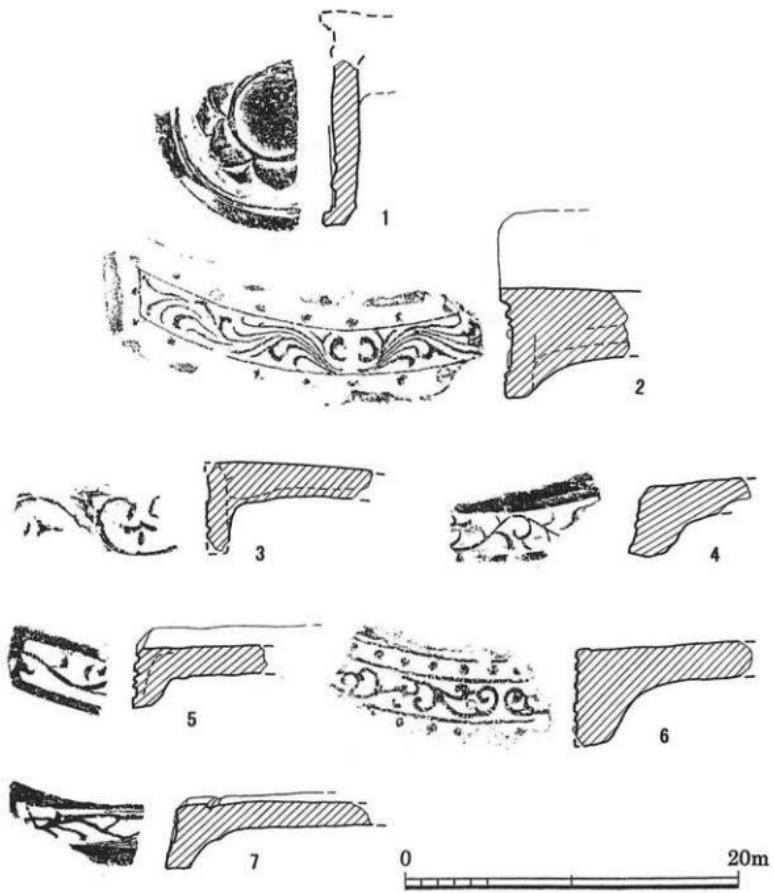
また壺倉SK54と壺倉SK100との間や調査区南端付近には30～40cmほどの小さな柱穴が数多く確認でき、埋め土や出土遺物から鎌倉時代初頭～南北朝期にかけての数時期に亘るものであることが判明したが、建物にまとまる様な列や並びは確認できなかった。

### 3. 遺 物

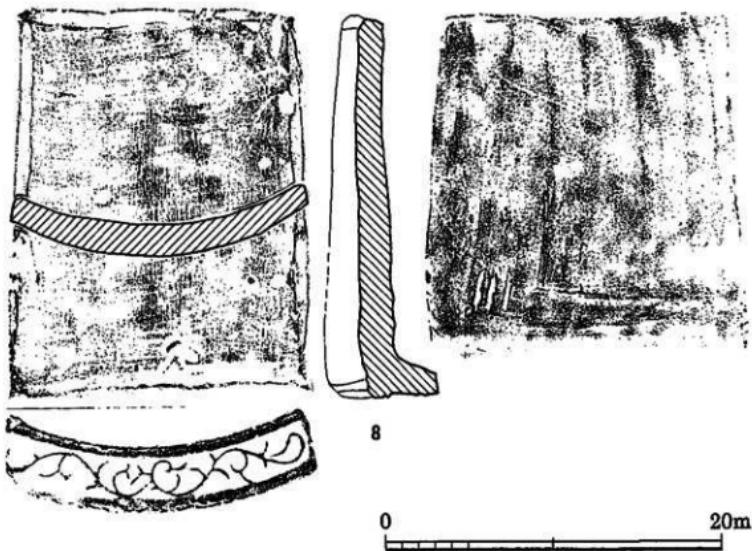
時 代	出土地	遺 物	備 考
平安 時 代 以 前	包含層	土器小片	
平安 時 代 後 期	地業	土師器皿・高坏脚部・壺・鍋、須恵器壺・片口鉢、東播系須恵器捏鉢、瓦器椀・羽釜・鍋、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・箸	
平安 時 代 末 ～鎌倉 時 代 初 頭	土器滲り、木組井戸、土塙、柱穴	土師器皿・高坏脚部・壺・羽釜・鍋、須恵器壺・片口鉢、東播系須恵器捏鉢、瓦器椀・羽釜・鍋、常滑壺、灰釉椀、山茶椀	
鎌倉 時 代 初 頭 ～鎌倉 時 代 前 半	石組井戸、木組井戸、土塙、壺倉、壺据え付け跡、柱穴	土師器皿・高坏脚部・壺・羽釜・鍋、須恵器壺・片口鉢、東播系須恵器捏鉢、瓦器椀・羽釜・鍋、青磁小皿・速弁文椀、常滑壺、灰釉椀、山茶椀、軒丸瓦・平瓦・木器井戸枠、曲物	
鎌倉 時 代 前 半 ～鎌倉 時 代 後 半	木組井戸、柱穴	土師器皿、瓦器椀・羽釜	
鎌倉 時 代 後 期 ～南北朝 時 代	壺倉、柱穴	土師器皿・壺・羽釜、常滑大壺、青磁椀	
近 代	漆喰井戸	陶磁椀、染付椀	

#### 出土遺物の概要

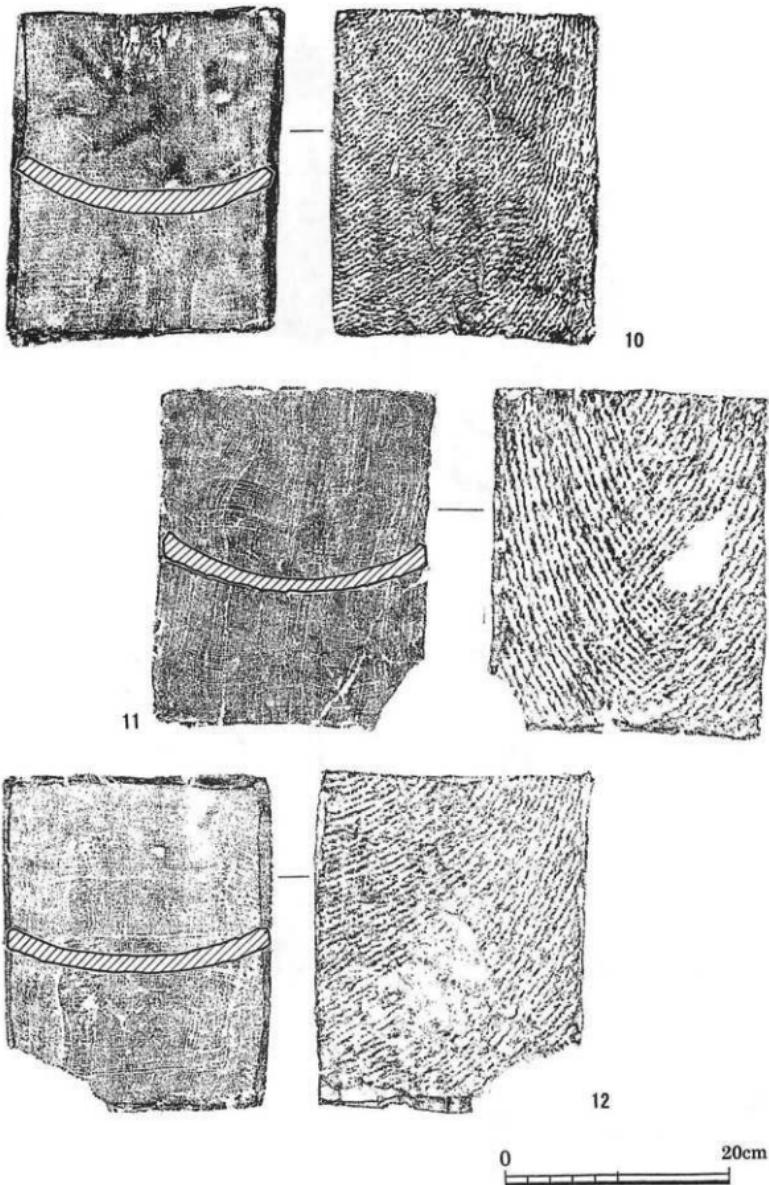
今回の調査で出土した遺物は、整理箱で43箱である。その時期の中心は平安時代末期から鎌倉時代である。器種別に遺物出土量を見ると土師器が圧倒的多数を占めており、ついで須恵器、瓦器、瓦などが出土している。平安時代末期の遺物は地業から出土している。地業SX132からは12世紀中～後半頃の土師器皿が多量に確認された。また拳大の石に混ざって12世紀後半の唐草文軒平瓦がほぼ完形で3点、出土している。SX132の北東隅にとりつくように確認されたSX3からは土師器皿、須恵器壺、平瓦などが出土している。ここでは土師器皿が箸と共に集中して多量に出土している。また木組みの掘形の南東部分には平瓦が並んで確認された。平瓦は木組みの内側に木に沿って南東隅から3枚並んでおり部分的に2重、3重になっていた。鎌倉時代に入ってからの遺物は土器滲り、井戸、壺倉、土塙などが出土している。土器滲りSX119からは12世紀末期から13世紀初頭にかけての土師器皿がコンテナーで7箱と多量に出土している。この中には皿の内面に人の顔を墨で表現したものが1点確認された。この時期の井戸は石組1基、木組み5基の計6基が確認されている。出土遺物は土師器皿、羽釜・須恵器壺・片口鉢・瓦器椀・羽釜・鍋・灰釉椀・青磁速弁文椀、平瓦などが各井戸から出土している。壺倉SK54は土師器皿、へそ皿、壺、羽釜・須恵器壺・鉢・瓦器椀・羽釜・青磁小皿・速弁文椀、常滑大壺、山茶椀などが出土している。この時期以後は遺構、遺物とも少なくなり14世紀中頃の壺倉SK100から土師器皿、壺、羽釜・常滑大壺・青磁椀などが出土している。平安時代以前の遺物としては砂礫層の中から古墳時代の土師器と思われる小片が1点出土したのみである。



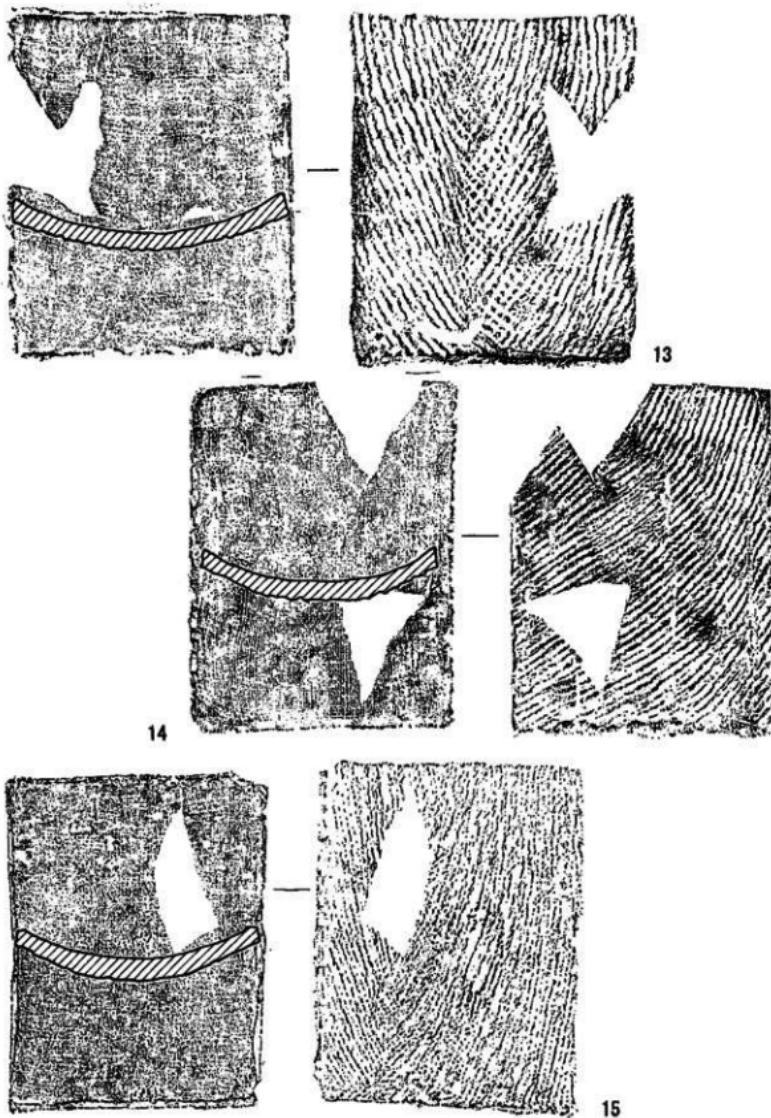
第5図 出土瓦（軒丸瓦・軒平瓦）



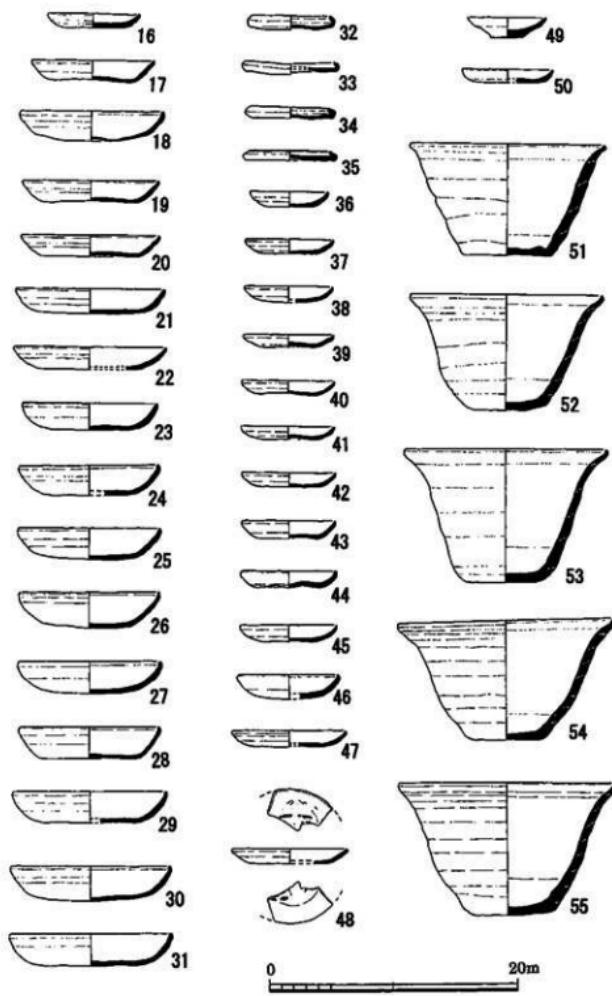
第6図 出土瓦（軒平瓦）



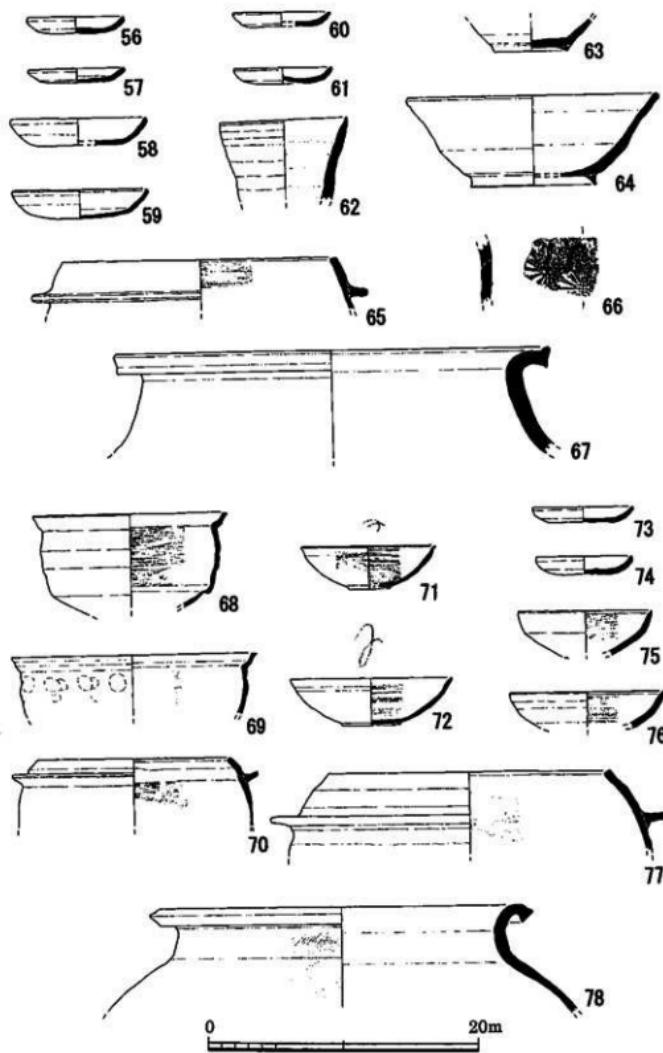
第7圖 出土瓦（平瓦）



第8圖 出土瓦



第9図 出土遺物



第10図 出土遺物

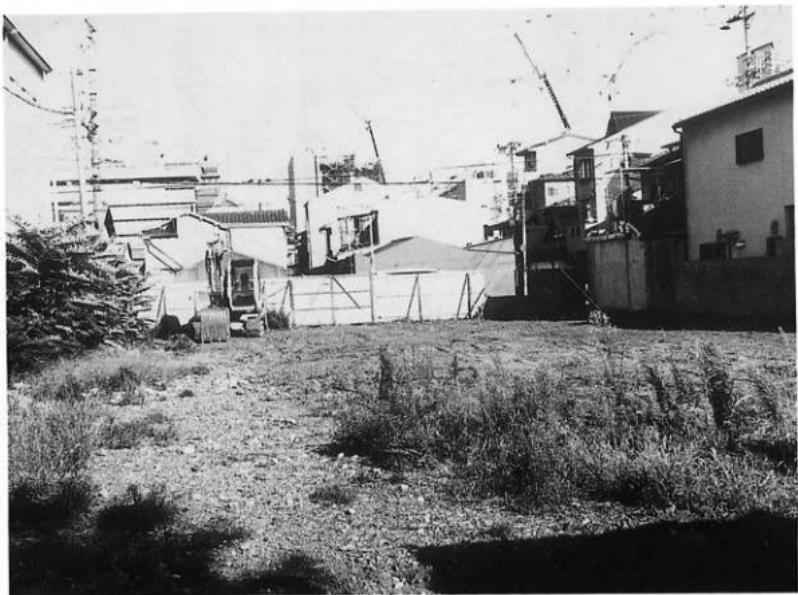
## 4. まとめ

今回の調査で平安時代後期から南北朝期の5時期に亘る造構群の変遷を明らかにすることができた。その主要な成果について以下にまとめる。

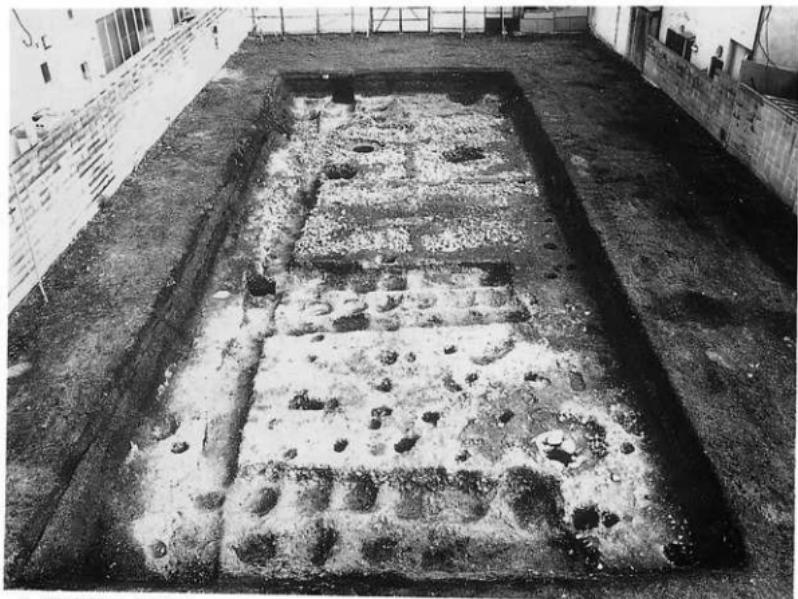
まず平安時代後期の地業についてである。その具体的な時期を示すものに、地業SX132から出土した3点の軒平瓦があげられる。この内1点は平安時代中期に属するが、残りの2点は平安時代後期の唐草文軒平瓦である。これは半折れ曲げ技法軒平瓦で、京都の橋枝近辺で生産された中央官衙系瓦屋の製品である。瓦の上限年代を知るものとして、同范瓦は康和四年（1102）堀河天皇により発願・供養されて造営された尊勝寺から出土している。また下限年代を知るものとして、退化した文様は久寿二年（1155）大藏卿源師行が供養し建立した醍醐稻森八角円堂から出土している。のことからこの軒平瓦は1102年～1155年にかけて製作されたことが伺える。即ちこの地業が造営された年代がこの期間であることが伺える。当該地は、『拾芥抄』所蔵の「東京図」によると『九条殿』のすぐ北に位置する。この九条殿とは、関白藤原忠平の子師輔の邸宅で、有職故実の九条家の始祖としてしられる。師輔は天德四年（960）この九条殿で53歳の生涯をとじている。出土した瓦の年代に相当するものに嘉承元年（1106）6月22日斎宮善子内親王（白河天皇皇女）の母が九条に御堂を供養する記事がある（『中右記』）。この御堂を建立した場所は、師輔が領有した「九条殿御所」の跡であったことが知られる。またこの師輔邸の東辺には藤原道長の孫信長の九条邸があったことが知られる。信長は太政大臣であった応徳二年（1085）10月、邸宅の一角に一堂を建て丈六の仏像を安置して長寿を願い、九条堂を称したという（太政大臣藤原信長造九条堂告文）。この九条堂がのちに常興寺となる。常興寺はもと天台座主最雲法親王から弟子の高倉宮以仁王に伝領されたが、この時点で以仁王から天台座主明雲に知行が移ったという。そしてこの常興寺は九条に所在して信長が建立したという注記が残されている。地業のあったところは、その南端が樋口小路の北築地心に相当することから、敷地は樋口小路を取り込んでいたと考えられ、『拾芥抄』記載の「九条殿」の敷地と繋がっていたと考えられる。このような造構の有り方や文献記載からして、この地業は斎宮善子内親王（白河天皇皇女）の母が供養した九条の御堂の一部分であった可能性がある。

また常興寺は鎌倉幕府になってから後院領にすべきか否かが問題となっている（『玉葉』建久三年（1192）9月2～4日条）。このことからこの地域は御堂や邸宅が廃絶していたことがうかがえる。今回検出した造構群の変遷を見ると、12世紀末に地業が廃絶し、町屋に関する造構群が新たに出現し、当該地域が町場化したことが伺え、この文献記録を裏付けていると考えられる。しかも堺倉の存在から、酒屋ないし油屋に関連した町屋と考えられ、その消長は七条町や八条院町同様、南北朝～室町時代前半に急速に消滅することと軌を一にする。

# 図 版



1 調査前全景（西から）

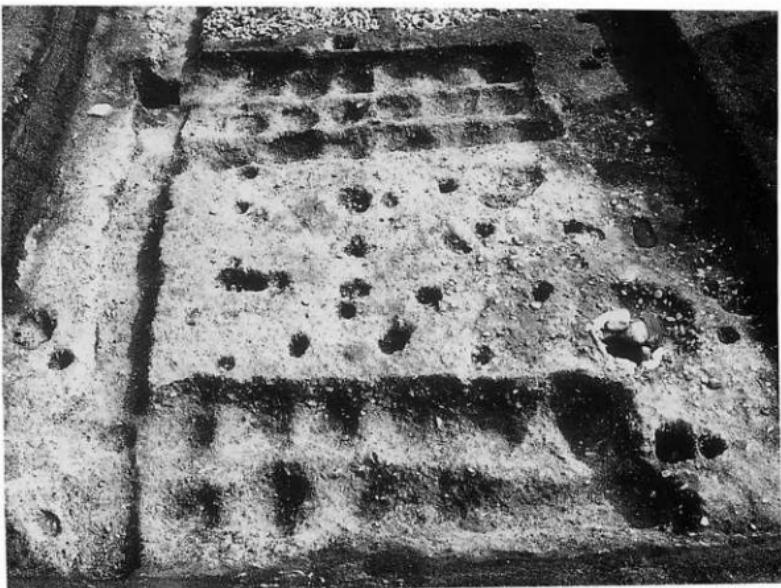


2 調査区全景（西から）

図版  
2



1 地業SX132（東から）



2 売倉SX54（奥）売倉SX100（手前）（西から）

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうないごいせき						
書名	平安京左京内5遺跡						
副書名	平安京左京九条三坊一町跡						
巻次							
シリーズ名	平安京跡研究調査報告						
シリーズ番号	第22編						
編著者名	堀内明博・江谷 寛						
編集機関	〈財〉古代學協会						
所在地	〒604-8131 京都市中京区三条高倉 TEL 075 (252) 3000						
発行年月日	平成20年11月30日						
ふりがな 所収遺蹟	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺蹟番号	東経 ***	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
へいあんきょ うさきょうく じょうさんぼ ういっちょ あと 平安京左京九 条三坊一町跡	きょうとしみな みくにしくじよ ういんちゅう 京都市南区西九 条院町21	26100	34度 58分 48秒	135度 45分 34秒	2000年 9月28日 ～ 11月8日	250	建物建築 工事
所収遺蹟名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平安京左京九 条三坊一町跡	都城跡	平安時代以前	包含層	土器小片			
		平安時代後期	地菜	軒丸瓦・羽釜 東播系捏鉢			
		平安末～鎌倉初	木組井戸、土器溜り 柱穴	東播系鉢、常滑、鍋 灰陶、山茶碗、羽釜			
		鎌倉初～鎌倉前半	甕倉、石組井戸、木組井戸 甕接付跡	東播系鉢、青磁 灰陶、常滑、山茶碗			
		鎌倉前半～後半	木組井戸、柱穴	土師器、瓦器、羽釜			
		鎌倉後期～南北朝	甕倉、柱穴	常滑大甕、青磁碗、 山茶碗			
		近世	漆喰井戸	陶磁器、染付椀			

## 平安京跡研究調査報告 第22輯

発行日 平成20年11月30日

編集 財團法人 古代學協会  
発行 〒604-8131 京都市中京区三条高倉  
振替 01080-4-850  
TEL 075-252-3000

印刷 株式会社 吉川印刷工業所  
〒601-8353 京都市南区吉祥院道登中町45-1  
TEL 075-691-8186 FAX 075-661-1825

**PALEOLOGICAL STUDIES  
IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XXII**

**EXCAVATION OF FIVE SITES  
IN THE PARS ORIENTALIS OF THE  
CAPITAL HEIAN**

**THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.**

**KYOTO, MMVIII**